４世紀の韓日関係史

－広開土王陵碑文の倭軍問題を中心に－

金 泰 植

目 次

要 旨
Ⅰ．はじめに
Ⅱ．『日本書紀』神功皇后関連記事の問題点
　１．神功紀49年条記事の研究史
　２．神功紀49年条記事の意味
Ⅲ．広開土王陵碑文の倭記事とその性格
　１．辛卯年記事の検討
　２．永楽九年己亥条の検討
　３．永楽十年庚子条の検討
　４．永楽十四年甲辰条の検討
　５．碑文所載の倭軍の性格
Ⅳ．韓国と日本の４世紀の武装体系比較
　１．遺蹟概観
　２．高句麗の武装体系
　３．百済の武装体系
　４．加耶の武装体系
　５．倭の武装体系
Ⅴ．４世紀東アジア情勢と韓日関係
　１．中国の情勢
　２．高句麗の情勢
　３．百済の情勢
　４．新羅の情勢
　５．加耶の情勢
　６．倭国の情勢
　７．４世紀の韓日関係
Ⅵ．おわりに
【文献目録】
【史料】

要 旨

４世紀の韓日関係史については任那日本府説に立脚して、４世紀から韓半島南部は日本列島の倭国から直接、または間接の支配を受けていたという仮説があり、これは『日本書紀』と広開土王陵碑文についての表面的理解からはじまった。

しかし、倭の任那征伐を記録している『日本書紀』神功皇后関係記事について、最近の学者はその記事および史実をみな否定したり、またはその主語を百済に替えて理解する姿勢を見せている。それ故に、この史料を利用して 369 年に倭がまたは百済が軍事征伐を断行して加耶地域を征服したと見ることはできない。

広開土王陵碑文には韓半島南部および中部地方で倭軍が活動した痕跡が記録されているが、ほかの国に比べて遠く離れた所から来たことに比べてその活動が誇張されている。そうであれば彼らはどうのような性格の存在であったであろうか。

４世紀後半の東アジア情勢には東晋と前秦の葛藤もあったが、韓半島関連の国際情勢の基本は高句麗と百済の両大強国の対決の構図であった。両国は４世紀後半に帯方故地を間に置いて 30 年あまりの間激烈な戦争を繰り広げた。それに比べれば韓半島南部の新羅と加耶はそれに付随的に連動して動く側面が強かった。

一方、加耶と倭は２～３世紀以来４世紀まで相互の間に緊密な交流関係をもっていた。その関係は４世紀後半に両地域の情勢の変動、すなわち、金海の加耶国を中心とした加耶連盟の再統合と日本列島の畿内の河内地域を中心とした新興勢力の出現によってさらに強化された。両者の交流関係は伝統的な鉄素材と威勢品の交易に加えて、加耶の軍需物資の輸出および倭の軍事力動員の問題が重要視された。

４世紀後半には、百済は高句麗との対決をする過程で、新羅を牽制するために加耶を支援して、加耶を媒介にして倭と連結した。そのような中で百済が劣勢に陥るや、それらは加耶と倭の間の伝統的な人的・物的資源交易の慣行を利用して倭軍を引き入れた。その結果、倭は両者の間の必要に応じて交流していた加耶のために高句麗と百済の間の戦争に動員され人命損失の大きな対価を払って文化的利益を得たのである。

また、そのような戦争の発生地であった加耶からは多くの流亡の民が発生して、その中の一部は日本列島に渡って馬具類と金属加工術、陶質土器および製作技法を伝えもした。これを韓日間の単純な交易、または日本における主体的な文物受容、甚だしくは任那経営の結果とまでするが、これは事態の本質に迫る見解とはいいがたい。

キーワード　高句麗、百済、加耶、倭、任那日本府説、広開土王陵碑文

Ⅰ．はじめに

４世紀は東アジアの歴史において大きな変革の時期であった。古代中国においても韓国においても日本においても、４世紀は新たな時代を志向する最初の一歩が踏み出された時期であった。そうしたなかで４世紀の韓国と中国の関係においては、主として高句麗と前燕・前秦・後燕の間で攻防と小康を繰り返し、その結果、高句麗は５世紀初に遼東を領有するようになった。

しかし４世紀の韓国と日本の関係については未だに説明体系が安定していない。その核心は広開土王陵碑文にみえる倭軍の性格をどのように把握するかという問題である。そこで本論文では、韓半島系移住民が日本列島で活動した内容をとりあげず、問題の重点を韓半島に入ってきた倭人の問題に置く。広開土王陵碑文の記事は４世紀末、５世紀初の状況を表しているが、これはそれ以前から続いてきた韓日関係の延長線上に現れたものであるから、４世紀の韓日関係を全般的に検討する必要がある。

４世紀の韓日関係史に対する研究史の核心は、倭による所謂“任那支配”体制の成立如何にある。このような見解は 1949 年に刊行された末松保和の『任那興亡史』[1]において主張されたことであるが、これは戦前の日本古代史学界の伝統的な理解[2]に基づく大和王権論を整理したものである。これによれば、『日本書紀』神功皇后条よりみて、366 年に百済が倭に宝物を送り出兵を要請するや、369 年に倭は大規模な出兵により加耶諸国を破り服属させて、百済の朝貢誓約を受け、その結果、倭と百済の関係が成立すると同時に任那が成立したという[3]。また広開土王陵碑よりみて、その後、倭軍はこれを地盤として 391 年から 405 年まで、広開土王の南征をむかえて、これに絶えず反撃することにより、そこに扶植した倭の勢力を一層強固にしたというのである[4]。ただ倭の任那の地盤に関する証拠はなく、自らも「任那には大和朝廷から常規的支配者が設置された形跡が当然あるべきである」〔下線：筆者〕[5]として推測に終始している[6]。

そのような不充分さにも関わらず、任那の成立に対する末松の整理は、その後さまざまな学者によってほとんどそのまま受け入れられた。福山敏男は七支刀銘文の太和四年（369）説によってこれを補完し[7]、三品彰英は神功紀 49 年条の根拠になってとみられる『百済記』など“百済三書”の史料的な価値を高く評価することによって補完した[8]。

しかし 1970 年代以後、日本史学界では既存の南韓経営論に対する反省がおこりはじめた。新しい研究動向はいわゆる“任那支配”の性格を違う形に推定したり、その期間を縮小してみたりした。井上秀雄は任那日本府説の出発点となった『百済記』関連史料の信頼性に疑問を提起し[9]、日本の学者の研究と

---

1 末松保和, 1949『任那興亡史』大八洲出版；1956 再版 吉川弘文館, 東京

2 那珂通世, 1888「日本上古代考」『文』1-8･9；1958『外交繹史』第１巻, 那珂通世遺書, 岩波書店, 東京

3 末松保和, 1956 前掲書, 46～63 頁

4 末松保和, 1956 前掲書, 77～78 頁

5 末松保和, 1956 前掲書, 257 頁。「間接支配の百済・新羅に、大和朝廷から常規的支配者が置かれた形跡のないことは上に述べたが、それに対して直接支配の任那には、当然あるべきである。」

6 彼が任那に対する常規的支配者の証拠としてあげたのは、木満致のみである。任那成立当時の常備軍の証拠としては、広開土王陵碑文の倭軍しかあげられなかった。しかし木満致は５世紀後半に日本に渡った百済貴族と推定され、広開土王陵碑の倭軍は、後述するように任那を支配する常備軍であるという証拠にはならない。

7 福山敏男, 1951「石上神宮の七支刀」『美術研究』158

8 三品彰英, 1962『日本書紀朝鮮関係記事考証』上巻, 115～176 頁

9 井上秀雄, 1973『任那日本府と倭』東出版, 東京, 42 頁

しては最初に倭王権の軍事征伐による任那支配を否認した[10]。

その後、山尾幸久は倭王権による任那経営の契機と方式を５世紀後半の百済貴族木満致の倭国移住と関連づけて捉えた[11]。請田正幸、大山誠一、鈴木英夫、田中俊明などは任那日本府問題に対する専門的な論考をものし、これを４～５世紀段階とは関連づけられないと捉えた[12]。

すなわち1970年代および1980年代にかけて、４世紀の倭王権の軍事征伐による任那支配という観念は学界から廃棄されたのである。その場合、広開土王陵碑文の永楽 10 年庚子条の戦況からみて、４世紀の任那加羅と倭は提携または連合の関係にあったと捉えた[13]。４世紀の韓日関係に対する近来の学界の研究動向は主として加耶と倭の間に緊密な交流があったことを強調している[14]。

ところが相当数の日本史概説書や教科書では、これとは異なり任那日本府は古代日本の強い武力の証拠であり文化発展の前提条件であるとみなし、４世紀後半に倭が加耶地域に勢力を張り、またはそこに進出して拠点をおき、強い影響力のもとに置いたと叙述している[15]。そして1990 年代に入り、日本の一歴史学者は「いまの学界においては、「任那日本府」論は、すでに過去のものとなり、あらためてそれを否定するまでもないこと、であるはずだが、現実には（日本の一般人には)、どうもそうでないようである」［括弧内：筆者］[16]と率直に述べている。このような傾向は 2000 年代に入っても大きく変わっていない。

４世紀の韓半島を基準としてみるとき、北方では313 年と314 年に高句麗が楽浪郡と帯方郡を併合して大きく膨張し、南韓ではすでに初期古代国家を形成していた百済の先導的発展に続いて加耶と新羅もそれぞれ弁韓と辰韓の小国連盟体の盟主として当該地域の対外関係を主導するようになった[17]。そのう

---

10 井上秀雄, 1973, 前掲書, 東京, 71～91 頁

11 山尾幸久, 1978「任那に関する一史論－史料の検討を中心に－」『古代東アジア史論集』下巻, 末松保和博士古稀記念会編,吉川弘文館, 東京；1989 『古代の日朝関係』塙書房, 東京,113～127 頁

12 請田正幸, 1974「六世紀前期の日朝関係－任那‘日本府’を中心として－」『朝鮮史研究会論文集』11；1974『古代朝鮮と日本』朝鮮史研究会編, 龍渓書舎, 東京, 194 頁

大山誠一, 1980「所謂「任那日本府」の成立について」『古代文化』32-9･11･12, 古代学協会, 京都

鈴木英夫, 1987「加耶・百済と倭－「任那日本府」論」『朝鮮史研究会論文集』24, 67,75 頁；1996『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店, 東京, 183～184 頁

田中俊明, 1992『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館, 東京, 86～90 頁

13 千寛宇, 1978「復元加耶史・中」『文学과 知性（文学と知性)』29, 文学と知性社, ソウル, 920 頁；1991『加耶史研究』一潮閣, ソウル, 27 頁

鈴木英夫, 1996『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店, 東京, 54 頁

鈴木靖民, 2002「倭国と東アジア」『倭国と東アジア』鈴木靖民編, 日本の時代史２, 吉川弘文館, 22 頁

14 白石太一郎･上野祥史編, 2004『国立歴史民俗博物館研究報告』110, 第５回歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流, 国立歴史民俗博物館, 佐倉

15 網野善彦（李根雨訳）, 1999『日本社会の歴史（上)』翰林新書 日本学術叢書 42, 図書出版ソファ, 64～103 頁

吉田孝, 1997『日本の誕生』岩波新書, 東京, 74～78 頁

西尾幹二ほか 13 名, 2001『中学社会 新しい歴史教科書』扶桑社, 東京

大濱徹也ほか 11 名, 2001『中学生の社会科 歴史－日本の歩みと世界』日本文教出版, 大阪

村尾次郎ほか 25 名, 2002『高校 最新日本史』明成社, 東京

山川出版社編, 2002『高校 要説世界史Ａ 改訂版』東京

16 田中俊明, 1992 前掲書, 38 頁

17 辺太燮, 2002『韓国史通論 四訂版』三英社, ソウル, 74～83 頁

国史編纂委員会･国定図書編纂委員会, 2003『고등학교 국사（高等学校 国史）』教育人的資源部, ソウル, 49～51 頁

え1970年代以後に洛東江流域に対する考古学的発掘成果が大挙して蓄積され[18]、加耶史の独自的展開過程に対する新たな研究成果が整理されている[19]。

それにも関わらず、一部の概説において4世紀後半の任那成立を論じるのは、古い先入観の繰り返しにすぎない。そのような見解の基本史料をなすのは『日本書紀』神功皇后 49 年条の記事と広開土王陵碑文の倭軍の活動に関する記事である。それゆえ本稿では当該史料に対する既往の理解と問題点を検討した後に、これに基づいて4世紀の韓日関係の展開過程を整理しようと思う。

Ⅱ.『日本書紀』神功皇后関連記事の問題点

1. 神功紀 49 年条記事の研究史

神功紀 49 年条の記事はいわゆる「南韓経営論」の主な根拠となる史料である。倭が加耶地域に軍隊を進出させ平定したという記事は、神功紀 49 年条が唯一である。それゆえこの史料を再検討することが緊要である。

神功紀 49 年条の記事は、『日本書紀』より 10 年先だって作成された『古事記』には全く見られないものであり、同 46 年条から 52 年条にわたる記事群だが、その 47 年条記事に『百済記』が引用されており[20]、神功紀後半の記事群が全般的にこれを根拠としたものと推定できる。これを含め『日本書紀』には百済関連資料が多く現れる。これらはいわゆる「百済三書」、すなわち『百済記』『百済新撰』『百済本記』を土台とする資料だが、その性格に対しては様々な論議がなされた。これを簡略に要約すると次のようである。

既存の主要研究では、それらの記事は『日本書紀』撰者が天皇中心制史観に合わせ全体的に改作したものであるとか[21]、元来百済で編纂された百済三書からほとんどそのまま『日本書紀』に転載されたものであると主張された[22]。また、それに続き、百済三書の人名や地名に使われた字音假名字は全て『万葉集』と同じ推古朝遺文の表記法と高い近似性を見せるであるとか[23]、百済から亡命した百済人または百済王後裔の氏族が7世紀末に自分たちが持っていた資料の中から百済が過去日本に協力した痕跡を造作・再編集し、『日本書紀』編纂の修史局に提出したものである[24]とかいう点も強調された。そして近年

金泰植, 2003「初期 古代国家論」『강좌 한국고대사（講座韓国古代史）』第2巻, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 1～90頁

18 盧重国ほか5名, 1998『가야문화도록（加耶文化図録）』慶尚北道, 大邱

韓国考古学会編, 2000『考古学을 통해 본 加耶（考古学を通じてみた加耶)』韓国考古学会, 釜山

釜山大学校民族文化研究所編, 2003『가야 고고학의 새로운 조명（加耶考古学の新照明）』慧眼, ソウル

朴天秀ほか3名, 2003『加耶의 遺蹟과 遺物（加耶の遺蹟と遺物)』学研文化社, ソウル

19 金泰植, 1993『加耶連盟史』一潮閣, ソウル；2002 『미완의 문명 7백년 가야사（未完の文明 700年加耶史)』푸른역사（プルンヨクサ), ソウル；2004 『가야사（加耶史)』CD, 미디어채널（メディアチャンネル), ソウル

20 『日本書紀』巻9・神功皇后摂政47年条細註“千熊長彦者、分明不知其姓人。一云、武蔵国人。今是額田部槻本首等之始祖也。百済記云職麻那那加比跪者、蓋是歟也。”

21 津田左右吉, 1924『古事記及日本書紀の研究』岩波書店, 東京

丁仲煥, 1972「日本書紀에 인용된 百済三書에 대하여（日本書紀に引用された百済三書について)」『亜細亜学報』10, ソウル

22 三品彰英, 1962「百済記・百済新撰・百済本記」『日本書紀朝鮮関係記事考証（上)』吉川弘文館, 東京

23 木下礼二, 1961「“日本書紀”にみえる‘百済史料’の史料的価値について」『朝鮮学報』21・22合輯, 天理

24 坂本太郎, 1961「継体紀の史料批判」『國學院雑誌』62-9；1964『日本古代史の基礎的研究 上』東京大学出版会, 東京

山尾幸久, 1989「百済三書と日本書紀」『古代の日朝関係』塙書房, 東京

では、これらを全て認定し、①百済で編纂された某種の史料があり、②百済遺民がこれらを一部再編し日本朝廷に提出し、③『日本書紀』撰者がこれを全般的に潤色することで『日本書紀』の百済関連記事が成立したという総合的観点、すなわち三段階編纂論が通説だと言える[25]。したがって百済三書記事の史料的価値を過度に信頼することは危険である。

記事の成立過程に関する論議に留意しつつ、神功紀 49 年条の記事を精密に理解するためにその主要部分を翻訳し引用すると次のようである。

A．（1）［神功皇后摂政］49 年(249)春 3 月に荒田別、鹿我別を将軍とし、久氐等と共に軍士を率いて渡り卓淳国に至り新羅を襲撃しようとした。

（2）その時誰かが言った。

「兵士の数が少なく新羅を撃破できません。もう一度沙白と蓋盧を奉じてまつり上げ軍士を増員するよう要請しましょう」

そこで木羅斤資と沙沙奴跪〈この二人はその姓を知ることのできない人物である。ただ木羅斤資という者は百済の将軍である。〉に命じ、精兵を率いさせ沙白、蓋盧と共に送った。

（3）みな卓淳に集まり新羅を攻め破った。これにより比自㶱、南加羅、喙国、安羅、多羅、卓淳、加羅の 7 国を平定した。

（4）再び軍士を移動し西へ回り古奚津に至り、南蠻、忱彌多禮を取り百済に与えた。

（5）そこで、その王肖古と王子貴須も軍士を率いて来て集まった。この時比利、辟中、布彌支、半古の 4 邑が自ら降伏した[26]。

上の記事に対する既存説の理解のしかたは非常に複雑である。かつて、那珂通世は、日本に広開土王陵碑文が伝わってやや後に、神功紀 49 年(249)己巳年の事実を干支二運下らせ、紀年を下向調整したうえで、記事の内容自体はそのまま信頼する姿勢を見せた[27]。末松保和は那珂の研究が任那史研究の過去の成果中でもっとも基本的な基準であると評価してそのまま受容し[28]、その上に鮎貝房之進の文献考証による任那に関連する地名の比定結果[29]を大幅に取り入れた。それから、369 年に任那成立の誘導的役割を果たしたのは、高句麗と新羅を同時に対峙する必要に直面した百済であったという国際的情況を追

---

25 高寛敏, 1993「『日本書紀』所引「百済本記」に関する研究」『高句麗･渤海と古代日本』雄山閣, 東京 ; 1994「『日本書紀』所引「百済記」と「百済新撰」に関する研究」『朝大学報』1

李根雨, 1994「日本書紀에 인용된 百済三書에 관한 研究（日本書紀に引用された百済三書に関する研究）」韓国精神文化研究院韓国学大学院博士学位論文, 城南 285~286 頁

延敏洙, 1998『고대한일관계사（古代韓日関係史）』慧眼, ソウル, 46 頁

26『日本書紀』巻 9 神功皇后摂政 49 年春 3 月条「以荒田別･鹿我別爲將軍。則與久氐等共勒兵而度之、至卓淳國、将襲新羅。時或曰、兵衆少之、不可破新羅。更復、奉上沙白･蓋盧、請増軍士。即命木羅斤資･沙沙奴跪［是二人不知何姓人也。但木羅斤資者百濟將也］領精兵與沙白･蓋盧共遣之。俱集于卓淳、擊新羅而破之。因以平定比自㶱･南加羅･喙國･安羅･多羅･卓淳･加羅七國。仍移兵、西廻至古奚津、屠南蠻忱彌多礼、以賜百濟。於是其王肖古及王子貴須亦領軍來會。時比利･辟中・布彌支･半古四邑自然降服。」

27 那珂通世, 1888「日本上古年代考」『文』1－8･9 ; 1958『外交繹史』第 1 巻, 那珂通世遺書, 岩波書店, 東京, 37～39 頁

28 末松保和, 1949『任那興亡史』大八洲出版 ; 1956, 再版, 吉川弘文館, 東京, 17 頁

29 鮎貝房之進, 1937「日本書紀朝鮮関係地名攷」『雑攷』7, 上･下巻

加することで[30]、その記事の信憑性を蘇らせた。

一方、津田左右吉や池内宏は、この記事が『百済本記』所載の６世紀前半の任那関係の史実に依拠して『日本書紀』編者が大々的な起源説話を作り出した虚構であるとし[31]、その事実性を全般的に否定した。しかしながら４～６世紀の倭の任那支配は当然と考えていた[32]。三品彰英は神功紀の記事が６世紀前半の欽明紀時点の百済聖明王の対加耶戦略を反映して纂述されたものだという[33]、いわゆる「反映法」の論理をうち立てた。しかし、彼も日本の加耶経営は４世紀後半に開始され、この時加耶７国がその範囲に含まれたと思われるとし[34]、任那経営を史実と認定した。このような津田、池内、三品の二重的見解は学者としての厳格性と時代の雰囲気の影響という現実的な乖離のもとで現れた自己矛盾の産物である。

1970 年代以後では日本内でも『日本書紀』の任那関連資料の史料的価値を批判的に見る研究が現れた。井上秀雄は『日本書紀』の原典研究を通じ、６世紀以前の文献史料は不確実であり[35]、神功紀の『百済記』関連記事は欽明・継体朝の投影であり[36]、『百済記』自体は百済が６世紀中葉に大和朝廷に迎合し、その軍事的援助を得ようと日本に提出したものであるために、これを通じて４世紀の出来事を知ることは出来ないとした[37]。請田正幸はさらに、いまや日本内でも武烈紀以前の任那関連記事に対しては信頼しないのが常識だと宣言した[38]。

神功紀の任那記事を否認するこのような態度はその後の学者に受容され、山尾幸久は『三国史記』百済本紀の木劦満致の記事を尊重し、A－⑵部分を既存の通説とは異なり三周甲下向調整し[39]、A－⑶の「七国」平定記事は「七枝刀」と「七子鏡」献上の縁起として神功紀編者が添加した作文に過ぎないとした[40]。大山誠一と鈴木靖民、鈴木英夫も神功紀の史料的価値を否定し、任那の成立過程を 532 年または 530 年の加耶の要請による軍隊派遣であると、遅らせてとらえた[41]。田中俊明はA－⑵・⑷・⑸の記事は 429 年の内容であるが、その中の南蠻忱彌多禮の攻取や比利等 4 邑の降服は木羅斤資の活躍をより一層輝かせるための造作であり[42]、369 年の内容である A－⑶の加羅 7 国平定記事は『日本書紀』編者

---

30 末松保和, 1956, 前掲書 46～63 頁

31 津田左右吉, 1924『古事記及日本書紀の研究』岩波書店, 東京, 644 頁
池内宏, 1947『日本上代史の一研究』近藤書店；1970, 再版, 中央公論美術出版, 53 頁

32 津田左右吉, 1913「任那疆域考」『朝鮮歴史地理研究』1；1964『津田左右吉全集』11 頁
池内宏, 上掲書（1970 年版）54 頁

33 三品彰英, 1962, 前掲書, 162～176 頁；2002, 第二版, 天山舎, 160～177 頁

34 上掲書, 176 頁

35 井上秀雄, 1973『任那日本府と倭』東出版, 28～29 頁

36 上掲書, 42 頁

37 上掲書, 111～112 頁

38 請田正幸, 1974「六世紀前期の日朝関係－任那‘日本府’を中心として－」『朝鮮史研究会論文集』11, 40 頁

39 山尾幸久, 1989『古代の日朝関係』塙書房, 東京, 113～127 頁

40 上掲書, 124 頁

41 大山誠一, 1980「所謂‘任那日本府’の成立について」上･中･下『古代文化』32-9･11･12, 古代学協会, 京都；1999『日本古代の外交と地方行政』吉川弘文館, 東京
鈴木靖民, 1984「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」『岩波講座 日本歴史』1（原始･古代 1）岩波書店, 東京
鈴木英夫, 1987「加耶･百済と倭－‘任那日本府’論」『朝鮮史研究会論文集』24；1996『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店, 東京

42 田中俊明, 1992『大加耶連盟の興亡と‘任那’』吉川弘文館, 東京, 86～90 頁

の造作であり、歴史的事実とは無関係であって、卓淳国に関する記事のみ加耶に関連したものと認定できるとした[43]。

一方、韓国の研究者は、初期から最近にいたるまで、これを倭の加耶征伐と認定したことはない。まず、李丙燾は、神功紀 49 年条の前部分に対しては言及せず、A－(4)・(5)部分に対してのみ事実性を認定し、百済近肖古王が 369 年に南征し、馬韓残余勢力を全て服属させたと主張した[44]。さらに千寛宇は、上の記事における比自㶱等 7 国を平定した主体を倭から百済へ変えてとらえねばならないと主張すると共に[45]、主体交替論の条件の下 A－(1)・(2)・(3)部分の事実性も認定した[46]。金鉉球は、史料をより慎重に分析し、千寛宇と大同小異な結論を下した[47]。このように神功紀を百済中心の修正論としてみる見解はその後も学界の一角で継承されてきている[48]。

しかし、韓国でも加耶史を専攻する研究者は、神功紀 49 年条の史料的価値に対し大部分否定的な姿勢を取っている。李永植はいくつかの内容的矛盾から A－(1)・(2)部分は倭の各氏族の家記類の段階で創作または誇張されたものであって事実として認定できず[49]、A－(3)・(4)部分は継体紀の後代の事実を年代的に遡及させたものであり[50]、A－(5)部分のみ歴史的事実として認定し、百済近肖古王代に忠南並びに全北地域に対する一時的な軍事活動があったとした[51]。延敏洙は、神功紀 49 年条の記事は大体 6 世紀前半に百済の意図を表す継体紀記事が重複して反映したものだとした[52]。また、神功紀 52 年条の七枝刀と七子鏡も、実際には 6 世紀初百済武寧王代に倭国に伝わった事実に基づいて、百済の対日服属起源説話の中に編入されたと見た[53]。

かつて、筆者は神功紀の史料的価値を疑問視することを基調としつつ、A－(3)の 7 国は金海の交易網が優越性を保持できる範囲に局限されていることから、これらが金海を中心とする交易体系として百済と連結されたという程度の意味を持つものであり、その実際は欽明紀 2 年 4 月条において百済の聖王が「昔、我が先祖であらせられる速古王・貴首王の時に、安羅・加羅・卓淳旱岐らが初めて使臣を送り互いに通じ、親好を厚く結んだ。」[54]ということが状況をより適切に表現しているととらえ[55]、その国名は

---

43 上掲書, 90 頁

44 李丙燾, 1959『韓国史 古代篇』震檀学会, 359～361 頁；1970「近肖古王拓境考」『百済研究』1, 忠南大学校百済研究所；1976『韓国古代史研究』博英社, ソウル, 511～514 頁

45 千寛宇, 1991『加耶史研究』一潮閣, ソウル, 24 頁, 160～162 頁

46 千寛宇, 1977･1978「復元加耶史」上･中･下『文学과 知性（文学と知性）』28･29･31；1991『加耶史研究』一潮閣, ソウル

47 金鉉球, 1985『大和政権の対外関係研究』吉川弘文館, 184～201 頁；1991「神功紀 加羅七国 平定記事에 관한 一考察（神功紀加羅七国平定記事に関する一考察）」『史叢』39；1993『任那日本府研究－韓半島南部経営論批判－』一潮閣, ソウル, 21～45 頁

48 朱甫暾, 1995「序説－加耶史의 새로운 定立을 위하여－（序説－加耶史の新たな定立のために－）」『加耶史研究－대가야의 政治와 文化－（加耶史研究－大加耶の政治と文化－）』慶尚北道, 大邱, 43～46 頁
盧重國, 1995「大加耶의 政治・社会構造（大加耶の政治･社会構造）」『加耶史研究－대가야의 政治와 文化－（加耶史研究－大加耶の政治と文化－）』慶尚北道, 大邱, 207～214 頁

49 李永植, 1995「百済의 加耶進出過程（百済の加耶進出過程）」『韓国古代史論叢』7, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 184 頁

50 上掲論文, 189～190 頁

51 上掲論文, 196～200 頁

52 延敏洙, 1998『고대한일관계사（古代韓日関係史）』慧眼, ソウル, 47～49 頁

53 上掲書, 51 頁

54『日本書紀』巻 19 欽明天皇 2年夏 4月条。「聖明王曰、昔我先祖速古王貴首王之世、安羅加羅卓淳旱岐等初遣使相通、厚結親好。」

55 金泰植, 1994「広開土王陵碑文의任那加羅와‘安羅人戍兵’（広開土王陵碑文の任那加羅と‘安羅人戍兵’）」『韓国古代史

３～４世紀当時の国名ではなく５世紀以後の後期加耶時代の国名を反映しているとした[56]。A－(4)部分は全南の忱彌多禮（康津郡兵営面または海南郡縣山面）地域に百済が第二の対倭交易の仲介基地を設定したことから出てきたことばと見て、ここに倭や百済の軍事行動はなかったと見た[57]。ただ、A－(5)の４邑は『三国史記』百済本紀温祚王26･27年条の馬韓滅亡記事と同36年条の古沙夫里城築城記事と同様、全北の金堤－古阜線までが実際に百済の領域に含まれていたことを意味する。

上のように見ると、日本の初期の研究者は記事の信憑性を認めるにせよ認めないにせよ、４世紀後半における倭の任那征伐を事実として肯定したが、1970年代を前後する井上秀雄の態度変化を契機として、記事並びに事実全てを否定する方向へ転換した。一方、韓国の初期の研究者は近肖古王の馬韓征伐のみ認定し、倭の加耶征伐を否定していたが、1980年代を前後して百済を主体とする観点が現れて以後、これを百済の加耶征伐と修正して受け入れ、あるいはそれすら否定する二元的な理解の方向に分かれた。

２．神功紀49年条記事の意味

上のような複雑な様相を見せる神功紀49年条記事から、どのような意味を見出すことが出来るのだろうか。

まず、A－(5)の近肖古王の経略による４邑降服という記事については、1970年代以後の日本人研究者は全て否定し、韓国人研究者は延敏洙を除外して、全て肯定する様相を見せているが、これは史料自体に対する態度の問題に過ぎず、この記事を巡る見解対立はそれほど熾烈ではない。特に比利、辟中、布彌支、半古の４邑の地名資料は『三国志』魏書東夷伝の馬韓54国中に卑離国、辟卑離国、不彌国、支半国、狗素国等の地名と一致度が高いために重要な史料の一つと見なすことができる。これは神功紀に引用された『百済記』の一部資料が史料的価値を認定され得るという点で重要である。

そうであるならば、神功紀49年條の別の部分はどの程度認定することが出来るのか？まずA－(1)部分を認定する学者は、1970年代以後では韓日共に誰もいない。これはその記事が日本古代氏族の伝承の要素を『日本書紀』撰者が変形・作文したに過ぎず、『百済記』のものと認定することは出来ないためである。

A－(2)・(3)・(4)の沙白、蓋盧、木羅斤資、沙沙奴跪等の人名表記と比自㶱、南加羅、㖞国、安羅、多羅、卓淳、加羅、並びに古奚津、南蠻忱彌多禮等の地名表記は日本側のものと見ることは出来ないので、これらの記事が『百済記』の原典から出たことは明かである。そうだとしても、その記事を全て信頼できるのではなく、百済中心的な誇張と日本本位の改変、後代的な用語表記などを排除しなければならないため、真相把握はほぼ不可能である。それゆえ神功紀49年条の記事を根拠として369年当時の事実を論じることはできない。

ただ、神功紀を紀年修正して、そこに『三国史記』百済本紀の記事を合わせて見ると、百済が加耶へ続く交易網を成立させ、平壌城を攻撃して高句麗を一度敗北させた直後に、倭国に使臣を送り、七支刀等を送ったとなっているが、これはどの程度事実なのか。19世紀末に七支刀が劇的に発見され、報告さ

論叢』6, 駕洛国史蹟開発研究院, 83～84頁；1997「百済의 加耶地域 関係史：交渉과 征服（百済の加耶地域関係史：交渉と征服）」『百済의 中央과 地方（百済の中央と地方）』（百済研究論叢 第5輯）忠南大学校百済研究所, 49～51頁；2002『미완의 문명 7백년 가야사（未完の文明700年加耶史）』第1巻, 푸른역사（プルンヨクサ）, ソウル, 137～143頁

56 金泰植, 1994, 上掲論文, 85頁

57 金泰植, 1997, 前掲論文, 50～51頁

れて以降[58]、神功紀の三韓征伐説話ならびに七国平定記事は 369 年の事実として認定する雰囲気が生まれたようである。しかし、日本の天理市石上神宮に現存する七支刀がどの時期のものであるかははっきりしない。これを４世紀後半のものだという見解が多いが[59]、実際には５世紀後半ないし６世紀前半のものである可能性を論ずる見解も有力である[60]。

特に韓国と日本に現存する金または銀の象嵌銘文がある刀剣、すなわち韓国昌寧校洞 11 号墳出土環頭大刀[61]、日本東京博物館所蔵環頭大刀[62]、埼玉県埼玉稲荷山古墳出土金象嵌辛亥銘鉄剣[63]、熊本県江田船山古墳出土銀象嵌大刀[64]等は、全て５世紀後半ないし６世紀前半のものであって、それが流行した時期がいつであったのかを示している。考古学的にみて、七支刀は鉄製三叉鉾、鉄製蛇行剣、有棘鉄器（＝有棘利器）などと形態的に類似しており、それらの遺物は６世紀前半に盛行したことを明らかにした論考[65]もある。

また、『日本書紀』に百済使臣が七支刀と共に持って行ったと記載される七子鏡は、円形鏡の縁に小さな円が七個彫られた青銅鏡である。ところで、このような鏡は 1971 年に武寧王陵から出土したことがある。その有様を見ると、青銅製円形鏡の外側枠と内側枠の間に円形のつまみが目を引く円形模様７個をおき、その間に細い線で彫られた四神と三瑞獣を一つずつ配置していた[66]。武寧王は523 年に崩御し、三年喪を経て525 年に埋葬されたから、この鏡は６世紀前半のものである。百済から倭国へ七子鏡を送ったとすれば、武寧王陵の鏡と類似したものであったと考えられる。七子鏡とは百済の武寧王陵の出土

---

58 星野恒, 1892「七枝刀考」『史学雑誌』37, 東京
菅政友, 1893「任那考」; 1907『菅政友全集』

59 福山敏男, 1951「石上神宮の七支刀」『美術研究』158 ; 1951「石上神宮の七支刀 補考」『美術研究』162 ; 1952「石上神宮の七支刀 再補」『美術研究』165 : 1969『日本建築史研究』再収録 ; 1971『論集日本文化の起源』第二巻, 平凡社, 東京, 再収録
榧本杜人, 1952「石上神宮の七支刀と其銘文」『朝鮮学報』3, 朝鮮学会, 天理
西田長男, 1956「石上神宮の七支刀の銘文」『日本古典の史的研究』理想社
三品彰英, 1962「石上神宮の七支刀」『日本書紀朝鮮関係記事考証』上, 吉川弘文館, 東京
藤間生大, 1968「七支刀」『倭の五王』岩波新書, 東京
栗原朋信, 1970「七支刀の銘文より見た日本と百済 東晋の関係」『歴史教育』18-4
上田正昭, 1971「石上神宮と七支刀」『日本の中の朝鮮文化』9
佐伯有清, 1977『七支刀と広開土王碑』吉川弘文館, 東京
神保公子, 1981「七支刀銘文の解釈をめぐって」『東アジア世界における日本古代史講座』3, 学生社, 東京
鈴木靖民, 1983「石上神宮七支刀名についての一試論」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上
李道学, 1990「百済 七支刀 銘文의 再解釈（百済七支刀銘文の再解釈）」『韓国学報』60, ソウル
木村誠, 2000「百済史料としての七支刀銘文」『人文学報』306, 東京都立大学人文学部

60 李丙燾, 1974「百済七支刀考」『震檀学報』38, 震檀学会, ソウル ; 1976『韓国古代史研究』博英社, ソウル, 再収録
金錫亨, 1963「삼한 삼국의 일본열도 내 분국에 대하여（三韓三国の日本列島内分国について）」『력사과학（歴史科学）』1963-1 ; 1966『초기조일관계연구（初期朝日関係研究）』平壌
宮崎市定, 1992『謎の七支刀－五世紀の東アジアと日本－』中央公論社
延敏洙, 1994「七支刀銘文の再検討－年号の問題と制作年代を中心に－」『年報朝鮮学』4

61 韓永熙・李相洙, 1990「昌寧校洞 11 号墳出土有銘圓頭大刀」『考古学誌』2, 韓国考古美術研究所, ソウル

62 早乙女雅博・東野治之, 1990「朝鮮半島出土の有銘環頭大刀」『MUSEUM』467

63 埼玉県教育委員会編, 1980『埼玉稲荷山古墳』

64 東京国立博物館編, 1993『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』吉川弘文館, 東京

65 村上英之助, 1978「考古学から見た七支刀の製作年代」『考古学研究』25-3, 95～102 頁

66 文化財管理局, 1973『武寧王陵発掘調査報告書』35（図版 62）

鏡と日本出土の七獣帯鏡を指すという見解[67]がまさにそれである。そうであるならば、七支刀は525年頃、またはそれより前の近い時期に作られたと見なければならない。すなわち、七支刀の存在が神功紀の史料的価値を保証することはできない。

したがって、神功紀49年条の記事は369年または429年に百済や倭が軍事征伐を断行し、加耶地域を征服したことを指摘する史料としては認定できない。これは4世紀後半または5世紀前半のある時期、またはその間のいくつかの時期にわたって百済が優秀な先進文物を持って加耶地域の親新羅的小国と全南海岸地帯の一部小国と通交するようになったことを誇張歪曲したものである。百済と倭との関連はより後代のことを遡及して適用した可能性が高い。神功紀を通じて4世紀後半の加耶関連の事実として認定できることは、昌原の卓淳国（＝彌烏邪馬国）、すなわち任那の仲介活動によって百済と倭が連結されたということのみである。

Ⅲ．広開土王陵碑文の倭記事とその性格

１．辛卯年記事の検討

古代日本の発展の原動力は何か。4世紀末、5世紀初に、日本列島の倭は東アジアにおいて如何なる位置を占めていたか。このような問いに対する答えとして必ず挙論されるのが、遠く中国遼寧省集安県にある広開土王陵碑文に現れた倭関連記事である。

そこには明らかに、倭、倭人、倭賊、倭寇と表現された存在があり、彼らは韓半島内で高句麗と戦争をくりひろげる相手として明示されている。もちろん、広開土王陵碑文で高句麗との戦争相手として挙論された存在は、その他にも、稗麗、百残、息慎、東夫余などがある。

他の国は大抵、記事が一度だけ現れ、位置の上から見れば、全て高句麗と隣接しているが、ただ一つ倭だけは遠く離れた国であるにも関わらず、何度も現れる理由は何であろうか。ある者はこれを倭王権と高句麗の間の17年戦争と大々的に認定する場合もある[68]。もちろん、そこでもこの戦争は百済が主導し、倭が従ったものと推定している[69]。それならば、その表現は異なっていなければならないであろう。

広開土王陵碑に倭関連記事が現れる条項は、いわゆる辛卯年記事、永楽9年己亥(399)条、10年庚子(400)条、14年甲辰(404)条である。その該当条項の「倭」字に対する歴代の判読文の対照表は、次の＜表1＞のとおりである[70]。

---

67 樋口隆康, 1972「武寧王陵出土鏡と七子鏡」『史林』55-4, 13～16頁

68 鈴木靖民, 2002「倭国と東アジア」『倭国と東アジア』（鈴木靖民編, 日本の時代史 2）吉川弘文館, 17頁

69 上掲論文, 22頁

70〈表1〉の作成に参考とした論著は次の通り。

横井忠直, 1889「高句麗古碑考」『會餘録』第5集, 亜細亜協会

三宅米吉, 1898a「高麗古碑考」『考古学雑誌』第2編, 第1～3号, 日本考古学会

三宅米吉, 1898b「高麗古碑考追加」『考古学雑誌』第2編, 第5号, 日本考古学会

栄禧, 1903「高句麗永楽太王墓碑文」『古高句麗永楽太王墓碑文攷』

羅振玉, 1909「高麗好太王碑釈文」『神州国光集』第9集

楊守敬, 1909『高麗好大王碑』

今西龍, 1915「広開土境好太王陵碑に就て」『訂正増補 大日本時代史』古代下巻附録；1970『朝鮮古史の研究』国書刊行会

前間恭作, 1919「輯安高句麗広開土王陵碑」『朝鮮金石総覧』上

金毓黻, 1934「晋高麗好太王碑」『奉天通志』

水谷悌二郎, 1959「好太王碑考」『書品』100号；1977『好太王碑考』開明書院, 東京

＜表１＞広開土王陵碑文所在「倭」字釈文対応表

条項	研究者 / 位置	横井忠直 1889	三宅米吉 1898a	三宅米吉 1898b	栄禧 1903	羅振玉 1909	楊守敬 1909	今西龍 1915	前間恭作 1919	金毓黻 1934	水谷悌二郎 1959	末松保和 1959	朴時亨 1966	王健群 1984	李亨求 1986	武田幸男 1988	武田幸男 1989	盧泰敦 1992	白崎昭一郎 1993	耿鐵華 1994	林基中 1995	孫永鍾 2001	任世権 2002	金泰植 2005
辛卯年	Ⅰ-9-6	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭
九年己亥	Ⅱ-6-40	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭
	Ⅱ-7-15～16	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人	倭人
十年庚子	Ⅱ-8-31	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭
	Ⅱ-8-39～40	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊	倭賊
	Ⅱ-9-9	來	□	□	來	來	來	來	來	來	來	來	來	倭	來	侵	侵	□	倭	倭	侵	倭	□	乘
	Ⅱ-9-36～37	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭滿	倭寇	倭寇	倭□	倭□	倭寇	倭寇	倭滿	倭□	倭寇	倭寇	倭寇
	Ⅱ-9-38	□	□	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	大	大	倭	倭	大	委	倭	倭	大	大	萎
	Ⅱ-10-12	□	□	□	倭	□		□	□	倭		□	□		□								□	
	Ⅱ-10-22	尖	尖	尖	大	□	來	□	來	來	來	來	□	倭	來	□	□	□	倭	倭	□	倭	□	徙
	Ⅱ-10-34	□	倭	□	煙	□		□	□	烟	□	□	□	□	□	□	□	□	村	□	□	□	□	□
	Ⅱ-10-35	□	□	□	塵	□		□	□	塵	□	□	□	□	□	□	□	□	□	倭	利	□	□	□
	Ⅱ-10-38	倭	□	□	燒	□		□	□	燒	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	Ⅲ-1-5				百	□		□	□	百	□	□	□	□	□	倭	□	□	倭	□	倭	□	□	□
	Ⅲ-1-40				王	□		□	□	太	□	□	□	倭	倭	□	□	□	倭	□	□	倭	□	□
十四年甲辰	Ⅲ-3-13	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭
	Ⅲ-3-37	□	□	□	倭	□		□	□	倭	□	□	□	往	□	□	□	□	□	□	□	往	□	□
	Ⅲ-4-13～14	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇	倭寇
十七年丁未	Ⅲ-4-34～35	□□	□□	□□	倭寇	□□		□□	□□	倭寇	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□	□□
計	総数	9	9	9	12	9	9	9	9	12	9	9	9	11	7	10	9	8	12	12	10	11	8	8

これによれば、判読者は最小7字、最大12字の「倭」字があると見ている。ここで辛卯年記事は、6年丙申条の百済征伐に対する理由説明のために現れるものであり、9年己亥条は10年庚子条の新羅領土内の倭軍征伐に対する理由説明として現れるものであるから、本格的な戦闘記事ではない。10年庚子条は主に新羅と加耶の接境地帯で繰り広げられた倭軍征伐とその結果を記録している。14年甲辰条は、高句麗

末松保和, 1959「高句麗好太王碑文」『歴史教育』74

朴時亨, 1966『広開土王陵碑』社会科学院出版社, 平壌

王健群, 1984『好太王碑研究』吉林出版社, 吉林

李亨求･朴魯姫, 1986『広開土王陵碑新研究』同和出版公社, ソウル

武田幸男, 1988『広開土王碑原石拓本集成』東京大学出版会, 東京

武田幸男, 1989『高句麗史と東アジアー‘広開土王碑’研究序説』岩波書店, 東京

盧泰敦, 1992「広開土王陵碑」『訳註韓国古代金石文』１, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル

白崎昭一郎, 1993『広開土王碑文の研究』吉川弘文館, 東京

耿鉄華, 1994『好太王碑新考』吉林人民出版社, 吉林

林基中, 1995『広開土王碑原石初期拓本集成』東国大学校出版部, ソウル

孫永鍾, 2001「비문의 해석（碑文の解釈）」『광개토왕릉비문 연구（広開土王陵碑文研究）』社会科学院編, 図書出版中心, ソウル

任世権･李宇泰, 2002『韓国金石文集成(1)』韓国国学振興院, 安東

金泰植, 本書附録

と百済の接境地帯である帯方界に入って来た倭軍を撃退する経過を記録している[71]。

それゆえ、この4記事は、ひとまず倭と関連していると見ることができる。そのうちもっとも多くの関心の焦点となってきたのは、いわゆる「辛卯年記事」である。「辛卯年記事」は永楽 5 年の稗麗征伐と 6 年の百残征伐の間に入っている文章であり、様々な釈文と解釈がある。広開土王陵碑文については、1970年代以来、日本軍参謀本部の石灰塗布による碑文変造をめぐる論議があったが[72]、中国での現地調査以後には、中国人拓工の行為であるとして[73]、大体落ち着いたが、なかでも「辛卯年記事」については、なおも幾つかの文字について日本軍参謀本部の密偵である酒匂景信による損壊または故意の削除が想定されている[74]。

ただ最近、学界で大体認定されているのは、辛卯年記事が広開土王の「王躬率」、すなわち親征の理由を説明する前置文であるとか[75]、あるいは永楽6年の百済討伐の前置文であるのみならず、以後のあらゆる南征記事の導論となる大前置文であり[76]、倭が強いというのは事実と異なり得るが、高句麗は倭をトリックスターとして宣伝した[77]、などの見解である。広開土王陵碑文の倭は倭寇に過ぎないが誇張して表現されたと見る見解も[78]、それと同様である。これらの見解は、碑文を通じて南韓経営論を主張し得ない点には同意していると思われるが、高句麗が注目するだけの倭の実体があるということを立証しようとした。

しかし、この記事が親征の前置文であるとすれば、高句麗が―自身に敵対行為をした倭ではなく―百済を攻撃した理由と見るのに合致しない。この記事があらゆる南征の大前置文とすれば、その直後に百済を攻撃した記事が現れることを弁明し得ても、この記事がなぜここに位置しているかという問題が依然として残る。なぜなら、永楽6年条の後に現れる8年条は息慎に対するものであり、方向が異なるためである。

それならば、碑文の構造上では、辛卯年記事を「王躬率」の形態をとる永楽6年の百済討伐の前置文とのみ見るのがもっとも論理的である。そうであるためには、その文章の意味は「百残と新羅が昔から属民であったが、辛卯年に倭がある形で関わり、百済がここから離脱し、新羅だけがそのまま臣民となった」という内容とならなければならない。

---

71 永楽 17 年丁未条には倭という文字がないが、この記事を倭と関連するものとみる見解が相当にある。ところで『三国史記』高句麗本紀の記録は、百済や燕に対して幾度も戦闘があったことを示しているが、これに比べ広開土王陵碑文において、後燕に対しての戦闘成果を記録した一節は他の箇所にみえない。それゆえ永楽 17 年丁未条は後燕対しての戦闘を描写したものとみるのが正しい。そのうえこの戦闘では、他の戦闘とは異なり、鉄鉀と軍資器械に対して特別な関心が払われている。万一この戦闘が百済や倭軍とのものであれば、むしろ何万名を攻破したとは現れても、鎧や軍備に対する描写がこのように現れはしなかったであろう。この戦闘が後燕に対するものであったため、高句麗より進んだ彼らの武器を大量に獲得したことに対する感慨を記録したとみるべきであろう。したがって 17 年丁未条は倭との関連性がないと考える。

72 李進熙, 1972『広開土王碑の研究』吉川弘文館, 東京

73 王健群, 1984, 前掲書

74 徐栄洙, 1996「'辛卯年記事'의 변상과 원상（'辛卯年記事'の変相と原状）」『広開土好太王碑研究 100 年』高句麗研究会編, 学研文化社, ソウル, 409～415 頁

75 濱田耕策, 1974「高句麗広開土王陵碑文の研究－碑文の構造と史臣の筆法を中心として－」『朝鮮史研究会論文集』11, 龍渓書舎, 東京

76 武田幸男, 1978「広開土王碑辛卯年条の再吟味」『古代史論叢』（井上光貞博士還暦記念会編）

77 李成市, 1994「表象としての広開土王碑文」『思想』842 ; 李成市著, 2001, 朴慶嬉訳『만들어진 고대 －근대 국민국가의 동아시아 이야기－（作られた古代－近代国民国家の東アジアの話）』도서출판 삼인（図書出版サミン), ソウル

78 王健群, 1984a『好太王碑研究』吉林出版社, 吉林 ; 1984b『好太王碑の研究』雄渾社, 東京 ; 1985『広開土王碑研究』역민사（ヨンミン社), ソウル

ここで、辛卯年記事の原文を再び調べてみよう。

B. 百殘新羅 舊是屬民 由來朝貢 而倭以辛卯年來渡□破百殘□□新羅以爲臣民.

まず、もっとも問題となるのは、「百残□□新羅」が倭の臣民となったと見ることができるのかという問題である。あるいは、事実如何とはかかわりなく、高句麗がそのように認定していたのかという問題も含まれる。しかし、碑文自体の用例のみ分析してみれば、ここには3つの問題点がある。

第一は、倭が百済を臣民としたとすれば、永楽6年条で高句麗が百済を攻撃する際、その倭の姿が見えなければならないが、全く現れないという点である。特に、百済が降伏する場面において、その妥協を倭の総督ではない百済王が主導しているため、高句麗が百済を倭の臣民と認定する余地がない。

第二に、永楽9年条から見て、倭は百残と和通する対象であるという点である。これは、永楽6年に百済王が高句麗の奴客となると盟誓した以後の状況であるが、もしその前に倭が百済を臣民としたり、または高句麗がそのように認定していたとすれば、碑文のこの一節にも、その威勢の差違が現れなければならない。しかし「和通」とは、対等な相手との協約を意味する単語である。

第三に、碑文に現れる「民」の概念には、もっぱら高句麗の民があるのみであり、他の国の百姓を「民」と表記した事例がない点である。百済王さえも「民」に及ばぬ「奴客」に過ぎないのに、倭国の民を「奴」ではない「臣民」と表記したはずがない。「民」の用例は碑文に全11回現れるが[79]、その中で「臣民」の他に高句麗の民ではないという論争があるのは、永楽9年条の「以奴客為民」のみであるが、それについては後述する。

また、事実の問題から接近してみるとき、百済と新羅が昔から高句麗の属民として常に朝貢してきたというのは虚構である。4世紀後半に、新羅は高句麗とそのような関係にあったということを認定し得るが、百済は371年に高句麗の平壌城を攻撃し、故国原王を戦死させた[80]強国である。それゆえ、百済は高句麗の属民でもなく、朝貢関係を確認することもできない。

永楽6年の高句麗の百済討伐の名分は、故国原王の被殺に対する報復と見なければならない。しかし高句麗は、広開土王の勲績を讃える碑文において、百済による故国原王の被殺に言及することを欲しなかったようである。ゆえに、もう一つの虚構として倭の行為を誇張したものと思われる。高句麗が百済の同盟軍とみられる倭を高めたのは、怨讐である百済を百残と呼ぶのと同じく、これに対する一種の冒涜である。

それゆえ、永楽6年条の前置文である辛卯年記事は、全て虚構として作られた文章であり、実状は百済に対する極度の敵愾心がその中に潜んでいたのである。

2. 永楽九年己亥条の検討

それでは、広開土王陵碑文における辛卯年記事を除外した倭関連記事を一つずつ検討してみたい。まず、碑文から永楽9年(399)己亥条の訳文を提示する。

C. (1)9年己亥に、百残が誓約に背いて倭と和通したため、王は平穰に巡狩して下っていった。(2)

---

79 その用例は次のとおりである。序文 國富民殷(1)、辛卯年 百残新羅旧是属民(2)、新羅 以爲臣民(3)、九年己亥 以奴客爲民(4)、廿年庚戌 東夫餘舊是鄒牟王屬民(5)、守墓人烟戸 売勾余民(6)、五敦城民(7)、平壌城民(8)、舊民(9~11)

80『三国史記』巻 24・近肖古王 26 年(371)条「高句麗擧兵來、王聞之、伏兵於浿河上、俟其至急擊之、高句麗兵敗北。冬、王与太子帥精兵三萬、侵高句麗、攻平壌城、麗王斯由力戦拒之、中流矢死。王引軍退、移都漢山。」

新羅が使臣を送り、王に言うことには、「倭人がその国境に満ちあふれ、城池を破ったので、奴客は百姓となった者として、王に帰依して仰せを請う」と。(３)太王は恩慈してその忠誠を哀れに思い、特別に使臣を送り返し、密計を告げさせるようにした[81]。

史料C－(1)の9年己亥条の冒頭部分の翻訳については異論がない。百残が誓約に背いたというのは、永楽6年(396)に百済王が敗戦後に、「今より以後は、永遠に奴客とならん」と誓約したこと[82]を破ったという意味である。倭と和通したというのは、百済が阿莘王6年(397)に倭国と友好を結び、太子腆支を人質として送った[83]事件を指す。

C－(2)に見えるように、新羅は使臣を送って請命した。ここで、「請命」とは「御命を下し、官吏の職任を委ねてくれ」という意味である。すなわち、高句麗と合作をしようという意味である。ところで、合作要請の根拠とも思われる「以奴客為民」を如何に解釈するかについては、いくつかの見解がある。すなわち、奴客である新羅王を倭の民としたという新羅王＝倭民説[84]、または奴客である百済王を倭の民としたという百済王＝倭民説[85]、または奴客である新羅王は高句麗の民だという新羅王＝高句麗民説[86]の３種である。

新羅王＝倭民説によって解釈すれば、「倭人が新羅の城を破り、奴客（＝新羅王）を（倭の）百姓としたため、王に帰依して仰せを請う」と整理される。このような文句だとすれば、新羅王が高句麗王に合作を請う根拠が何であるか知り得ず、実際、すでに新羅王はこれ以上高句麗王に帰依したり、「請命」したりすることもできない立場であるため、矛盾した言葉である。このような問題点のために、新羅王＝倭民説に加担しながらも、「奴客をして倭の民にしようとしたので」と翻訳した例もあるが[87]、文脈上から見て、これを事態の完結した状態ではない留保状態として判定する根拠は不足する。

そこで、百済王＝倭民説が現れもしたが、倭人が新羅の国境内に入って城池を破壊したのに、どうして百済王が倭の百姓となったことに言及しなければならないのかわからない。

新羅王＝高句麗民説によってC－(2)の新羅使臣の言葉を解釈してみれば、「倭人がその国境に満ちあ

81『広開土王陵碑文』永楽９年己亥条「百殘違誓、与倭和通。王巡下平穰。而新羅遣使、白王云、倭人滿其國境、潰破城池、以奴客爲民、歸王請命。太王恩慈、矜其忠誠、特遣使還、告以密計。」

82『広開土王陵碑文』永楽６年(396) 丙申条「残主（中略）跪王自誓、従今以後、永為奴客」

83『三国史記』巻 25･百済本紀･阿莘王６年(397)5月条、「王與倭国結好、以太子腆支為質」

84 菅政友, 1891「高句麗好太王碑銘考」『史学雑誌』24, 43頁
那珂通世, 1893「高句麗古碑考」『史学雑誌』49, 32頁
三宅米吉, 1898「高麗古碑考」『考古学雑誌』2-3, 2頁
王健群, 1984b『好太王碑の研究』雄渾社, 京都, 196頁
鈴木靖民, 1988「好太王碑の倭の記事と倭の実体」『好太王碑と集安の壁画古墳』（読売テレビ放送編）木耳社, 東京, 54頁
朴真奭, 1993『호태왕비와 고대조일관계연구（好太王碑と古代朝日関係研究）』延辺大出版社, 300~304 頁

85 武田幸男, 1978「高句麗好太王碑文にみる帰王について」『古代東アジア史論集』上巻 吉川弘文館；1989『高句麗史と東アジア－「広開土王碑」研究序説』岩波書店, 東京, 141～143 頁

86 鄭寅普, 1955「広開土境平安好太王陵碑文釈略」『庸齋白楽濬博士還甲紀念国学論叢』思想界社
朴時亨, 1966『広開土王陵碑』社会科学院出版社, 平壌, 187頁
千寛宇, 1979「広開土王陵碑文再論」『全海宗博士華甲紀念史学論叢』; 1991『加耶史研究』一潮閣, 128頁
李亨求･朴魯姫, 1986『広開土大王陵碑新研究』同和出版公社, ソウル, 85～87頁
金哲埈･崔柄憲編, 1986『史料로 본 韓国文化史 古代篇（史料から見た韓国文化史 古代編)』一志社, ソウル, 81頁
李鐘旭, 1992「広開土王陵碑 및 “三国史記” 에 보이는 ‘倭兵’ 의 正体（広開土王陵碑及び『三国史記』に見える‘倭兵’の正体)」『韓国史市民講座』11, 一潮閣, ソウル, 44 頁

87 盧泰敦, 1992「広開土王陵碑文」『訳注韓国古代金石文』第１巻, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 18 頁

ふれ、城池を破ったため、奴客（＝新羅王）は（高句麗の）百姓となった者として、王に帰依して仰せを請う」という言葉となる。このようになれば、文脈が順当であるのみならず、後の文章とも連結に無理がない。

新羅の奈勿王のそのような態度表示があったために、C－(3)の記事のように、太王は共に事を図ることを決定したのである。そうして、広開土王は使臣を送り返し、密計を奈勿王に告げさせ、その後永楽10年庚子条に続く戦闘状況は、当然、密計を送った高句麗軍と密計を受けた新羅軍の合同作戦によってなされたと見なければならない。

３．永楽十年庚子条の検討

永楽10年庚子条については、学者ごとに判読文が異なるために、これに対する対照表を作成すれば、次の<表 2> のとおりである[88]。ここで筆者が新たに釈文したのは、Ⅱ-9-8 の文字を「卻」（却の本字）、Ⅱ-9-9 の文字を「乗」、Ⅱ-9-38 の文字を「萎」、Ⅱ-9-41 の文字を「夫」、Ⅱ-10-20 の文字を「煞」、Ⅱ-10-21 の文字を「抑」、Ⅱ-10-22 の文字を「徙」、Ⅲ-2-19 の文字を「服」と見たものであり、Ⅱ-9-33 の文字は普通「城」と判読されてきたが、これを判断し得ない文字として処理し、Ⅱ-9-34 の文字を「農」と判読した[89]。

88〈表 2〉の作成に根拠となった論著は、註 70 に引用したもの、および後註 89 に引用した論文である。

89 金泰植, 1994「広開土王陵碑文의 任那加羅와 ‘安羅人戍兵’（広開土王陵碑文の任那加羅と‘安羅人戍兵’）」『韓国古代史論叢』6, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 46～60 頁。ただしⅡ-9-34 の文字を「農」と判読したのは李亨求が最初である。

＜表２＞広開土王陵碑文十年庚子条釈文対応表

位置＼研究者	横井忠直 1889	三宅米吉 1898b	栄禧 1903	羅振玉 1909	楊守敬 1909	今西龍 1915	前間恭作 1919	金毓黻 1934	水谷悌二郎 1959	末松保和 1959	朴時亨 1966	王健群 1984	李亨求 1986	武田幸男 1988	盧泰敦 1992	白崎昭一郎 1993	耿鐵華 1994	金泰植 1994	林基中 1995	孫永鍾 2001	任世権 2002
Ⅱ-9-8	□	□	追	□	□	□	□	追	□	□	□	自	□	□	□	自	自	卻	□	自	□
Ⅱ-9-9	來	□	來	來	來	來	來	來	來	來	來	倭	來	侵	□	倭	倭	乘	侵	倭	□
Ⅱ-9-30	拔	拔	拔	拔	拔	拔	拔	拔	拔	拔	拔	拔	□	□	□	□	拔	拔	拔	拔	□
Ⅱ-9-33	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	□	城	城	城
Ⅱ-9-34	寇	□	盡	□	晨	晨	□	長	□	□	□	鹽	農	□	□	鹽	塩	農	寇	鹽	□
Ⅱ-9-37	滿	滿	滿	滿	滿	滿	滿	滿	滿	滿	滿	寇	寇	□	寇	寇	滿	寇	□	寇	寇
Ⅱ-9-38	□	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	倭	大	□	倭	大	委	倭	萎	倭	大	大
Ⅱ-9-39	□	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰
Ⅱ-9-40	□	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城
Ⅱ-9-41	□	大	大	犬	大	□	六	大	□	六	□	内	□	大	□	内	内	夫	内	内	□
Ⅱ-10-17	□	□	十	□	卞	□	□	十	□	□	□	十	□	□	□	十	十	十	□	十	□
Ⅱ-10-18	九	九	九	□	九	九	九	九	□	九	□	九	□	□	□	九	九	九	九	九	□
Ⅱ-10-20	臣	臣	臣	□	巨	臣	臣	臣	更	臣	□	拒	□	更	□	拒	更	煞	拒	拒	□
Ⅱ-10-21	有	陪	順	有	隋	有	□	隋	□	□	□	随	隋	□	□	随	□	抑	隋	随	□
Ⅱ-10-22	尖	尖	大	□	來	□	來	來	來	來	□	倭	來	□	□	倭	□	徙	□	倭	□
Ⅱ-10-28	□	□	城	□		滿	滿	滿	滿	滿	□	新	□	滿	新	捕	滿	師	滿	□	新
Ⅱ-10-29	□	□	復	□		□	□	後	□	□	□	羅	□	□	□	□	□	□	□	□	□
Ⅱ-10-30	□	□	盡	□		□	□	盡	□	□	□	城	□	□	□	□	□	□	□	城	□
Ⅱ-10-38	倭	□	燒	□		□	□	燒	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
Ⅱ-10-39	潰	□	殼	□		□	□	殼	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
Ⅱ-10-40	城	□	無	□		□	□	無	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
Ⅱ-10-41	大	□	餘	□		□	□	餘	言	言	□	言	言	言	言	信	言	言	誓	言	言
Ⅲ-1-3	□	□	移	□		□	□	移	□	□	□	且	□	□	□	旦	□	□	□	□	□
Ⅲ-1-5	□	□	百	□		□	□	百	□	□	□	□	□	倭	□	倭	□	□	倭	□	□
Ⅲ-1-31	□	□	他	□		□	□	他	□	□	□	出	出	□	□	□	□	□	□	□	□
Ⅲ-1-39	□	□	太	□		□	□	王	□	□	□	殘	殘	□	□	殘	□	殘	□	殘	□
Ⅲ-1-40	□	□	王	□		□	□	太	□	□	□	倭	倭	□	□	倭	□	□	□	倭	□
Ⅲ-1-41	潰	潰	率	潰	潰	潰	潰	率	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰
Ⅲ-2-1	赤	赤	歩	□		□	□	兵	□	□	□	逃	逃	□	□	亦	□	□	亦	逃	□
Ⅲ-2-2	□	□	騎	□		□	□	騎	以	□	□	拔	拔	□	□	以	□	□	以	拔	□
Ⅲ-2-3	□	□	還	□		□	□	還	随	□	□	□	□	□	□	随	羅	□	隋	□	□
Ⅲ-2-4	□	□	國	□		□	□	國	□	□	□	城	城	□	□	□	城	城	□	城	□
Ⅲ-2-19	□	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	□	朝	朝	論	論	論	論	論	朝	服	論	論	論
Ⅲ-2-20	□	貢	貢	□		貢	□	貢	□	□	□	事	事	事	事	事	貢	事	事	事	事
Ⅲ-2-21	□	□	感	□		□	□	感	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	和	至	□
Ⅲ-2-22	□	□	國	□		□	□	國	□	□	□	□	國	國	國	□	□	□	國	國	國
Ⅲ-2-23	□	□	罡	□		□	□	岡	□	□	□	□	岡	罡	罡	□	□	□	罡	罡	罡
Ⅲ-2-24	□	□	上	□		□	□	上	□	□	□	□	上	上	上	□	□	□	上	上	上
Ⅲ-2-25	□	□	廣	□		□	□	廣	□	□	□	廣	廣	廣	廣	廣	廣	廣	廣	廣	廣
Ⅲ-2-36	率	□	羅	率		□	□	羅	寐	寐	□	寐	寐	寐	寐	寐	寐	寐	寐	寐	寐
Ⅲ-2-37	□	□	王	□		□	□	王	錦	錦	□	錦	錦	錦	錦	錦	錦	錦	錦	錦	錦
Ⅲ-2-39	□	□	自	□		□	□	自	□	□	□	家	□	□	□	家	家	□	家	家	□
Ⅲ-2-40	僕	僕	僕	僕	僕	□	僕	□	僕	僕	僕	僕	僕	□	僕	僕	僕	僕	僕	僕	僕
Ⅲ-2-41	□	□	勾	勾	勾	□	勾	滿	勾	勾	勾	請	勾	勾	勾	勾	勾	勾	句	勾	勾

＜表２＞の筆者の判読文を土台にして文章を翻訳して提示すれば、次のとおりである。

D.　(１)10年庚子に、教して歩騎5万を送って新羅を救援させた。男居城から新羅城まで倭がその間に満ちあふれていた。(２)官軍がまさに至るや、倭賊が退いたため、後を追って急追し、任那加羅の従抜城に至った。城がただちに帰順して服従したため、巡邏兵を置いて守らせた。(３)新羅の□農城を攻略するや、倭寇は萎縮して潰滅した。城夫の十人中の九人は全て殺したり強制的に移したりして、巡邏兵を置いて守らせた。(４)師は（中略）□□城を□し、巡邏兵を置いて守らせた。(５)昔は、新羅の寐錦が自ら来て、服従して仕えたことはなかったが、□□□広開土境好太王の時（に至り）、（新羅）寐錦が（中略）朝貢した[90]。

D－⑴の記事は、永楽10年⑷00)に、広開土王が命令を下し、歩兵と騎兵が混じった５万の兵力を新羅に送ることから始まる。ところで、密計を取り交わした直後ではなく、その翌年に遠征がなされることから見て、これは新羅の急な患難を救援するという意味よりは、二国が連合してある地域を大々的に討伐するという意味がより本質的であったと判断される。

しかし、その後の部分については、文章解釈上、二種類の見解がある。男居城から新羅城に至るまで、その中間地域に倭が満ちあふれていたという見解[91]、男居城から新羅城に至ると、そこ（＝新羅城）の中に倭が満ちあふれていたという見解[92]がそれである。男居城の位置は知り得ないが、新羅城は新羅の首都慶州と思われる。文面上では、二城の中間地帯に倭軍がいたと見るほかない。

D－⑵記事の前の部分からみて、高句麗軍が来るや倭軍は退却し、直ちに高句麗軍は後を追って急追したのである。

後に続く記事については、任那加羅の位置と従抜城に対する解釈の問題がある。任那加羅については、慶尚北道高靈と見る見解[93]と慶尚南道金海と見る見解[94]がある。いくつかの史料を検討してみた結果、任

90『広開土王陵碑文』永楽十年庚子条。「教遣歩騎五萬、往救新羅。従男居城、至新羅城、倭満其中。官軍方至、倭軍退卻、乗背急追、至任那加羅従抜城。城即歸服。安羅人戍兵。抜新羅□農城。倭寇萎潰。城夫十九、盡煞抑徙。安羅人戍兵。師□□□□其□□□□□□□言□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□辞□□□□□□□□□□□殘□潰□□□城。安羅人戍兵。昔新羅寐錦、未有身來服事。□□□□廣開土境好太王□□□□寐錦□□僕勾□□□□朝貢」。

91 菅政友, 前掲論文, 49頁
王健群, 1984b, 前掲書, 198頁
金哲埈･崔柄憲, 1986, 前掲書, 82頁
高寛敏, 1990「永楽十年高句麗広開土王の新羅救援戦について」『朝鮮史研究会論文集』27, 163 頁

92 末松保和, 1949『任那興亡史』大八洲出版；1956, 再版, 吉川弘文館, 74頁
千寛宇, 前掲書, 97頁
李亨求･朴魯姫, 前掲書, 88頁
鈴木靖民, 1988, 前掲論文, 55 頁
盧泰敦, 1992「広開土王陵碑文」『訳注韓国古代金石文』第１巻, 18 頁

93 菅政友, 1891「高句麗好太王碑銘考」『史学雑誌』24 (2-11), 49～50頁
大原利武, 1934「任那加耶考」『小田先生頌寿記念朝鮮論集』
鮎貝房之進, 1937「日本書紀朝鮮地名攷」『雑攷』第7輯　上巻, 52～53頁
李丙燾, 1959『韓国史 古代編』震檀学会, 412頁；1976『韓国古代史研究』博英社, ソウル, 304頁
丁仲煥, 1962『加羅史草』144～145頁
千寛宇, 1977「復元加耶史」(中)『文学と知性』29, 920頁；1991『加耶史研究』一潮閣, ソウル, 27頁
金哲埈･崔柄憲編, 1986『史料로 본 韓国文化史 古代篇（史料から見た韓国文化史 古代編)』一志社, ソウル, 82 頁
李永植, 1993『加耶諸国と任那日本府』吉川弘文館, 東京, 171 頁

那加羅は元来、任那（昌原）と加羅（金海）の合称であり、広開土王陵碑の「任那加羅」は金海の加耶国を中心とした加耶連盟全体を指称したものと判断できる[95]。その決定的な根拠は、この戦争が起こった直後である５世紀初に、金海の大成洞古墳群は急激に没落し、高霊の池山洞古墳群は徐々に台頭し始めるという点である。それゆえ、高句麗の攻撃により陥落した所、すなわち任那加羅が金海地域の勢力であったことは明らかである。

一方、「従拔城」については、これを城の名前と見る見解[96]、または「城を攻略するのに従って」という文と見る見解[97]がある。二つの見解とも可能であるが、後者の見解に従ったとしても、このとき任那加羅の首都が陥落したと見る必要はない。なぜなら、碑文では、東夫余の首都を「余城」とし、新羅の首都を「新羅城」と表記したとすれば、任那加羅の中心地については「任那加羅」ではなく「任那加羅城」と表記したと見なくてはならないためである。それゆえ、倭軍は任那加羅の従拔城、またはある城に入ったが、特段抵抗もできず、すぐに降伏したのである。

Ｄ－⑵記事の後の部分に「安羅人戍兵」が現れる。これについては、固有名詞と見る見解と文と見る見解に大別される。固有名詞と見る見解は、これを咸安の安羅国人によって構成された守備軍と見るのは皆一致し、その性格を「任那日本の別動隊」と見る見解[98]と「百済を助ける同盟軍」と見る見解[99]に分

金鉉球, 1993『任那日本府研究－韓半島南部経営論批判』一潮閣, ソウル, 98頁

94 那珂通世, 1896「朝鮮古史考（加羅考）」『史学雑誌』7-3, 38頁
池内宏, 1947『日本上古史の一研究』; 1970, 再版, 中央公論美術出版, 75頁
末松保和, 1949『任那興亡史』大八洲出版 ; 1962, 再版, 吉川弘文館, 東京, 67頁
三品彰英, 1962『日本書紀朝鮮関係記事考證』上巻, 吉川弘文館, 東京, 7～8頁
朴時亨, 1966『広開土王陵碑』社会科学出版社, 平壌, 194頁
金廷鶴, 1977『任那と日本』小学館, 231頁 ; 1990『韓国上古史研究』汎友社, ソウル, 343頁
王健群, 1984b, 前掲書, 198頁
李亨求･李魯姫, 1986, 前掲書, 89頁
鈴木靖民, 1988「好太王碑の倭の記事と倭の実体」『好太王碑と集安の壁画古墳』読売テレビ放送編, 木耳社, 東京, 57頁
山尾幸久, 1989『古代の日朝関係』塙書房, 東京, 78頁
高寛敏, 1990, 前掲論文, 157頁
田中俊明, 1992『大加耶連盟の興亡と「任那」－加耶琴だけが残った』吉川弘文館, 東京, 32 頁

95 金泰植, 1994, 前掲論文, 86 頁

96 那珂通世, 1893「高麗古碑考」『史学雑誌』49 (4-12) 33頁
金錫亨, 1966『초기조일관계연구（初期朝日関係研究）』平壌 ; 1988『고대한일관계사（古代韓日関係史）』한마당（ハンマダン), ソウル, 405頁
千寛宇, 1979「広開土王陵碑文再論」; 1991, 前掲書, 130頁
王健群, 1984b, 前掲書, 198頁
武田幸男, 1989, 前掲書, 435頁
高寛敏, 1990, 前掲論文, 163頁
盧泰敦, 1992, 前掲論文, 19頁
李鍾旭, 1992, 前掲論文, 45頁

97 末松保和, 前掲書, 74頁
金哲埈･崔柄憲, 1986, 前掲書, 82頁
安春培, 1992「広開土大王陵碑文 研究(Ⅰ) －碑文의 文段과 解釈을 中心으로－（広開土大王陵碑文研究(Ⅰ)－碑文の文段の解釈を中心に－）」『考古歴史学誌』8, 東亜大学校博物館 315 頁

98 菅政友, 1891「高句麗好太王碑銘考」『史学雑誌』24(2-11), 49～50頁
那珂通世, 1893「高句麗古碑考」『史学雑誌』49 (4-12), 33頁
末松保和, 前掲書, 74頁
武田幸男, 1985「四～五世紀の朝鮮諸国」『シンポジウム好太王碑』; 1989, 前掲書, 120頁

かれる。文と見る見解は、「新羅人に守備させた」という意味の句と見る見解[100]と「（高句麗が）邏人を置いて守備させた」と見る見解[101]に分かれる。

最後の説に立脚すれば、高句麗は平定した任那加羅の城に巡邏兵を置いて守らせたとなる。文字表現上からも、正規軍の大規模駐屯、または幕府設置による支配ではなく、「羅人（＝邏人）」すなわち巡邏兵を安置したものであり、周辺で繰り広げられる戦闘さえ終結して顕著な敵対脅威がなくなれば撤収する程度の部隊であったのであろう[102]。

それに続くD－(3)の記事から見れば、高句麗軍は新羅の□農城を攻略し、それによって倭寇は萎縮して潰滅したとなる。新羅の□農城の位置は知り得ないが、任那加羅の従拔城の周辺にある新羅の城で、加耶－倭連合軍に占領された城ではないかと思う。その後に「城夫十九、盡煞抑徙」[103]、すなわち城の男は十人中の九人を全て殺したり、強制的に徙民させたりしたという句節が続いている。これはおそらく、新羅の□農城の住民が加耶と新羅の国境線に近くおり、新羅に背いて加耶－倭連合軍にたやすく結託して投降したことに対する報復であったようである。この城についても、高句麗は巡邏兵を置いて守らせた。

D－(4)の最初の文字である「師」は、従来「満」（水谷、武田釈文）または「新」（王氏釈文）と読まれていた文字を筆者がいまいちど判読したのであり、高句麗－新羅の軍隊を指す。それ以後の文章は、判読し得ない文字が非常に多く、解釈することができないが、要するに、高句麗－新羅連合軍がある城を平定してから、ここに巡邏兵を置いて守らせたのである。このような過程を経て、金海の任那加羅を中心とする加耶連盟諸国は、一時再起しがたいほどに大きな打撃を蒙ったのである。

戦争が終結した後の状況を示す、D－(5)記事の前の部分の「昔新羅寐錦、未有身来服事」における最後の二文字は、従来「朝貢」と見たが、水谷釈文では未詳と処理し、王氏と武田釈文では「論事」と判

鈴木靖民, 1988, 前掲論文, 54～58頁

田中俊明, 1992『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館, 東京, 212 頁

99 金錫亨, 1966, 前掲書 ; 1988, 한마당 (ハンマダン), ソウル, 406頁

千寛宇, 1977「復元加耶史」（中）『文学と知性』29 ; 1991, 前掲書, 27頁

李永植, 1985「加耶諸国의 国家形成問題（加耶諸国の国家形成問題）」『白山学報』32 ; 1993『加耶諸国と任那日本府』吉川弘文館, 東京, 171~172頁

李亨求･朴魯姫, 1986『広開土大王陵碑新研究』同和出版公社, ソウル, 90頁

金哲埈･崔柄憲編, 1986『史料로 본 韓国文化史 古代篇（史料から見た韓国文化史 古代編）』一志社, ソウル, 82頁

延敏洙, 1987「広開土王碑文에 보이는 倭関係 記事의 検討（広開土王碑文に見える倭関係記事の検討）」『東国史学』21, 東国大学校, ソウル, 23頁

朴真奭, 1993『호태왕비와 고대조일관계연구（好太王碑と古代朝日関係研究）』延辺大出版社, 81頁

金鉉球, 1993『任那日本府研究』一潮閣, ソウル, 99頁

100 王健群, 1984b, 前掲書, 199頁

鈴木英夫, 1987「加耶･百済と倭」『朝鮮史研究会論文集』24, 70～71頁

李賢恵, 1988「4세기 加耶社会의 交易体系의 変遷（4世紀加耶社会 の 交易体系 の 変遷）」『韓国古代史研究』1, 韓国古代史研究会, 177頁

安春培, 1992, 前掲論文, 315頁

李鍾旭, 1992, 前掲論文, 49頁

101 高寛敏, 1990, 前掲論文, 161頁

金泰植, 1994, 前掲論文

102 高寛敏はこれを「戦局に臨機応変に対応する遊兵の意」とした。(1990, 前掲論文, 162 頁)

103 この句節については、大部分の釈文が解釈を放棄し、王健群だけが「城内十九 盡拒随倭」とし、高句麗軍によって平定された新羅城内の住民のほとんど全てが倭にしたがうことを拒絶したというように解釈したが（王健群, 1984b, 前掲書, 161 頁)、やはり意味が通じない。文字の判読が誤っているためである。

読したことがあるが[104]、ここでは「服事」と判読した。これは文字そのままに、「昔は新羅の寐錦が自ら来て、服従して仕えたことはなかった」という意味である。

その後に続く文は欠字が多く、完全な意味を理解することができないが、今回の戦争の結果として、広開土王の時に至り、初めて新羅の寐錦が自ら来て、朝貢を捧げたという意味である。その結果、高句麗が新羅の情勢に深く関与し得る力を備えるようになったことが、今回の遠征のもう一つの目的であった。

４．永楽十四年甲辰条の検討

続いて碑文における永楽14年(404)甲辰条の訳文を提示すれば、次のとおりである。

E. 14 年甲辰に倭が法度を守らず、帯方界に侵入した。（中略）石城を□し、船をつなぎ合わせ、□□□した。王は親しく軍士を率いていって討伐し、平壌から□□すると、□鋒が遭遇した。王の軍隊が敵の道を途中で絶って席巻すると、倭寇が潰滅した。斬り殺した者が数え切れないほど多かった[105]。

ここで問題となるのは、伏字に百済があるのかということである。そうして一説には、「帯方界」の後の見えない文字を「和通残兵」と読むこともあったが[106]、「而倭」は原石拓本では比較的はっきりと見えており、「和通残兵」については、そのような心証はあるものの、碑面で確認することが難しい状態である。

それゆえ、これを除外してみれば、帯方界すなわち黄海道方面に倭軍が侵入したが、高句麗の平壌から出動した広開土王の率いる軍隊に討伐されたという大筋は明白である。ただ、この碑文だけでは、倭と百済の連繋性が不確実であるため、この記事を単に倭軍の反撃とだけ見ることもあり[107]、百済との結託による共同作戦と見ることもある[108]。

王健群の釈文を確認するのは難しいが、碑文の永楽９年(399)己亥条に「百残違誓、与倭和通」という文も現れ、『三国史記』百済本紀にも、阿莘王６年(397)に「王與倭國結好」という記事が現れるため、碑文の永楽14 年甲辰条の記事は、百済との共同作戦と見るのが妥当だと思う。

５．碑文所載の倭軍の性格

広開土王陵碑文には上に見たように、いくつかの倭関連記事が現れている。それならば、韓半島で活動していたその倭軍は、実際に如何なる存在であったのか。碑文に見える行動様態から見て、倭軍は400年に新羅城の周辺にいたが、追われて任那加羅の従拔城に入ってすぐに降伏し、404年に船に乗って帯

---

104 武田幸男, 1989, 前掲書, 116 頁

105『広開土王陵碑文』永楽十四年甲辰条。「而倭不軌、侵入帯方界、□□□□□石城、□連船□□□。王躬率□□、従平穰、□□□鋒相遇。王幢要截盪刺、倭寇潰敗、斬煞無數」。

106 王健群著, 林東錫訳, 1985『広開土王碑研究』역민사（ヨンミン社), ソウル, 208～210 頁

107 末松保和, 1949『任那興亡史』75 頁

108 李丙燾, 1976『韓国古代史研究』博英社, ソウル, 384頁

王健群, 前掲書, 275頁

鈴木靖民, 1988, 前掲論文, 63～64 頁

方界に侵入したが潰滅した。

400年に倭軍が任那加羅の城に追われて入ったということは、何を意味するのか。新羅の首都である慶州から任那加羅の首都である金海までは、相当な遠距離に達する。その当時、高句麗軍は歩兵と騎兵で構成されていたため、倭兵が船に乗って任那加羅に退却したとは思われない。倭軍が、近くの甘浦や蔚山、または迎日などから船を利用して退却せず、ここまで陸路で逃亡してきたのは、何か理由がなければならないだろう。『三国史記』新羅本紀より見れば、船に乗ってくる倭兵が新羅の首都を攻撃しようとすれば、東海岸の方に船をつないで置いて入ってくるのが通常であった[109]。

あるいは、永楽10年条に見える倭軍の人員構成の主力が、加耶人であった可能性もある。当時、倭側の海上輸送能力を問題とし、広開土王陵碑文の倭は、大部分が倭を詐称する加耶人であり、ここに加耶に居住する倭人が若干混じっていただけだという井上秀雄の見解[110]も参考となる。後日、6世紀中葉の管山城の戦闘の場合、数万名が参加する百済－加耶－倭連合軍において、倭軍の数字は1,000名程度に過ぎなかった。それならば碑文の倭賊というのも、実は百済の後援を受ける加耶－倭連合軍であり、人員の主軸は加耶人で構成されていたが、高句麗は服飾が異なる倭を過度に認識したのである。

また、『三国史記』朴堤上伝における、堤上が倭国に到着した際（新羅訥祇王2年、418）の記事によれば、さきに百済人が倭に入り、新羅と高句麗が倭王国を侵略しようとしていると「讒言」し、倭が兵士を送って「新羅の国境の外」で「邏戍」させたが、高句麗が攻めてきて倭の「邏人」を全て捕らえて殺したため、倭王が百済人の言葉を本当に信じたという[111]。これについて、ここでの百済人は百済太子の腆支であり、腆支は人質ではなく、倭国軍隊の出兵を誘導するために行った使臣だという見解[112]があるが、これは妥当な推論である。ここで、倭の巡邏兵が新羅の国境の外、すなわち加耶地域に入って駐屯していたことを知りうるが、彼らは情勢を探知するための目的を持った巡邏兵に過ぎなかったため、倭兵の規模は大軍ではなく、小規模のものであったことがわかる。そして、この倭軍の動員に百済の意図が大きく働いていたということを推測することができる。百済には、加耶と倭の間の友好関係を利用して高句麗の後方の新羅を牽制して、有事の際には倭軍を動員しようという意図があったといえよう。

ところで、加耶地域で繰り広げられたことに関して、加耶人の存在を全く排除して、他の外部勢力間の利害関係だけ考えるというのは、適当ではない。それゆえ、加耶人の意思を念頭に置いて推定してみれば、任那加羅は伝統的な友好関係にしたがって、倭の巡邏兵を受け入れ、新羅方面の辺境の城に駐屯させ、彼らに新羅や高句麗の動向を偵察させることを任せた可能性がある。それならば、倭軍は任那加羅から相当な代価を受けて、任務を遂行していたのであろう。そのような場合、任那加羅と倭の関係は、対等な契約による雇傭関係であるといえる。

一方で新羅は、加耶が倭と同盟して自らの領土内に出没し、辺境の勢力を統合して行くことを独りで耐える余力がなかったのであろう。そして、新羅は急激な手段で高句麗を引き込み、任那加羅の勢力を

---

109 倭人が新羅に東側から侵入して入ってきたことを示す記録を、『三国史記』新羅本紀 1～3 から求めると、南解次次雄 11 年条、祇磨尼師今 10年 4 月条、助賁尼師今 3年 4 月、および 4 年 5月条、実聖尼師今 6 年 3月条、訥祇麻立干 15 年 4月条、慈悲麻立干 2年 4 月、および 19 年 6月条等を挙げることができる。倭人の侵入方向を明確に表示していなくても、彼らが吐含山方面に退却したかどうかを通して、東側であることを知ることができることはさらに多い。一方、倭人が南側から侵入してきたことは極めて少なく、西側から陸路で侵入してきたことを示す記録はない。

110 井上秀雄, 1973『任那日本府と倭』寧楽社, 120～121 頁

111『三国史記』巻 45･列伝 5･朴堤上伝「遂径入倭國、若叛來者、倭王疑之。百濟人前入倭、讒言新羅與高句麗謀侵王國、倭遂遣兵邏戍新羅境外、會高句麗來侵、并擒殺倭邏人、倭王乃以百濟人言爲實。」

112 金錫亨, 1988「삼국사기를 통하여 본 4 세기 말 5 세기 초의 조일관계에 대하여（三国史記を通じてみた4 世紀末5 世紀初の朝日関係について）」『력사과학（歴史科学）』88-2, 平壌, 28 頁

挫いておこうとし、倭軍の存在を過度に浮き彫りにさせたのではないかと思う。この戦闘は、高句麗側の碑文の記述にしたがって、高句麗軍と倭軍が行ったようになっているが、実情は該当地域である洛東江流域を取り巻く二大勢力、すなわち新羅と加耶の間の覇権争いであったと見るのが妥当である。それは、この戦争の結果、加耶の一部小国が新羅へと離脱し、洛東江を境界として新羅－加耶文化圏が本格的に分化する様相[113]を通じて確認することができる。

高句麗の歩騎５万の大軍は、少数の倭軍を狙いとする軍隊ではなく、新羅の要請によってその背後の加耶連盟の核心部を攻めるために動員されたものとみなくてはならない。この戦争の結果として前期加耶連盟を主導した金海の加耶国は滅亡した。金海大成洞古墳群の最後の大型古墳である大成洞１号墳が築造された後、突如墓の築造が中断するのは、加耶王室の没落を反映するものである。高句麗は加耶征伐を通して百済と倭を牽制する効果のみならず、新羅からも一定の反対給付を得たであろう。

404年には倭軍がなぜ九州、加耶、百済を過ぎ、帯方界にまで現れて高句麗と戦ったのか。帯方界は当時、高句麗と百済の境界地域であった。

ここで考えてみることは、その倭軍が加耶を助けるための軍隊であるのか、または百済を助けるためなのかという点である。文献史料上では、397年に阿莘王が倭国と結好したり[114]、広開土王が399年に百済と倭が和通したということを聞いて、平壌城から下ったということ[115]から見て、ひとまず百済の援兵であったと考えられる。404年に、帯方界に現れて（残兵と和通し？）船を連ねて攻撃したが潰滅させられたという「倭寇」は、百済のために動員されたといえよう。その当時、外国の軍兵を大々的に引き入れる必要があったのは、広開土王の即位以後、高句麗に比べて軍事的に劣勢に置かれていた百済であったことは間違いない。

しかし、397 年に初めて国交を結んだ百済の王子腆支が倭国に行くや否や、大規模の倭兵を動員し得たとは考えられない。百済王子が、高句麗が倭を討ちにやってくるであろうと、どんなに危機意識をあおったとしても、また倭が加耶に派遣した少数の巡邏兵が高句麗軍に敗北したとしても、この理由だけで倭軍が高句麗－百済間の戦線に大挙投入はされなかったであろう。

399年と400年に、新羅に侵入したという倭軍は、行動半径から見て、加耶のために働いていた。また、この間の考古学的発掘成果や記録から見ても、倭軍は加耶のための軍隊であったと見るのが妥当である。当時の日本列島に、加耶の文物は多く影響を及ぼしていたが、百済の文物とみられるものはほとんど現れていないためである。それならば、404年の倭兵は、百済が危機意識をつのらせて引き入れたものだとしても、やはり加耶を媒介せずしては不可能なことであった。

加耶と倭は、伝統的に鉄を通じて密接な交流関係を結んでいた。日本列島の鉄生産は韓半島南部に比べ 500 年以上遅れ、日本で製鉄が行われていなかった５世紀後半まで倭は交易を通じて加耶から鉄素材を入手して、これをもって鍛冶過程を経て鉄器を生産した[116]。

---

113 金泰植, 2002『미완의 문명 7 백년 가야사（未完の文明 700 年加耶史）』1 巻, 푸른역사（プルンヨクサ), ソウル, 157～165 頁

114『三国史記』巻 25･百済本紀 3･阿莘王 6年条

115『広開土王陵碑』永楽 9 年己亥条

116 藤尾慎一郎, 2002「弥生時代の鉄」『第 5 回歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』国立歴史民俗博物館, 佐倉, 17～22 頁

東潮, 2002「弁辰と加耶の鉄」前掲書, 29～34 頁

沢義功, 2002「日本古代の鉄生産」前掲書, 58～63 頁

大澤正巳, 2002「金属学的分析からみた倭と加耶の鉄－日韓の製鉄・鍛冶技術」前掲書, 71～80 頁

しかし、金海の加耶国が鉄を倭に輸出し、何を主に輸入していたのかは明確でない。ある者は、加耶人が倭から労働力を輸入したものとみている。すなわち4世紀前半に金海や釜山などの地において発見される北九州および山陰地域の土師器は、日本列島から労働力として提供された倭人の1世代がもってきた土器だというのである[117]。

『三国志』魏書倭人伝の記録をみても、2～3世紀に倭の対中国交易商品は地域内で生産される特定物品というよりも人的資源である男女生口，すなわち奴婢に該当する労働力が代表的なものであった[118]。上記の遺物出土状況からみると、倭のこのような伝統は加耶においてもそのまま通用していたことを確認できる。

今後さらに綿密な調査が必要であろうが、土師器の出土地域分布からみて、その倭人たちは加耶において苦役である製鉄作業に動員された可能性が高い。状況からみても、鉄素材の需要者である倭が、その鉄素材を生産するのに必要な労働力を供給してくれという加耶の取引条件を拒絶することはできないからである。国際的交流が基本的に経済的交換の性格を帯びるという点は否定できない。

ところで4世紀後半に加耶国が鉄素材供給の代価として倭国に対して求めるものが変わった可能性がある。なぜなら当時加耶は高句麗の支援をうけて成長する新羅と覇権を争っており、その過程でたやすく動員することができる倭の軍事力が必要だったためである。そのうえ百済は加耶との交渉過程で加耶－倭間の人的・物的資源交易の伝統を確認し、これを大々的に拡大して自身と高句麗の戦争に投入する計画をたてたようである。そのような必要性は高句麗との戦争が迫ってくる4世紀末の段階に高まったであろう。加耶は自らが生産した鉄の代価としてそのような交流が成り立つことを対内外的な影響力強化の契機と考え、これに応じたとおもわれる。

すなわち金海の加耶国は対内的に加耶連盟内での主導権を掌握し、対外的に新羅に対抗して百済との先進文物交流に応じるために、倭の軍事力を動員したのである。これによって4世紀後半に伝統的な倭の交易商品である生口が、加耶側から求める性格の異なる人的資源である軍事力[119]に代わったのである。それゆえこれは古代日本のいわゆる「南韓経営」という次元ではなく、平常的な加耶－倭間の人的・物的資源交易の伝統が百済の介入によって拡大され、高句麗との戦争に投入されたものであり、すなわち百済の異民族動員能力という次元で理解しなくてはならないだろう。

『三国史記』新羅本紀に現れる、新羅に侵攻した倭人・倭兵は、時期的に制限されており、史料原典について追求されるべき問題点を抱えている。それも大抵、季節的に掠奪を行う海賊の性格を帯びるとみえるが[120]、その中の一部は加耶の支援を受けた倭軍が加耶の領域に入り、新羅を攻略する場合もあったのであろう[121]。

---

117 申敬澈, 2000「금관가야의 성립과 연맹의 형성（金官加耶の成立と連盟の形成）」『가야 각국사의 재구성（加耶各国史の再構成）』釜山大学校民族文化研究所編, 慧眼, ソウル, 73～77頁

118『後漢書』巻85・東夷列伝・第75倭伝。「安帝永初元年(107)、倭国王帥升等献生口百六十人、願請見。」
『三国志』巻30・魏書30・烏丸鮮卑東夷伝・第30・倭人伝。「景初二年(238)六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡、求詣天子朝獻、（中略）奉汝所獻男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈、以到。（中略）正始元年（中略）其四年(243)倭王復遣使大夫伊聲耆・掖邪狗等八人、上獻生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛布・丹木・猴・短弓矢。」

119 鈴木靖民, 2002「倭国と東アジア」『倭国と東アジア』鈴木靖民編, 吉川弘文館, 東京, 15頁

120 旗田巍, 1975「三国史記新羅本紀にあらわれた倭」『日本文化と朝鮮』2

121『三国史記』巻3･新羅本紀第3･慈悲麻立干6年(463)条の歃良城侵入記事がそのようなものの中の一つである。それ以前にも、そのような性格のものがあり得る。

Ⅳ．韓国と日本の４世紀の武装体系比較

１．遺蹟概観

すでに古代国家体制を整えていた中国東北部および韓半島北部の高句麗を除外してみると、４世紀の韓半島南部には各地域別に多様な墓制が出現し、漢江の流域には基壇式積石塚と木棺封土墳[122]、湖南地域には甕棺墓[123]、慶尚南･北道の東部地域には細長方形平面の慶州型木槨墓、洛東江流域には広幅形平面の金海型木槨墓などが現れていた[124]。これは昔の古朝鮮地域に入ってきて、数百年間持続した漢の郡県の作用によって南韓地域の政治的な統合がしばらくの間遅延し、楽浪郡が弱化した２世紀後半以降に政治権力が各地域別に分散し、成長した結果だと言えよう。

しかし『三国志』韓伝に「その風俗は衣幘を好むので、下戸たちが郡に至り朝謁すればみな衣幘を与えるが、自ら印綬と衣幘を作り着用した者も１千余名にもなった」[125]という記録からみて、２～３世紀以来、南韓の様々な単位の勢力は先進文物を求めるために、陸地で接する漢の郡県と積極的に交渉したことを知ることが出来る。その結果、彼らは生産技術や生活様式をはじめとする文化面において高い水準に達していた。このような点は４世紀のソウル石村洞古墳群、慶州政来洞古墳、金海大成洞古墳群などにみえる鉄鋌、鉄製甲冑、鉄鉾をはじめとする武器類、多様な陶質土器などの遺物から確認される。それゆえ全国的な規模の政治的な統合は遅れたとはいえ、４世紀以降南韓の様々な個別勢力は高い文化水準に基づいて政治的な統治体制樹立という面でも急速に発展を遂げ得た。

こうして百済はすでに３世紀中葉の古爾王代に連邦制の性格を帯びた初期古代国家を成立させており、４世紀後半の近肖古王代には、中央集権化に成功して成熟した古代国家に発展していた。新羅は４世紀後半の奈勿王代に対外的には高句麗の支援をうけ、対内的には王号として麻立干を用いつつ連盟体組織を一段階強化し、対外的に古代国家のごとく機能しはじめた。加耶は４世紀後半に対外的に百済および倭と連結し、再び一つに統合され発展し、対内的には記録が僅少だが、金海大成洞古墳群と慶州皇南洞109 号墳の比較からみて、新羅に劣らぬ権力集中を想定することができる[126]。

一方、４世紀の日本列島には畿内地域から北部九州まで前方後円墳が拡散しており、これを古墳時代前期と呼ぶ。その時期のはじまりについて、以前は３世紀末からと見られてきたが、近ごろ、これを３世紀中葉にさかのぼるとする見解[127]が有力である。前期古墳の存在様相から見て、その古墳の築造者は一つの政治連合体を構成しており、その中核は畿内の大和政権であった。

日本列島において全国的な規模の政治的統合が比較的早くに達成された原因は、本州の奥地にある畿内首長連合勢力が韓半島南部と交通するために、瀬戸内海と北九州までの通路を開拓したことにあるという。その地域では古代国家権力の成長に必須の鉄がほとんど産出されず、これを外部から獲得せねばならず、また、大首長の権威と交易能力を周辺の他の首長に誇示するために、外来の威勢品が必要だっ

---

122 林永珍, 1995『百済漢城時代古墳研究』ソウル大学校大学院博士学位論文
朴淳發, 2001『漢城百済의 誕生（漢城百済の誕生)』書京文化社, ソウル, 140～156 頁

123 成洛俊, 1983「영산강유역의 옹관묘 연구（栄山江流域の甕棺墓研究）」『百済文化』15, 公州師大百済文化研究所, 公州
イ･ジョンホ, 1999「영산강유역의 고분 변천과정과 그 배경（栄山江流域の古墳変遷過程とその背景）」『栄山江流域의 古代社会（栄山江流域の古代社会）』崔盛洛編著, 学研文化社, ソウル, 106～108 頁

124 申敬澈, 1995「金海大成洞・東萊福泉洞古墳群 点描」『釜大史学』19, 釜山大学校, 釜山

125『三国志』巻 30・魏書 30・烏丸鮮卑東夷伝・第 30・韓条。「其俗好衣幘、下戸詣郡朝謁、皆假衣幘、自服印綬衣幘、千有餘人」

126 金泰植, 2003「初期古代国家論」『강좌 한국고대사（講座韓国古代史）』第 2 巻, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 71～89 頁

127 白石太一郎, 1999『古墳とヤマト政権』文春新書 036

たというのである[128]。『三国志』倭人伝に、女王国が各国の交易について大倭に監視させ、一大率を伊都国に設置して諸国を監察することで、中国と韓国に対する遠距離交易を監督させた[129]ように、文献資料を通しても、すでに3世紀前半に日本列島において交易に関連した連盟長の権限が発達していたことを確認することができる。

そして、日本のある考古学者はこのような畿内の倭政権の地理的な状況を前提として、倭は韓半島南部の鉄を安定して入手する物資流通システムを掌握するために、中央政権次元で加耶や百済が求める同盟に応じ、韓半島南部社会に政治的または軍事的に積極介入したと見ている[130]。これは文献史料の分析による古典的な任那日本府説とは表現形式が異なるが、「掌握」または「政治的介入」などの用語を通じて、少なくとも加耶に対して倭が優位に立った軍事的・政治的な関係を想定していると考えられる。

しかし、4世紀、すなわち日本の古墳時代前期の前方後円墳から出てきた遺物は、銅鏡、碧玉製鋤形腕輪［鍬形石］と車輪型腕輪［車輪石］などのように、司祭者的な性格を帯びた副葬品を編年基準としている[131]。これから見て、4世紀の日本列島の支配権力は実質的な武力に基盤を置いていたのではなく、儀礼的なものであったのである。それゆえ、その統治体制も官僚制に基盤をおいた厳格なものではなく、各地域勢力の独立性が温存されたまま、序列化されていたものにすぎなかった[132]。だとすれば、実質的な武力に基盤を置いた権力ではなく、4世紀の日本列島の住民の固有の精神世界や社会秩序においてのみ通用する権力が、韓半島にまで及びうるということは疑わざるをえない。

では、そのような関係を韓半島と倭の2地域の墳墓の副葬品から確認することができるだろうか。本稿で論議の核心になるのは、広開土王陵碑文に現れる倭軍の性格であるので、高句麗、百済、加耶、倭の戦争遂行能力に関連がある武器、馬具、甲冑などを整理してみよう。

2．高句麗の武装体系

発掘遺物を通して高句麗の武器を調べると、射る兵器［射兵］である鉄鏃と長い兵器［長兵］である鉄鉾が多く、その次に短い兵器［短兵］である環頭大刀と鉄剣が出土している[133]。14基の高句麗古墳壁画に現れる武器を整理してみると、4～5世紀の高句麗の武器の比率は鉄鉾 46.85%、弓 16.78%、環頭大刀10.49%、鉄剣2.99%、短刀1.39%であり、鉄鉾が主流をなしている[134]。これは3世紀以前、漢代のように刀を主にしていたものから、4～5世紀には重装騎兵を中心とした新たな兵種の成立をもとにして、鉾中心の武器体系が確立し、刀は補助武器として使用されたことを反映している[135]。

---

128 山尾幸久, 1983『日本古代王権形成史論』岩波書店, 東京, 73～74頁

129『三国志』巻30・魏書30・烏丸鮮卑東夷伝・第30・倭人条。「国国有市、交易有無、使大倭監之。自女王国以北、特置一大率、検察諸国、諸国畏憚之。常治伊都国、於国中有如刺史。王遣使詣京都帯方郡諸韓国、及郡使倭国、皆臨津捜露、伝送文書賜遺之物詣女王、不得差錯」

130 都出比呂志, 1998「総論－弥生から古墳へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店, 東京, 42～44頁

131 増田精一, 2001『日本国の成立』学生社, 東京, 80頁

132 4～6世紀の日本列島の社会発展段階については、連邦制国家に近いものと見る初期国家論（都出比呂志、田中琢、松本武彦）と連盟体社会に近いものと見る首長連合論（和田晴吾、佐々木憲一）があるが、4世紀の社会の性格はやはり連盟体に近いものと見られる。詳細は第V章第6節で後述する。

133 魏存成, 1994『高句麗考古』吉林大学, 吉林

134 李仁哲, 2000『고구려의 대외정복 연구（高句麗の対外征服研究）』白山資料院, ソウル, 261～262頁

135 余昊奎, 1999「高句麗 中期의 武器体系와 兵種構成（高句麗中期の武器体系と兵種構成）」『韓国軍事史研究』2号, 国防軍史研究所, ソウル, 71～73頁

また、４～５世紀の高句麗古墳壁画に描写された行列図から軍隊の構成を見ると、歩兵：騎兵が 73 名：59 名であり、歩兵の比率が約 10%程度高い[136]。ところで、その行列図の護衛行列の構成は、安岳３号墳(西暦 357 年)が７列縦隊、徳興里壁画古墳(西暦 408 年)は５列縦隊、薬水里壁画古墳（５世紀前半）は３列縦隊をなしているが、時期別に重装騎兵の位置に変化がある。ここで重装騎兵というのは、鉄甲を巻いた馬に乗り、鉄鉾を持ち、札甲と冑（兜）を着用した兵士を指す。安岳３号墳の段階では内側の歩兵４列と外側の重装騎兵２列が墓主を護衛したが、徳興里古墳の段階では外側の重装騎兵の位置はそのままだが、内側の歩兵４列が消え、代わりに軽装騎兵２列が現れる。薬水里古墳の段階では軽装騎兵２列だけが護衛を受け持ち、重装騎兵はその背後の密集隊形の騎兵隊に変貌していった[137]。

ここから見て高句麗の軍隊は４世紀中葉には歩兵と騎兵が調和した形態にあったのが、５世紀に入ってからは全体が騎兵を主として運営されたことがわかる。したがって、400 年当時に加耶地域に遠征してきた高句麗の歩騎５万の様相は、安岳３号墳と徳興里・薬水里古墳に現れる行列図の中間的な姿、すなわち、歩兵と騎兵が並存するが、重装騎兵の重要性が相対的に強化された状態であったものと推定される。

３．百済の武装体系

百済の初期馬具は最近、韓半島中西部地域を中心に出土しているが、いまだ３世紀のものがなく、主に４世紀以後の轡と鐙が出土している。轡は棒状の銜留がついた鑣轡が 80%を占めており、鐙も初期から部分補強を加えた木心鉄板張鐙のような実用的な馬具が主流をなす。これらは中国東北地方の鮮卑系馬具に起源をもっており、4 世紀前半には短いシャモジの柄様の引手をもつ轡が現れ、4 世紀後半には長い引手をもつ轡が現れる[138]。

百済の武器体系は、これまでに出土した遺物が大部分京畿道南部の華城と忠南の天安、清州、公州、大田、益山、舒川一帯のものであり、中央であるソウル地域のものがなく、一定の限界がある。そのような状態であるが、おおまかな変化様相を見ると、３世紀のものは断面レンズ型の鉄鉾と多様な形式の鉄鏃が中心をなしており、一部の素環頭大刀があり、『三国志』や『晋書』の記録とだいたい符合する。

しかし３世紀末ないし４世紀前半に刺す機能を主とする鉄鉾が出現し、４世紀後半に鉄鉾は大・小形に機能的な分化をなし、刀は装飾大刀も現れるが、騎乗戦のための実戦的な木柄刀が補助武器として普及したことが特徴である。したがって、百済においても騎乗馬具の拡散にしたがって以前の歩兵中心から騎兵・歩兵の兵種が分化編制されるが、騎兵の場合、高句麗のような重装騎兵よりは軽装騎兵が主であった可能性が高い[139]。

４．加耶の武装体系

加耶地域の場合には、３世紀後半以後、金海大成洞古墳群、釜山福泉洞古墳群などで騎乗用実用馬具

---

136 前注に同じ

137 李蘭暎・金斗喆, 1999『韓国의 馬具（韓国の馬具)』韓国馬事会馬事博物館, 果川, 226～229 頁

138 成正鏞, 2003「百済漢城期騎乗馬具の様相と起源」『古代武器研究』4, 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室, 彦根, 28～29 頁

139 成正鏞, 2000「中西部地域 3～5 世紀 鉄製武器의 変遷（中西部地域３～５世紀鉄製武器の変遷)」『韓国考古学報』42, 韓国考古学会, 137～138 頁

と鉄製甲冑、攻撃用鉄製武器などが発達しはじめた。４世紀の加耶の馬具は大部分が棒状の銜留がついた鑣轡であり、鉄棒をねじって作った２連式の銜と長い引手を持っている[140]。これは重装騎馬戦術に適合するように作られた東北アジアの様々な馬具製作技術を結合し、改良したものである[141]。４世紀後半には木心鉄板被輪鐙子とハート型の馬帯の飾り［心葉形杏葉］も出土し、重装騎馬戦術の駆使が可能になり、５世紀はじめにはそれらが本格的に拡散した[142]。

４世紀の加耶の防禦具には縦長板釘結板甲、伏鉢形冑、札甲などがあるが、主流は縦長板甲である[143]。この中で伏鉢形冑と札甲は北方遊牧民族の甲冑に源流を置いているが、縦長板釘結板甲は嶺南地域特有の鎧の形式であり、これは３世紀以前の木甲または皮甲が北方から新たに流入した鉄製の伏鉢形冑および札甲の刺激によって鉄製に転換したものである[144]。したがって、加耶の騎馬武装は、３世紀末にこの地域に入ってきた北方住民の文化を土台に、４世紀にこの地域において変形されたものと見られる。

加耶の武器は３世紀後半から４世紀前半にかけて、攻撃用武器が非常に発達し、鉄鉾は鉾身の幅が狭くなり、断面が稜形に製作され、鉄鏃も鏃の重さを増大させて長頸式に改良されたことで、二つとも人馬に貫通したときの殺傷力が極大化した[145]。これは４世紀に入って加耶地域内部の小国の間の、または新羅と加耶の間に熾烈な戦争が起こり、これに対応して支配層も戦闘能力を強化するために、致命的な武器の開発に力を注いだという事実を示している。

加耶において武力による権力集中と同時に専門戦士集団が現れ、騎馬戦と遠距離攻撃が主要な戦術として位置付けられるようになるのは５世紀以降であるが[146]、すでに４世紀後半には、少数の専業的で特権的な戦士集団が、武装を通じて支配階層に登場した[147]。あるいは４世紀の金海大成洞遺跡は嶺南地域においてもっとも早い段階に甲冑と馬具を備えて、攻撃用の武器の多種・複数の副葬を通じた個人集中化をなし、「武装の最上級遺蹟が登場」した状態であることを示し、その近隣の上級および中級の遺蹟においても武装保有者、すなわち半専業的常備軍が存在し、加耶の支配勢力はすでに相当な水準の軍事動員体制を備えていたともいう[148]。

５．倭の武装体系

百済や加耶に比べると、日本列島では４世紀代に遡及できる金属製馬具が一点も出土しておらず、５

---

140 申敬澈, 1994「加耶 初期馬具에 대하여（加耶初期馬具について）」『釜大史学』18, 釜山大学校, 釜山

141 金泰植・宋桂鉉, 2003『韓国의 騎馬民族論（韓国の騎馬民族論）』韓国馬事会馬事博物館, 果川, 251～254 頁

142 上掲書, 258～262 頁

143 宋桂鉉, 2001「4～5 세기 동아시아의 갑주（４～５世紀の東アジアの甲冑）」『4～5 世紀 東亜細亜 社会와 加耶（４～５世紀東亜細亜社会と加耶）』金海市, 発表要旨, 27 頁

144 申敬澈, 1994「加耶 初期馬具에 대하여（加耶初期馬具について）」『釜大史学』18 ; 2000「금관가야의 성립과 연맹의 형성（金官加耶の成立と連盟の形成）」『가야 각국사의 재구성（加耶各国史の再構成）』釜山大学校韓国民族文化研究所編, 慧眼, ソウル

145 金泰植・宋桂鉉, 前掲書, 279 頁

146 宋桂鉉, 2001「전쟁의 양상과 사회의 변화（戦争の様相と社会の変化）」『고대의 전쟁과 무기（古代の戦争と武器）』第５回釜山福泉博物館学術発表大会, 釜山

147 李賢珠, 2002「福泉洞古墳群의 武器副葬様相을 통해 본 軍事組織의 形態（福泉洞古墳群の武器副葬様相を通してみた軍事組織の形態）」『博物館研究論集』9, 釜山博物館, 釜山

148 金斗喆, 2003「무기・무구 및 마구를 통해 본 가야의 전쟁（武器・武具および馬具を通して見た加耶の戦争）」『가야고고학의 새로운 조명（加耶考古学の新照明）』韓国民族文化研究所編, 慧眼, ソウル 145 頁

世紀になってようやく加耶から個別的に受容する様相を見せる[149]。日本の古墳時代の馬具に関する研究として、小野山節はかつて編年作業をおこない、“もっぱら輸入品に依存した時期”を第１期と設定し[150]、鐙の形態の違いによって第１期を古式と新式に分けて考えた[151]。これに対して中村潤子は５世紀前半の第１次導入期（古式）に伝えられた韓半島の洛東江下流域の馬具は結局、日本に根を下ろすことができずに終わり、５世紀後半の第２次導入期（新式）に剣菱型または扁円剣尾形杏葉とｆ字形鏡板に象徴される陜川玉田系統の馬具が入り、それがはじめて日本で継承、発展したと言う[152]。すなわち、日本に4世紀代の騎馬文化はなかったといっても過言ではない。

甲冑の場合、橋本達也は日本の古墳時代初期に現れる小札革綴冑は中国系譜の舶載品であり、前期中葉以降（４世紀後半）に現れる竪矧板革綴短甲と方形板革綴短甲は韓半島南部の縦長板釘結板甲の影響を受けて、日本内で作られたものと考え、古墳時代の中期中葉（５世紀後半）に現れる鋲留技法の板甲、札甲［掛甲］、眉庇付冑などは韓半島の工人が日本列島に渡り、新しい体制によって生産し始めたものだと説いた[153]。ただ、上述の小札革綴冑はごく少数の最高位層の威勢品であったにすぎず、竪矧板および方形板革綴短甲は加耶の板甲をそのまま具現できず、全体の構造や製作技法に相当の差異があった。すなわち、日本列島の４世紀の甲冑文化は未熟なものだった。

また、倭は４世紀代に短剣、短刀、薄い両刃槍［鈹］と鉄鏃などの武器を主に使用し、５世紀に至ってようやく攻撃具の主流として長刀を採択した程度だった[154]。薄い両刃槍［鈹］と鉄鏃はある程度の甲と盾さえあれば致命傷を負うことがない程度に軽かった。したがって、倭の武装は一部の射兵が付加されているが、個人の能力を重視する短兵器が主流であり、実戦的な武器としてよりは誇示的な威信財としての性格が強いと見られる。高句麗・百済・加耶において騎馬武装と関連して盛行していた主要武器である鋨部を持った鉄鉾は最後まで採用できずにいた。

４世紀の倭がその程度の武器しか備えられなかったということは、いろいろな原因があるが、有効な鉄生産技術の無知、鉄器生産技術の遅れ、加耶の戦略的な技術および武器に関する搬出統制なども影響を及ぼしていたことは間違いない。しかし、根本的には日本列島が先進的な外部勢力との熾烈な戦闘経験がなく、弥生時代以来の平和的で儀礼的な社会の雰囲気の中で、お互いに臣下として屈服することに満足する「足相臣服」[155]の伝統がまだ維持されており、それ以上の致命的な武器の開発の必要性を感じなかったためであろう。

４世紀末まで高句麗と加耶および倭の馬具、甲冑、武器の文化様相をこのように比較してみる時、高

---

149 金斗喆, 2002「馬具와 地域間交流（馬具と地域間交流）」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第５回歴博国際シンポジウム，日本国立歴史民俗博物館，佐倉

150 小野山節, 1959「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系三 日本３ 古墳時代』平凡社, 東京

151 小野山節, 1966「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』52-2, 日本考古学会

152 中村潤子, 1991「騎馬民族説の考古学」『考古学 その見方と解釈』筑摩書房；森浩一編, 1993『馬の文化叢書 第一巻 古代－埋もれた馬文化』馬事文化財団, 横浜

153 橋本達也, 2002「古墳時代甲冑の系譜－朝鮮半島との関係－」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』第５回歴博国際シンポジウム，日本国立歴史民俗博物館，佐倉, 115～118 頁

154 松本武彦, 1999「古墳時代の武装と戦闘」『戦いのシステムと対外戦略』東洋書林, 東京

155『三国志』巻 30・魏書 30・烏丸鮮卑東夷伝・第 30 倭人条「其俗、國大人皆四五婦、下戸或二三婦、婦人不淫、不妬忌、不盗竊、少諍訟。其犯法、軽者没其妻子、重者滅其門戸。及宗族尊卑、各有差序、足相臣服。」

句麗は鮮卑族の国家である前燕との実戦を経ながら、すでに重装騎兵に代表される先進的な騎馬武装が組織的に運営されていた段階であった。加耶もすでに４世紀に一部上層部を中心に断面稜形鉄鉾と縦長板釘結板甲を主とする先進武装体系を整え、重装騎兵戦術を活用していたが、これを利用して社会全般にわたって組織的な戦備体系を構築したり、または効率的に運営したりする段階には及んでいなかった[156]。

一方、倭は内部的には２世紀後半に長期間にわたる大乱を経験したことがあったといっても、社会的雰囲気がまだ平和的であり呪術的だった。４世紀の倭は地域勢力相互間の秩序を尊重する状態であり、全般的な武装体系も重装騎兵戦術をまったく理解できない水準に止まっていた。

したがって、４世紀に韓半島南部は百済、加耶、新羅に分裂しており、日本列島は交易の必要性のために畿内地域を中心に一元的権威が作り上げられていたと言っても、その権威自体が儀礼中心の限界性を有し、戦争に直接的に影響を及ぼす馬具、甲冑、武器の格差が大きい状態にあったので、倭が加耶に対して政治的や軍事的に優位にあったとは言い難い。

そのうえ加耶では早ければ紀元前１世紀、遅くとも紀元後２世紀からは鉄を量産しており、日本列島では５世紀後半まで鉄をほとんど生産できなかった[157]。これは加耶が製鉄技術を日本列島に伝えず、一方では日本の畿内政権が加耶を制圧できずにいた証拠でもある。

Ⅴ．４世紀東アジア情勢と韓日関係

１．中国の情勢

４世紀は、東アジアにおいて中国の漢族中心の国際秩序が崩れ、東北アジアのさまざまな種族の運動力が拡散した時期であった。その運動力が均衡をなし安定するまでに、長い期間にわたって多くの混乱が相次ぎ、各国の相互関係は国際的な力学構図によって連鎖反応を引き起こした。そこで、この節では韓・中・日地域の各勢力の情勢を順次考察し、それに基づいて４世紀の韓日関係を概観してみたい。

中国では291年に西晋の洛陽において８王の乱が始まった後、北方の匈奴と鮮卑が様々な契機により長城内に混ざり合って入り、関中の氐族と羌族の独立が続いた。これにともない西晋は支配力が急激に弱化して滅亡し、317年にその一族である司馬睿が揚子江以南に亡命政権東晋を建てた。華北では匈奴族劉淵が303年に漢（後の前趙）を建国して、混乱した五胡十六国時代が始まった。その後、羯族の石勒が319年に後趙を建てて勢力を蓄え、329年に前趙を滅亡させて華北一帯を掌握した。

遼東では慕容廆が307年に鮮卑大単于を自称して勢力を構築し、321年には襄平と平郭を拠点に軍事力を増強し、337年には燕王を自称するほど強盛になった。それを継承した前燕の慕容皝は342年に高句麗征伐に成功した後、中原に進出を図り、352年には後趙を滅ぼして華北一帯まで掌握した[158]。

一方、氐族の苻健は351年に長安を攻略して前秦を建てた後、前燕に張り合って対立したが、第３代苻堅が370年に前燕を滅ぼし、すぐに遼東・遼西一帯も占領した。前秦は五胡十六国の国家のなかでもっとも安定した治世を維持し、揚子江以北を全て平定したが、つづいて383年に江南まで平定しようと

156 金斗喆, 2003, 前掲論文

157 前註116参照。

158 余昊奎, 2000「4 세기 동아시아 국제질서와 고구려 대외정책의 변화 －対前燕関係를 중심으로 －（4世紀の東アジア国際秩序と高句麗の対外政策の変化－対前燕関係を中心に）」『역사와 현실（歴史と現実）』36, 韓国歴史研究会, ソウル

東晋を攻撃したところ、肥水の戦いで大敗して滅亡した。その後、華北は後燕と後秦をはじめとする小国家に分かれるが、鮮卑族拓跋珪が386年に北魏を建てて395年に後燕を大いに撃破するなど戦勝をあげて、439年の北凉併合を最後にこれらをみな統合した[159]。

２．高句麗の情勢

中国東北部および韓半島地域では無秩序だった列国が相互に統合して、高句麗・百済・新羅・加耶の４国が鼎立した。そのなかでももっとも北側に位置していた高句麗は、３世紀後半に西川王代にいたり、各地域に温存されていた固有名部を一掃することで連邦制的な初期国家を脱し、王と中央貴族による中央集権的な統治体制を完備した[160]。４世紀初めの高句麗美川王は、北中国方面において五胡十六国の跋扈する混乱期をむかえ、313年に楽浪郡を、314年に帯方郡を滅ぼすという成果をあげた。しかし高句麗の膨張は遼東地方に勢力を構築していた前燕との対決を呼び、319年と320年に東夷校尉・平州刺史崔毖、鮮卑段部・宇文部などと連合して前燕を攻撃したが、みな失敗した。330年以後は華北の後趙と和親を結び前燕を牽制したところ、342年に慕容皝の攻撃を受けて丸都城が陥落し、王母周氏と男女５万が捕虜として連行されるという敗北を味わった[161]。

高句麗の故国原王は343年に平壌の東黄城に移居し、ほぼ30年にわたってこの地域に対する支配体制整備に力を注ぎ、この間、前燕は中原経営に没頭していたので、高句麗とは軍事的な衝突もなく小康状態を維持した。しかし高句麗はすぐに続いて南側で強国として成長した百済と黄海道地域を間に置いて対決するようになり、369年には故国原王が軍士２万で百済を征伐したところ、黄海道の雉壌において敗北し、371年には百済の軍士３万を率いた近肖古王の攻撃をうけて同王が平壌城で戦死するという困難を経験した[162]。

繰り返される外患のなかで、高句麗は周辺国家に対する巨視的な外交と安定した支配秩序を創出する必要性を切実に感じた。こうして第17代小獣林王は、前秦王苻堅と交流して仏教を受け入れ、太学を建てて、373年に律令を頒布することで成熟した古代国家体制を完成させた。これをついだ故国壌王は後燕と対決しつつ、一方では新羅に使臣をおくって修好した。この時、高句麗が新羅を支援してその王族実聖を人質として受けたのは[163]、大々的な百済征伐を目の前にして新羅が百済と連結するのを防ぐ外交戦略であった。このような対内外的な整備に力を得て、高句麗は391年に広開土王が王位に登ってから、後燕および百済に攻勢に出た。そして南方では396年までに漢江以北地域を占領し[164]、西方では402年までに遼東の主要拠点を獲得し後燕と攻防を繰り返し[165]、407年に馮跋のクーデターで慕容王室

---

159 孔錫亀, 1988『高句麗領域拡張史研究』書景文化社, ソウル, 41～53頁

160 盧泰敦, 1999『고구려사 연구（高句麗史研究）』四季節, ソウル, 167～168頁。
余昊奎, 2000「고구려 초기 정치체제의 성격과 성립기반（高句麗初期政治体制の性格と成立基盤）」『韓国古代史研究』17, 韓国古代史学会, 157頁
金泰植, 2003「初期 古代国家論」『강좌 한국고대사（講座韓国古代史）』第2巻, 駕洛国史蹟開発研究院,ソウル, 44～47頁
林起煥, 2004『고구려 정치사 연구（高句麗政治史研究）』한나래(ハンナレ), ソウル, 104～105頁

161『三国史記』巻18･高句麗本紀6･故国原王12年条。

162『三国史記』巻18･高句麗本紀6･故国原王39年、41年条。

163『三国史記』巻18･高句麗本紀6･故国壌王8年条。

164『三国史記』巻18･高句麗本紀6･広開土王元年、2年、3年、4年条、および『広開土王陵碑文』永楽6年条。

165『三国史記』巻18･高句麗本紀6･広開土王9年2月、11年、13年、14年、15年条。

が倒れたことによって、遼河一帯を安定的に確保するようになった。

３．百済の情勢

漢江流域の百済の情勢はどうであったのだろうか。『三国史記』百済本紀によれば、古爾王27年(260)条に、6佐平および16官等制などの中央集権的官僚制を完備したと現れるが、これは後世の百済人の古爾王重視の観念によって造作されたものである[166]。この時期百済の発展程度はもう少し低く見るべきだろう。遺跡分布をみると、3世紀後半に百済の王城であるソウル江東区の夢村土城と風納土城が築造され、3世紀後半から4世紀前半に時期に百済の境域が忠南以北まで設定され、その地域の一部の主要勢力に対して百済の威勢品が渡されたことがわかる[167]。そうであるならば、3世紀後半に該当する古爾王代の後期に、百済が漢の郡県の干渉と馬韓小国連盟体の枠組みより抜け出て、独自の部体制を施行する初期古代国家として成長したとみるのが正しい[168]。

その後、百済は286年に高句麗に対抗して帯方を救援したりもしたが、全体的には中国郡県と敵対関係を維持し、楽浪によって298年と304年に責稽王と汾西王が殺害されたこともあった。百済はその後しばらく外部の問題により王統の混乱を経た末[169]、346年に近肖古王が王位に登り、爆発的な成長を開始する。これは313年と314年に楽浪郡と帯方郡が高句麗によって滅ぼされ、そこから高度な文化をもった遺民たちが百済に編入されたことと関連があるだろう。

近肖古王は369年と371年の対高句麗戦争を勝利に導いてから、372年には東晋に使臣を派遣して鎮東将軍・領楽浪太守の冊封をうけ、これを前後して博士高興に国史である『書記』を編纂させた[170]。しばらく後、枕流王元年および2年(385)に百済王室が仏教を公認したということ[171]からみて、これを前後する時期に古代国家の体制が完備されたとおもわれる。考古学的に4世紀後半から5世紀後半の間にソウル石村洞古墳群が整備され、地方の主要古墳群が消え失せる現象は[172]、地方勢力家たちが没落し、中央集権化が飛躍的に強化された様相を反映している。

ここで注目すべきは、4世紀後半の30余年にわたって、昔の帯方地域の所有権をめぐって高句麗と百済間で非常に長い間争奪戦が繰り広げられた点である。百済からみると、近肖古王、近仇首王、辰斯王、阿莘王に渡る期間で、高句麗からみると、故国原王、小獣林王、故国壌王、広開土王に渡る期間で

---

166 盧重国, 1988『百済政治史研究』一潮閣, ソウル, 217頁

167 権五栄, 1988「4세기 百済의 地方支配方式 一例（4世紀百済の地方支配方式一例）」『韓国史論』18, ソウル大学校国史学科, ソウル, 23～27頁

朴淳發, 1997「漢城百済의 中央과 地方（漢城百済の中央と地方）」『백제의 중앙과 지방（百済の中央と地方）』忠南大学校百済研究所, 儒城, 151頁；2001『漢城百済の誕生』書景文化社, ソウル, 219～230頁

168 盧泰敦, 1975「三国時代의「部」에 関한 研究－成立과 構造를 中心으로－（三国時代の「部」に関する研究－成立と構造を中心に）」『韓国史論』2, ソウル大学校国史学科, ソウル, 14頁

盧重国, 1988, 前掲書, 98頁

金泰植, 2003「初期古代国家論」『강좌 한국고대사（講座韓国古代史）』2, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 50頁

169 古爾系が王位に進出して以後、積極的な対郡県姿勢は、百済内部の葛藤を解消して百済の国際的位置を向上させるのに重要な役割を果たしたが、衰退の道を辿っていた郡県の最後のあがきである対百済牽制によって、逆に古爾系の衰退が促進され、その後、肖古系の比流王と古爾系の契王との王位継承紛争があった。盧重国前掲書, 123～129頁。

170 前掲書, 114頁。

171『三国史記』巻24･百済本紀2･枕流王即位年、2年2月条。盧重国, 前掲書, 115頁

172 朴淳發, 1997 前掲論文, 151頁。

あり、戦闘が起こった主要地域は雉壌（黄海道延白郡白川邑）、浿河（礼成江）辺、平壌城、水谷城（黄海道新渓郡多栗面三美里）、都坤城、石峴等 10 余城、関弥城、青木嶺などであった[173]。すなわち 369年から 399年までの 30年間にわたり、黄海道および京畿北部地域には大規模なものだけでも 10 回あまりの戦争が起こったのである。

高句麗と百済の間の争奪戦は単純な領域争いにとどまらず、古代国家の運営に必要な高級文化に関する所有権の争いでもあった。昔の楽浪郡・帯方郡地域は起源の上では古朝鮮の遺民が住んでいたとはいえ、後漢初期以後、漢化が急速に進行して当代の中原文化をたちまちに受容してきた貴族層が広範囲に存在していた[174]。そこで高句麗はこの地域を無理に直接統治するよりも、４世紀中葉から５世紀初にかけて平東将軍・楽浪相冬寿、帯方太守張撫夷、幽州刺史鎮などの中国亡命客を代表者に立てて、これらの幕府組織を通じて間接統治した[175]。百済が奪おうとしたのも、高句麗がこれを防ごうとしたのも、まさしく彼らの先進文化と技術人力であった。４世紀後半に韓半島をめぐる国際的交渉および戦争の裏には、高句麗－百済間の旧帯方地域の領域と文化人力に対する所有権争いが基調をなしていたのである。

一方、この当時、古代国家百済の南方境域について考えることができる記事は、『日本書紀』神功 49 年条の記事しかない。さきに第Ⅱ章で検討したように、ここで倭軍が慶南や全南地域を平定して百済に与えたというのは、倭と百済がこの地域勢力たちの仲介のもとで交易を始めたということを意味する[176]。ただ、ここで百済に降服したという４邑は、実際に百済の領域に含まれたことを意味し、その範囲は比利（群山市澮県面）、辟中・辟支山（金堤市）、古沙山（井邑市古阜面）などの地名からみて全羅北道西方まで及んだ[177]。また百済は、枕彌多禮もしくは新彌国として記録された全南海岸の海南・康津方面の勢力の対外交渉権を剥奪して、これに代わるほどの橋頭堡を確保し[178]、海岸から離れた霊巌郡始終面や羅州郡潘南面などの栄山江流域の勢力には、武力的な制裁や改編を伴わずに貢納支配を行うにとどまっ

173『三国史記』巻 24･25 百済本紀を通して見るとき、近肖古王 24(369)年に高句麗の故国原王が２万の軍をもって雉壌に下るや、百済はこれを撃破した。同 26(371)年には浿河辺において百済が高句麗軍を急襲し、さらに精兵３万をもって平壌城まで攻撃して故国原王を死に至らしめて帰還した。同 30(375)年には高句麗が水谷城を攻撃してこれを陥落させた。近仇首王 2(376)年には高句麗が百済北辺に侵攻。同 3(377)年 10 月には百済が３万の軍をもって平壌城に侵攻し、11 月には高句麗が侵略してきた。辰斯王 3(387)年には靺鞨と関弥嶺で交戦。同 5(389)年には高句麗の南辺を侵攻し、同 6(390)年には高句麗の都坤城をたたいてこれを陥落させたが、同８(392)年には高句麗の広開土王が４万の軍をもって石峴等 10 余城を陥落させ、開弥城も陥落させた。阿莘王 2(393)年には１万の軍を送り関弥城を攻めたが勝利できず、同 3(394)年には高句麗と水谷城で争って敗れた。同 4(395)年には２回に渡って浿水と青木嶺まで侵攻したが失敗し、同７年および 8(399)年にも２回にわたって高句麗征伐を図ったが、実行できなかった。また広開土王陵碑文によれば、高句麗が永楽 6(396)年に百済を破り百済の 58 城 700 村を奪い、百済王の兄弟と大臣 10 人を捕らえて帰還したという。

174 尹龍九, 1989「樂浪前期 郡県支配勢力의 種族系統과 性格（楽浪前期 郡県支配勢力の種族系統と性格）」『歴史学報』126, 歴史学会, ソウル, 140 頁

175 林起煥, 1995「4 세기 고구려의 樂浪･帯方地域 경영（４世紀高句麗の楽浪・帯方地域経営）」『歴史学報』147, 歴史学会, ソウル, 42 頁。

176 金泰植, 1997「百済의 加耶地域 関係史：交渉과 征服（百済の加耶地域関係史：交渉と征服）」『百済의 中央과 地方（百済の中央と地方）』忠南大学校百済研究所, 儒城, 48～51 頁

『三国史記』には、369 年の百済について、北方の高句麗との戦争に関する記録はあっても、南方征伐に関する記録はないが、これは百済が南方に対して歴史的に特記するだけの本格的な軍事行動をとったわけではないためと考えられる。

177 上掲論文, 51 頁。

178 権五栄, 1999『복암리고분군（伏岩里古墳群）』全南大博物館, 光州, 310 頁

た[179]。

このように百済は４世紀後半の近肖古王代に中央集権化に成功し、旧帯方地域をおさえたが、これを安定的に制度化できない状況で高句麗広開土王の軍隊から391年から396年の間攻撃をうけ、漢江以北地域を喪失する危機を経験した。そうして百済は397年に太子腆支を倭に人質として送ったのであるから、これは援軍を要請するためのものであり、そこには任那加羅の協力が必須であった。百済が４世紀末に高句麗との戦争において任那加羅と倭を引き入れた措置は、西晋が３世紀末４世紀初の激しい内乱のさなか、兵力補給のために五胡を引き入れたのと同様の行為である。

４．新羅の情勢

新羅は韓半島内では発展の速度が遅く、３世紀までは12カ国で構成される辰韓小国連盟体をなしていた。そして慶州地域では３世紀後半に細長方形平面の慶州型木槨墓[180]、または積石木槨墓と呼ばれる新しい形式の墓制が発生し、慶山・蔚山・浦項など慶尚東部地域に拡散していった[181]。この時期、慶州地域の墳墓遺跡から大変な富や力を感じとることはできないが、慶尚東部地域における慶州勢力の中心的位置を確認できる。

『晋書』辰韓伝によれば、その王が281年、282年、286年と３回にわたって西晋に朝貢し[182]、『晋書』帝紀の当該年次の記事には辰韓という名はなく、東夷10国、20国、5国、11国などと現れる。この記録に問題なしとすれば[183]、当時の辰韓王は新羅王であろうが、その朝貢は交易ルートも不確実であるのみならず、万一事実だとしても西晋の東夷校尉の努力による一時的なことだったであろう。その直後には西晋の八王の乱によって交易自体が成立しがたかったであろうからである。

４世紀初の高句麗による楽浪・帯方併合以後、新羅が対外的にどのような状態にあったかははっきりしない。４世紀前半ないしはそれ以前に編年される慶州政来洞古墳と月城路29号墳出土の短甲や、月城路5号墳から出土した高句麗系の緑釉陶器などは、新羅と高句麗など北方勢力との交渉が早い時期からなされていた可能性を示唆する[184]。そのような過程を経ながら新羅は徐々に力の蓄積を成し遂げたのであろう。

しかし高句麗と新羅の連結が積極的に模索されたのは４世紀後半であり、これは百済との対決に敗れ南方進出または百済への報復を模索していた高句麗の意図によるものであった。新羅も訖解尼師今を最

---

179 文安植・이대석(イ・デソク), 2004『한국고대의 지방사회 －영산강유역의 역사와 문화를 중심으로－（韓国古代地方社会－栄山江流域の歴史と文化を中心に）』慧眼, ソウル, 107頁
栄山江流域における規模の巨大な甕棺墓の場合、墳丘の大きさから推して被葬者の権力集中度が非常に高いとみられるにも関わらず、副葬品が大変貧弱であることは、この地域の生産物の相当数が貢物の形態で出て行ったためであるという。李賢恵, 2000「４～５世紀栄山江流域土着勢力の性格」『歴史学報』166, 30頁

180 申敬澈, 1995「金海大成洞・東萊福泉洞古墳群点描」『釜大史学』19, 釜山大学校, 釜山

181 崔秉鉉, 1992『新羅古墳研究』一志社, ソウル
金大煥, 2001「嶺南地方 積石木槨墓의 時空的 変遷（嶺南地方積石積石木槨墓の時空的変遷）」『嶺南考古学』29, 嶺南考古学会, 大邱, 83～85頁

182『晋書』巻97･列伝第67･辰韓条。「武帝太康元年、其王遣使献方物。二年復来朝貢。七年又来」

183『晋書』辰韓伝は『三国志』韓伝の辰弁韓条を簡略に縮約した形を帯びつつも、弁辰12国がすべて辰韓に属するとしており、史料として否定的な問題が残される。

184 李賢恵, 1988「4세기 加耶社会의 交易体系의 変遷（4世紀加耶社会の交易体系の変遷）」『韓国古代史研究』1, 韓国古代史研究会

後に昔氏王統が断絶し、356 年に奈勿尼師今が王位に登った後、外交に積極的な様相を見せる。377 年に新羅が前秦に使臣を派遣した時、高句麗の使臣と同行したり[185]、381 年に新羅が高句麗を通じて衛頭を前秦に派遣したり[186]、高句麗との友好の代価として実聖を人質に送ったりしたことは[187]、これを反映する。これは新羅としては国家発展のうえで危機であると同時にチャンスでもあった。

そうして400年に高句麗の南征があった後、新羅は卜好などの王族を高句麗に人質として送ったり[188]、または高句麗が新羅の王位継承に介入し[189]、高句麗軍が新羅の領土内に駐屯したりするほどに危い状況にあった。一方で新羅は高句麗から先進文化を受け入れ成長もし、あるいはその力を借りて強敵である任那加羅を退けて洛東江東岸の唯一の覇者として台頭もした。結局、新羅は4 世紀後半の奈勿尼師今代に高句麗の支援を受けて初期古代国家を起こす端緒をつかんだのだが、高句麗の干渉のもとで成し遂げられず、５世紀前半の訥祇麻立干代に入って単位政治体である六部を王権に従属的に連合させて初期古代国家を形成した[190]。

５．加耶の情勢

加耶も新羅と同様に３世紀まで 12 カ国から構成される弁韓小国連盟体を成していた。弁韓の立場から見ると、当時の弁辰 12 国は名分上は辰王に所属したが、実際には狗邪国と安邪国を中心に統合されて政治的に辰韓と区分され、馬韓、濊、倭、および楽浪郡、帯方郡と交易するなど独自の行動をとった。そして弁韓は対外的に独立した存在であり、三韓のひとつとして認定されていた。ただ２～４世紀の遺物と遺跡が咸安よりは金海地域にかなり豊富に出土する点からみて、安邪国よりは狗邪国がより優越していた[191]。

ところで3 世紀後半に金海地方の勢力の中心は大成洞古墳群を築造した勢力であり、広幅形平面の金海型木槨墓[192]と呼ばれる新たな形式の墓制が発生し、ここではいくつか新たな文物の要素が現れた。すなわち①厚葬、②陶質土器、③殉葬、④金工品、⑤銅鍑、⑥墓制の分化と先行墳墓の破壊、⑦鉄製甲冑と騎乗用馬具の登場など７種の北方文化要素が、金海大成洞 29 号墳に代表される時期の金海地方に一度に現れる[193]。

加耶地域におこった大きな変化は3 世紀末、４世紀初の東北アジア世界に伝えられた外部の衝撃に起因するものに違いない。北方的要素は金海地方の加耶国が西北韓地域と円滑な交易活動をしていた２世紀後半から現れ始め、４世紀に入って集中的に現れるようになるのである[194]。

185『資治通鑑』巻 104･晋紀･太元 2 年条

186『三国史記』巻 3･新羅本紀 3･奈勿尼師今 26 年(381)条

187 前掲書, 奈勿尼師今 37 年(392)条

188 前掲書, 実聖尼師今 11年(412)条

189 前掲書, 奈勿尼師今 46 年(401)条および訥祇麻立干元年(406)条

190 金泰植, 2003「初期古代国家論」『강좌 한국고대사（講座韓国古代史）』第 2 巻, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 62～63 頁

191 金泰植, 2002『미완의 문명 7 백년 가야사（未完の文明 700 年加耶史）』第 2巻, 푸른역사（プルンヨクサ), ソウル, 21 頁

192 申敬澈, 1995「金海大成洞・東萊福泉洞古墳群点描」『釜大史学』19, 釜山大学校, 釜山

193 申敬澈, 2000「금관가야의 성립과 연맹의 형성（金官加耶の成立と連盟の形成）」『가야 각국사의 재구성（加耶各国史の再構成）』釜山大学校民族文化研究所編, 慧眼, ソウル, 59 頁

194 宋桂鉉, 2000「討論要旨：金官加耶の成立と連盟の形成」『加耶各国史の再構成』釜山大学校民族文化研究所編, 慧眼, ソウル, 85～87 頁

『三国史記』新羅本紀の初期記録[195]に現れるように、３世紀頃の加耶国は洛東江流域の代表として新羅と戦争を繰り広げた[196]。その主体勢力の墳墓だったとみられる金海大成洞古墳群では、２世紀後半から６世紀前半までの様々な墳墓が発掘されたが、その中心をなすのは３世紀後半から４世紀末にいたる木槨墓である。そしてそこから出土した遺物は基本的に良洞里古墳群のものと同一であり、２世紀後半から大成洞に遺跡があったとはいえ、３世紀後半以後の発展がそれ独自によるものであったとみるだけの証拠は現れていない。

このようにみると、１世紀以来金海の加耶国の中心であった良洞里集団が、２世紀後半以後、新羅との対決や金海湾海域の監視および統制などのために大成洞集団を支援し、３世紀後半期に政治権力が大きく強化されて広域防御体制を構築し[197]、釜山福泉洞集団を従属的に連合させ、これとの協力関係をより緊密にするため、主力が大成洞方面に移動したものと推定される[198]。このような決断を下せたのは、もちろん加耶国の周辺勢力の統制を通じた中央集権能力の強化があったからである。これによって加耶国が洛東江流域においてもっとも強い支配者として台頭したことが確認できる。

しかし幾ばくもなく高句麗が４世紀初に楽浪郡と帯方郡を併合したことは、韓半島南部において楽浪・帯方との遠距離貿易を通じて発展した金海の加耶国の領導力に大きな支障をもたらした。そうして加耶連盟内に内紛が起こり、加耶連盟は咸安の安羅国中心の西部地域と金海の加耶国中心の東部地域に分裂した[199]。４世紀の古式陶質無蓋高杯が分化し、筒形高杯は主として馬山西方から晋州まで現れ、外反口縁無透窓高杯が主として昌原東方から金海・釜山地方まで現れるのは、この分裂様相を反映する[200]。楽浪・帯方を通じた一方的な文化基準が高句麗の膨張によって消え失せるや、韓半島南部各地の勢力はあちこちと連合して自生的に通用する局地的な文化圏を形成するようになり、浦上八国の乱とこれによる加耶連盟の東西分裂は、その結果として現れた現象であった。

金海中心の東部加耶は帯方－加耶－倭の交易路から帯方が消滅した状態で、倭との交易にいっそう没頭する他なかった。４世紀後半に属する金海大成洞２号墳、13 号墳、23 号墳から日本系威勢品である巴形銅器が現れるのはこれを反映する。このような時期に百済の近肖古王が加耶と交流をはじめたが[201]、

195『三国史記』巻１・新羅本紀１・脱解尼師今 21 年、婆娑尼師今６年、15 年、17年、18 年、27 年、祇摩尼師今４年、５年条

196 金泰植, 2002『미완의 문명 7 백년 가야사（未完の文明 700 年加耶史）』第２巻, 푸른역사（プルンヨクサ), ソウル, 129 頁

197 金海退来里古墳群と礼安里古墳群などが３世紀後半から築造されはじめることから、金海湾海域の邑落のみならず、新羅・加耶各地に通じる陸路交通の中間地点や、金海湾の後背盆地に位置する勢力が、この時期に金海の加耶国勢力圏内に新たに編入されたとの見解がある。李賢恵, 1996 「金海地域의 古代 聚落과 城（金海地域の古代聚落と城)」『韓国古代史論叢』８, 駕落国史蹟開発研究院, ソウル, 180 頁。

198 金泰植･宋桂鉉, 2003『韓国의 騎馬民族論（韓国の騎馬民族論)』韓国馬事会・馬事博物館, 果川, 192 頁

199 金泰植, 1994「咸安 安羅国의 成長과 変遷（咸安安羅国の成長と変遷)」『韓国史研究』86, 韓国史研究会, 60 頁

200 安在晧・宋桂鉉, 1986「古式陶質土器에 관한 약간의 고찰 －義昌 大坪里出土品을 通하여－（古式陶質土器に関する若干の考察―義昌大坪里出土品を通じて）」『嶺南考古学』１, 嶺南考古学会, 大邱, 50～53 頁
趙栄済, 1986「西部慶南 爐形土器에 대한 一考察（西部慶南爐型土器に対する一考察)」『慶尚史学』2, 慶尚大学校, 晋州, 24 頁
朴升圭, 1993「慶南 西南部地域 陶質土器에 대한 研究（慶南西南部地域陶質土器に対する研究)」『慶尚史学』9, 慶尚大学校, 晋州, 4～5 頁
金泰植, 2002『미완의 문명 7 백년 가야사（未完の文明 700 年加耶史）』第２巻, 푸른역사（プルンヨクサ), ソウル, 134～137 頁

201『日本書紀』巻 10･欽明天皇 2年夏 4 月条。「聖明王曰、昔我先祖速古王貴首王之世、安羅加羅卓淳旱岐等、初遣使相通、厚結親好、以爲子弟、冀可恒隆」

百済の南方通交は369年から続く高句麗との戦いのためであった。

一方、さきに第Ⅱ章で論じたように、「神功紀」を通じて加耶と関連して４世紀後半の史実と認定することができるのは、昌原の弥烏邪馬国（＝卓淳国）を仲介地として百済と倭が連結したということのみである。加耶の仲介能力は富と技術と武力を全て備えたことから現れるものであり、単純に百済－倭間の交易のための地理的利便性だけによるものではなかった。

金海の加耶国の優越性は鉄生産と鉄器製作技術と武力の側面でも確認できるが、金海大成洞２号墳[202]から出土した大量の鉄鋌と縦長板釘結板甲などの遺物はこれを示してくれる。当時、金海・釜山などの加耶古墳から騎馬武装に関連した遺物が大量に現れることは注意を要する。一部の学者は、これを典型的な騎馬武装ではないと否認することもあるが、重装騎兵術が組織的で体系化されてはいなかったとはいえ、加耶に騎兵が存在して加耶の一部エリート層が重装騎馬戦術を受容したことは承認しなくてならない[203]。このような点は加耶が百済を通して旧帯方地域、すなわち黄海道方面と交易できるようになり、また続いてこの地域における高句麗－百済間の戦争の余波により発生した流移民を受容することで可能であったと想定することができる[204]。

結局、加耶連盟は４世紀後半に再び金海の加耶国を中心に一元的に統合され、百済・倭間の仲介地として安定的な交易体系を形成するようになった。すなわち広開土王陵碑文や『三国史記』強首伝にみえる「任那加羅（任那加良）」という名称は、金海の加耶国を中心とした前期加耶連盟の４世紀後半当時の名であり存在方式であって、この名称の起源は昌原の任那国と金海の加耶国の合称であった[205]。この時期に倭は古代国家の建設過程において加耶の鉄を必要とし、加耶は洛東江流域をめぐる新羅との抗争の過程で倭の人力、特に軍隊が必要だったので、両者の間にはしばらく緊密な相互交流が成り立ち得た。

６．倭国の情勢

４世紀の日本列島の情勢はどうであったのだろうか。日本列島は266年から413年まで中国史書に何の記録も現れないなかで、九州から瀬戸内海を経て畿内まで前方後円墳という墓制が出現した。さきに分析した「神功紀」をはじめとする『日本書紀』は史料として利用しがたく、文献史料として一級なのは広開土王陵碑文のみだが、それも時期が４世紀末に該当するだけで、４世紀の日本列島の形勢を直接的に述べるものではない。それゆえ日本列島の情勢を窺い知るには考古学資料を利用するほかない。

考古学的時代区分によれば、３世紀後半から７世紀末までを古墳時代とし、４世紀は大部分古墳時代前期に該当する。最近の整理された見解によれば、箸墓古墳は最初の前方後円墳であり、３世紀中葉、卑弥呼の死の直後に造られたものと推定され、その後日本列島各地の首長は、彼らが構成する政治連合の構成員が死んだとき、共通の葬送儀礼を行い、ともに墓を造ったとみている。初期の前方後円墳の存在様態をみると、このような政治連合は畿内の大和政権を中核として瀬戸内海沿岸各地と北部九州を含み、これらは鉄鋌に代表される韓半島の鉄資源と各種先進文物の交易路を確保するために結束したもの

---

202 慶星大学校博物館, 2000『金海大成洞古墳群Ⅰ』釜山, 100～112頁

203 李蘭暎・金斗喆, 1999『韓国의 馬具（韓国の馬具）』韓国馬事会・馬事博物館, 果川, 219～220頁

204 金泰植・宋桂鉉, 2003『韓国의 騎馬民族論（韓国の騎馬民族論）』韓国馬事会・馬事博物館, 果川, 193～196頁

205 金泰植, 1994「広開土王陵碑文의 任那加羅와‘安羅人戍兵’（広開土王陵碑文の任那加羅と‘安羅人戍兵’）」『韓国古代史論叢』6, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 86頁

という[206]。

前方後円墳が全国的に盛行した古墳時代の社会状態については、初期国家とみる見解と、首長連合または首長同盟とみる見解が代表的である。

初期国家論では似た類型の前方後円墳が４世紀以来日本列島全域に分布することについて、日本の古墳時代の性格を chiefdom と国家の間の過渡的な段階であり、初期国家であると論じ、その社会の属性は強制力をもつ中央政府の存在と共同体内外の貢納関係などと規定した[207]。そうでありながら、前方後円墳の被葬者別に体現される地域権力と畿内の政治センターが併存し、その身分制は出身と実力を基礎として相互承認する関係であったと見た[208]。あるいは４世紀後半の墳丘と埴輪から窺える墳墓祭祀と継承儀礼は、血縁関係を越えた世俗権力の出現と、地域を超越する国家の成立を示すものと解釈した[209]。

首長連合（同盟）論では５世紀の古墳の墓制と副葬品などにおいて、地域の大首長墳は大和の大王墳に似ているが、その他の小型方墳は在地的色彩ばかりなので、この時期の倭王権の地方支配は吉備、出雲、筑紫のような地域の最高首長を序列化するにとどまり、それぞれの下位首長は当該地域の大首長に支配されていたとみた[210]。すなわち古墳時代には国家のもっとも重要な属性といえる官僚機構が発達しておらず、中央集権的な政府を認定することができないので、国家段階とみられず、この時代の首長は多様な chiefdom 社会と部族社会の単純な集合体であり、各地域の首長は同盟関係を維持していたが、そこに参与した各社会は相当に自律的であったというのである[211]。

これらの見解を韓国史と比較すると、初期国家は小国規模の様々な単位の政治体が対外的な小国名を放棄して対外交渉の窓口を一元化し、対外的には中央集権的な存在を中心として一つの国家として機能しながら、対内的には地域別独立性が認定される連邦制組織（部体制）を整えている初期古代国家[212]とほぼ類似する。一方、首長連合は、個別の国名をもっている小国規模の様々な単位の政治体が勢力の大小によって序列化され、日常交易のような対外関係は単独の小国別に行い、特別な大規模交易や戦争のような規模の大きい行動が必要なときのみ、盟主国が各小国の諒解をうけて統率する小国連盟体[213]を意味する。ところで古墳時代が３～７世紀を貫く長い時間であると見る場合、これら全てをひとつの社会性格としては結論づけがたく、この間にも相当な社会性格の変化があったであろうと考えられる。

一方、文献史学の首長制社会論では、倭王武の上表文と刀剣銘を根拠として、５世紀後半の雄略期を古代国家成立の重要な指標と捉えた。すなわち稲荷山古墳出土鉄剣の金象嵌銘文と江田船山古墳出土鉄剣の銀象嵌銘文に現れる杖刀人と典曹人は、関東と九州北部の地域首長であり、倭の雄略は彼らの上番奉事をうける最高首長であり、雄略が地方勢力を制圧して畿内氏族連合政権から軍事専制王権に飛躍し

---

206 白石太一郎, 1999『古墳と大和政権』文春新書 36

207 都出比呂志, 1991「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343；1996「国家形勢の諸段階」『歴史評論』551

208 都出比呂志, 1991 前掲論文。

209 田中琢, 1991「倭人争乱」『日本の歴史』2, 集英社, 東京

210 和田晴吾, 1992「群集墳と終末期古墳」『新版日本の古代』5, 角川書店, 東京

211 佐々木憲一, 2000「日本考古学における古代国家論―理論研究の現状」『東亜細亜の国家形成』第 10 回百済研究国際学術会議発表要旨, 忠南大学校百済研究所, 儒城

212 盧泰敦, 2000「초기 고대국가의 국가구조와 정치운영（初期古代国家の国家構造と政治運営）」『韓国古代史研究』17, 韓国古代史研究会編, 書景文化社, ソウル, 25～26 頁。
金泰植, 2003「初期古代国家論」『강좌 한국고대사（講座韓国古代史）』第 2 巻, 駕洛国史蹟開発研究院, ソウル, 29 頁

213 金泰植, 上掲論文, 29 頁。

たと評価した[214]。あるいは倭王武が自称した開府儀同三司は軍事的な支配体制確立のための府官制の実施意志を示すものとし[215]、またこれに基づいて５～６世紀には統一首長国(Complex Chiefdom)が形成され、倭王権中心の序列社会が形成されたとした[216]。

上の埼玉県稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳から出土した鉄剣の銘文の存在と関係して、５世紀後半には畿内地域の勢力が九州地域でも承認されていたことが確認できるが、彼らはいまだ地方において代々権力を自らの子孫に世襲する独立した存在であった。さらに６世紀前半には九州地域で磐井の乱という大規模な反乱があり、中央政府において管理し中央に税を納付するミヤケ（屯倉）がその後になってようやく各地方に一つずつできはじめた。このことからみて、それより200年前の４世紀の時点で大和朝廷の存在はそれほど大きくなかったであろう。

このようにみると、日本の古墳時代を大きく分けて、その前期と中期前半に該当する３世紀後半から５世紀前半までは小国連盟体（首長連合)、その中期後半と後期に該当する５世紀後半から７世紀末までは初期古代国家（初期国家）と見るのが妥当である。すなわち４世紀の日本列島は小国連盟体の社会構造をなしていた。

ところで、この時期の連盟体は主導勢力が一つに固定されていたのではない。紀元前１世紀から３世紀までは主に北部九州勢力が鉄器製作に用いられる加耶の板状鉄斧を独占したが[217]、古墳時代前期がはじまる３世紀後半に畿内の邪馬台国が畿内各地と瀬戸内海沿岸各地の諸勢力を結集して韓半島南部と相互に作用しあう主体として台頭し[218]、４世紀後半には河内の古市・百舌鳥古墳群を築造した新興勢力が加耶の鉄の交易体系を掌握することに成功し、鉄製甲冑を供給する新たな威勢品体制を構築して政権を掌握した[219]。

それゆえ４世紀の日本列島は、韓半島の鉄資源交易路を確保するために畿内の大和政権を中心に全国的な組織を整えていたが､その時期の連盟体は必要物資を日本列島の外部に依存するほかなかったため、どの勢力がその交易路を維持するかが重要であり、韓半島情勢の変動、および必要物資を生産する勢力との友好関係如何によって、その内部の主体が変わった。これは畿内勢力の中央集権の程度が弱く、王室が不安定であり、内部的にも連合的性格をもっていたためである。

また墳丘の長さが360mになる５世紀前半の吉備造山古墳が、畿内の上石津ミサンザイ古墳とともに同時代最大の古墳であったということや[220]、５世紀後半ないし６世紀初の九州熊本県江田船山古墳の被葬者が畿内のみならず大加耶や百済とも緊密に交易していたこと、６世紀初の九州福岡県岩戸山古墳が畿内とは異なる独自的な設計を示していることなどからみて、吉備や九州はその時まで、大和王権に従

---

214 井上光貞, 1990「雄略期における王権と東アジア」『日本古代史講座』4, 学生社, 東京。

215 鈴木靖民, 1988「武（雄略）の王権と東アジア」『雄略天皇とその時代』吉川弘文館, 東京。

216 鈴木靖民, 1990「歴史学と民族学（文化人類学）－日本古代史における首長制社会論の試み」『日本民俗研究体系』10, 國學院大學, 東京

217 武末純一, 2002「日本の九州および近畿地域における韓国系遺物－土器・鉄器生産関係を中心に」『古代東亜細亜と三韓・三国の交渉』福泉博物館, 釜山, 88頁

218 白石太一郎, 2002「倭と加耶の交流の歴史的意義」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第５回国立歴史民俗博物館シンポジウム, 佐倉, 265～270頁

219 田中晋作, 1999「百舌鳥・古市古墳群の被葬者の性格について」『古代学研究』122, 古代学協会；2000「巴形銅器について」『古代学研究』154。

220 白石太一郎, 前掲書。

属的に連合した部のような性格というよりも、序列が相対的に下位にある同盟者関係にあったとみることが妥当である。

７．４世紀の韓日関係

このように見る時、４世紀の韓日関係は、鉄と先進文物の輸出を媒介にして、日本列島と伝統的に密接に交流していた金海の加耶国中心の前期加耶小国連盟体と、鉄を輸入するために韓半島南部の加耶と独占的な友好関係を望んでいた畿内の大和国中心の小国連盟体との交流関係が中心をなしていたと言えよう。しかし、鉄は加耶地域で生産されたといっても、相当数の先進文物は中国方面で生産されるものを加耶が帯方または百済を通じて仲介するものであるので、その交易関係は東アジア全般の形勢によって連動して動く側面が大きかった。

４世紀前半には中国西晋の混乱による東部都尉の没落、中国東北部および韓半島北部の高句麗の楽浪・帯方郡の併合、これによる加耶連盟の東西分裂などによって、一元的な文化の流れが続かなくなった。それゆえ、この時期には３世紀に成立した畿内大和中心の連盟体もそれほど大きな機能を発揮できず、各々が韓半島内部の諸勢力と個別的な交渉をおこなった。

鉄製板甲の分布から見て、４世紀前半の国際交易体系は高句麗－新羅－加耶（釜山・金海）－倭とつながるものだったとも言われ[221]、また、当時の咸安の安羅国様式の縄蓆文両耳附打捺壺の類例が対馬の朝日山古墳、島根県の上長浜貝塚、大阪府の四條遺蹟などから発見されたと言う[222]。これは東西に区分された前期加耶連盟が、それぞれ異なる経路から日本列島と交流した様相を示していると言えるが、その潮流は長くは続かなかった。

４世紀中葉に高句麗が前燕の攻撃で大打撃を受けて、停滞している間に、近肖古王代の百済が台頭し、一方では中国南朝の東晋との貿易路を開拓し、一方では加耶と連結するや、加耶連盟諸国は金海の加耶国を中心に再び統合し、倭との交易を主導した。これまでに発掘された４世紀後半の加耶地域の遺蹟・遺物のなかで、金海大成洞 13 号墳と２号墳のものは相対的にその規模と水準がもっとも優越なものであり、そこから出土した一部の倭系遺物は倭との交流を立証している[223]。

ここで注目される見解が、金海大成洞古墳群と日本の河内地方古墳群の外来遺物に関する新しい解釈である。巴形銅器が日本列島製であり新興勢力である河内勢力と加耶国中心勢力間の提携を表す遺物であり[224]、筒形銅器は加耶国の威勢品のひとつであり、加耶国と河内勢力の交渉関係を表す遺物であるというのである[225]。そして日本の新興勢力が４世紀後半に韓半島との交渉を積極的に展開した目的は、韓

---

221 李賢恵, 1988, 前掲論文, 175 頁

222 朴天秀, 2002「考古資料를 통해 본 古代 韓半島와 日本列島의 相互作用（考古資料を通してみた古代韓半島と日本列島の相互作用）」『韓国古代史研究』27, 韓国古代史研究会, 59 頁

223 金泰植, 2002, 前掲書 1巻, 137～144 頁

224 福永伸哉, 1998 「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格－４～５世紀における日韓交渉の考古学的再検討」『青丘学術論集』12, 韓国文化研究振興財団。
井上主税, 2003「김해 및 부산지역 古墳 출토 倭系遺物에 대하여（金海及び釜山地域古墳出土倭系遺物について）」『韓国考古学報』51, 韓国考古学会, 大邱, 128 頁

225 申敬澈, 1992「金官加耶의 成立과 対外関係（金官加耶の成立と対外関係）」『伽耶와 東아시아（伽耶と東アジア）』金海市加耶史国際学術会議発表要旨, 金海, 53 頁 ; 1993 「加耶成立前後の諸問題」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社, 東京, 144 頁 ; 2004「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退官記念』小田富士雄先生退職記念事業会, 福岡, 699～700 頁

半島の鉄素材を大量に入手する物量作戦によって、畿内の中央政権内の主導権を獲得するためであったという[226]。

すなわち、韓日両国において発見された巴形銅器と筒型銅器の分布状態からみて、日本で新たに登場した威勢品の供給体系は金海を中心にした加耶圏との間で結ばれたものであり、これを主導した倭の集団は奈良盆地東南部に基盤を置いた勢力ではなく、新たに台頭した河内勢力であった。当時、加耶は倭に物的資源である鉄鋌と先進文物を供給し、倭は加耶にその代価として人的資源である労働力[227]または軍事力[228]を供給した。このような相互交流を主導して、金海の加耶国と河内勢力はそれぞれ加耶連盟または日本西部連盟の盟主国としての位置を固めていった。

このように加耶と倭の間の緊密な友好関係に基礎を置いた文化交流は、４世紀末にいっそう強化される。これは新羅を牽制するために加耶を支援し、交流していた百済が、４世紀末に旧帯方地域をめぐる高句麗との 30 年戦争に決定的に敗れるようになるや、加耶と倭の間の交易形態に注目して、倭兵を大挙動員したことにはじまる。加耶は百済から先進文物の提供をうける立場であって、交易を重視する加耶連盟の政治的統合はそれに依存するところが大きかったので、これを持続的に延長するために加耶は百済の要求を受け入れるほかなかった。

ただ、前述したように、当時、倭軍の武装体系は重装騎兵を主とする高句麗軍[229]はもちろん、断面稜形鉄鉾と縦長板釘結板甲を主とするの加耶軍の武装体系[230]にも到底及ばぬ、短剣と薄い鉄鏃を主としたものであった[231]。その結果、加耶を媒介として動員された倭軍は武装水準の差のために、韓半島内で独自の行為をするというよりも､加耶または百済の軍隊の下級単位として編制され､活用されたのだろう。

こうして加耶は倭軍が有効な機能を発揮できるように、つまり自分たちを助ける倭軍の武力強化のために、時には加耶の陶質土器と鉄器および甲冑に関連するの工人を倭国に援助する必要があったと考えられる。すでに４世紀後半に重装騎馬戦術まで駆使できた加耶の軍事装備の製造基盤は、倭国に対して相対的優位にあった。これを土台として、加耶は倭の軍事力を容易に利用しようという目的のもとで倭国に工人を派遣して、そこを加耶の戦争の後背基地として開発したのであり、日本の河内地域の新興勢力は加耶の経済的、技術的支援を恰好のきっかけと捉え、軍事力量の強化、および軍隊派遣に力を注い

田中晋作, 1998「筒形銅器について」『古代学研究』151

鄭澄元・洪潽植, 2000「筒形銅器研究」『福岡大学総合研究所報』240, 総合科学編 3, 福岡

井上主税, 前掲論文, 121～122 頁

ただし下記の論文のように筒形銅器の製作地を日本列島とみる見解もある。

福永伸哉, 前掲論文

山田良三, 2000「筒形銅器の再考察」『橿原考古学研究所紀要 考古学論集』23, 奈良

柳本照男, 2001「金海大成洞古墳群出土の倭系遺物について」『久保和士君追悼考古論集』

226 福永伸哉, 前掲論文

227 申敬澈, 2000「금관가야의 성립과 연맹의 형성（金官加耶の成立と連盟の形成）」『가야 각국사의 재구성（加耶各国史の再構成）』釜山大学校民族文化研究所編, 慧眼, ソウル, 73～77 頁

228 鈴木靖民, 2002「倭国と東アジア」『倭国と東アジア』鈴木靖民編, 吉川弘文館, 東京, 15 頁

229 余昊奎, 1999「高句麗 中期의 武器体系와 兵種構成（高句麗中期の武器体系と兵種構成）」『韓国軍事史研究』2, 国防軍史研究所, ソウル, 71～73頁

230 金斗喆, 2003「무기･무구 및 마구를 통해 본 가야의 전쟁（武器･武具及び馬具を通してみた加耶の戦争）」『가야고고학의 새로운 조명（加耶考古学の新照明）』韓国民族文化研究所編, 慧眼, ソウル, 145 頁

231 松木武彦, 1999「古墳時代の武装と戦闘」『戦いのシステムと対外戦略』東洋書林, 東京

だ。

このように広開土王陵碑に現れる倭軍は、高句麗と百済の覇権争奪戦のなかで百済が致命的な守勢に追い込まれ、それにともない各々の同盟勢力である新羅と加耶の間の対立も激化して、韓半島全体が戦争に覆われた４世紀末・５世紀初に、百済と加耶によって、百済と加耶を助けるために動員された援軍であった。すなわち高句麗－百済間の戦争が深化するなかで、高句麗と新羅、百済と加耶が同盟関係を結び、倭軍は加耶との同盟関係を維持するために加耶と百済を支援するようになったのである。さらに高句麗に大敗した百済が太子腆支を日本列島に派遣して倭国とのより緊密な同盟関係を求めた397年以後、百済－加耶－倭の軍事的協力がいっそう強化された。

当時百済が加耶や倭を支援した証拠となる遺物ははっきりと出てきていない。これは百済と加耶・倭の関係が伝統的で長期間にわたって持続したものではなく、政治的に短期間のうちに成立したためではないかと思う。一方、百済の同盟勢力である加耶はその代価として倭国の河内政権を支援して、そのような痕跡は遺物にもある程度は反映されて現れているが、加耶の支援は核心的な技術を除いた部分的なものであった[232]。倭国は鉄素材を外部に依存しなくてはならないという根本的な限界性を有しており、大軍を一度に動員するだけの政治体制も備えていなかったため、加耶と倭の協力が短期間のうちに大きな効果をあげることはできなかった。のみならず、加耶自体の全般的な軍備や文化能力は新羅に比べて大して遜色なかったものの、それを救援するという名目で南下してきた高句麗の大軍に比べれば、やはり劣勢だったのである。

広開土王陵碑文の永楽10 年(400)条に出てくる高句麗による倭賊および任那加羅の征伐、永楽14 年(404)条に出てくる帯方界の倭寇の討伐は、そのような関係に基づいて現れた事件である。ここで勝利した高句麗は未知の世界から来た倭軍の討伐について、誇張して記録した。しかしその結果は倭より加耶にとって致命的なものだった。

こうして金海の加耶国を中心とする前期加耶連盟は大打撃をうけて解体したが[233]、むしろその周辺一帯と日本列島には肯定的な波及効果を及ぼした。すなわち洛東江下流域の金海の加耶国が没落するや、加耶の伝統的な物資交易路をたどって、洛東江上流の嶺南内陸地方と対馬島を経由する日本列島などに数多くの技術者の移民が続いた。特にこれは須恵器、鉄製甲冑、馬具製作をはじめとする日本列島の文化発展に一大契機をなした[234]。５世紀後半の高霊を中心とした後期加耶連盟の台頭と、雄略期に代表される日本の連邦制的な古代国家体制の成立は、これに力を得たところが大きい。

Ⅵ. おわりに

４世紀の韓日関係史をどのようにみるべきか。これを知るためには４世紀東アジアの全般的情勢に対

---

232 松木武彦の研究によれば、日本古墳時代の武装のⅢ期（４世紀末～５世紀前半）には、攻撃具は長刀や長剣が増加して短剣・短刀や鉾［鈹］を凌駕し、韓半島系の有頸鉄鏃が一気に普及し、逆刺を造る技法も駆使され、鉄製甲冑の形式が一新されて革綴の帯金式甲冑が登場し、刀剣・鏃・甲冑という攻撃具・防御具の全般にわたって実用武装が革新される。しかし攻撃力が高い長頸式鉄鏃の急速な普及、甲冑製作の釘結技法、馬具などは、５世紀後半になって現れ、断面稜形鉄鉾はついに普及しなかった。松木武彦, 1999 「古墳時代の武装と戦闘」『戦いのシステムと対外戦略』東洋書林, 東京

233 金泰植, 2002『미완의 문명 7 백년 가야사（未完の文明 700 年加耶史）』1 巻, 푸른역사（プルンヨクサ), ソウル, 151～152 頁

234 申敬澈, 2000 前掲論文, 78 頁

する理解が必要であり、その理解は様々な文献史料に対する実証的理解と考古学的遺物資料に対する総合的分析のうえに成り立たなくてはならないであろう。

かつてこの問題については、任那日本府説に立脚して、４世紀から韓半島南部は日本列島の倭国から直接または間接支配されていたという仮説があり、これは『日本書紀』神功皇后関連記事と広開土王陵碑文の倭軍関連記事に対する表面的な理解からはじまった。最近では文献および遺物に対する理解の深化のおかげで、そのような極端な議論は殆ど成り立たなくなっている。

しかし、いまだに加耶地域についてだけは、倭国の強力な影響力下にあったという程度の認識が続いている。これは加耶史および加耶文化に関する理解が不足していることに起因することだといえよう。そこでこの論文では韓国と日本でなされた最近の研究動向を総合して、間違った先入観を取り除き、より合理的に4 世紀の韓日関係を説明しようとした。

倭の任那征伐を記録している『日本書紀』神功皇后関連記事について、最近の研究者はその記事および史実をすべて否定したり、あるいはその主語を百済に替えて理解したりする姿勢を見せている。神功紀 49 年条の記事には韓半島南部の状況を理解できる諸史実が言及されているが、この史料の信憑性が根本的に疑われているにもかかわらず、これを迂闊に肯定したり、主語を変えて便宜的に利用したりするのは危険である。それゆえ、この史料を利用して 369 年に倭または百済が軍事征服を断行して加耶地域を征服したと見ることはできない。

広開土王陵碑文には韓半島南部および中部地方において倭軍が活動した痕跡が記録されているが、その性格が何であるかについて言及されていない。辛卯年記事のように乱れた文字を含みいまだに実証問題が残る条項もあるが、それを除外しても広開土王陵碑文には高句麗に隣接する他の国に比べ、遠く離れたところからやってきた倭軍の活動が多く現れ、あるいは誇張されている。そうだとすれば、彼らはいかなる関係によって現れた、どのような性格の存在だったのだろうか。

４世紀後半の東アジア情勢においては東晋と前秦の葛藤もあったが､韓半島関連の国際情勢の基本は、高句麗と百済の二大強国の対決構図であった。それらは4 世紀後半に帯方故地を間に置いて 30 余年間にわたり激しい戦争を繰り広げた。これに比べ、韓半島南部の新羅や加耶はこれに付随的に連動して動く側面が強かった。

一方、加耶と倭は２～３世紀以来4 世紀まで、伝統的に加耶の物的資源と倭の人的資源を交換する緊密な交易関係を有していた。その関係は4 世紀後半に両地域の情勢変動、すなわち金海の加耶国を中心とする加耶連盟の再統合と、日本列島畿内の河内地域を中心とする新興勢力の出現によっていっそう強化された。両者の交流関係においては、伝統的な鉄素材と威勢品交易に加えて、加耶の軍需物資輸出、および倭の軍事力動員問題が重要視された。

４世紀後半に百済は高句麗との対決を経る過程で、新羅を牽制するために加耶を支援して、加耶を媒介に倭と連結した。そのなかで百済が高句麗との戦争で劣勢に回るや、百済は加耶－倭間の伝統的な人的・物的資源交易の慣行を利用して倭軍を引き入れた。その結果、倭は両者間の必要によって同盟を結んでいた加耶のため、高句麗－百済間の戦争に動員され、人命の損失という大きな対価を支払って文化的利得を得たのである。

この時期を前後して日本列島では急激な変化が起こるようになる。413 年に倭王が東晋に使臣を送っ

たこと[235]を契機に、中国史書に日本関連の記録が現れはじめ、その後５世紀後半まで倭の五王が南朝との朝貢関係を維持した。５世紀に入り日本の河内地域に巨大政権が台頭したことは、韓半島から流入した集団が統合されたことと関連するが、その統合の契機や過程は明らかでない。

ところで､多くの研究者は４世紀末･５世紀初に加耶地域から日本列島に多くの人口が流入したことを述べている[236]。彼らはみな同じように、４世紀末または５世紀初に金海など洛東江下流域、すなわち金官加耶から日本列島各地に馬具類と金属加工術、陶質土器などが移民とともに伝えられたが、金属加工術と陶質土器の場合、その当時に工人や製作技法まで伝えられたとしている。

金海および釜山などのように洛東江下流域は前期加耶連盟の中心地域であり、百済および倭と結んで国際関係に巻き込まれながら積極的に高句麗および新羅と対立していたため、その敗北直後である５世紀初には流移民も多く発生したであろう。この時期は金海中心の前期加耶と高霊中心の後期加耶の間の転換期に該当する。加耶の流亡民は慶尚南北道の内陸山間地域に逃がれもしたが、身近に交流していた日本列島にも相当数が逃れたのである。

これを韓日間の単純な交易、または日本における主体的な文物受容、甚だしくは任那経営の結果による韓国・中国系住民（渡来人・帰化人）の移動とみる見解もあるが、万一そうだとすれば、騎馬民族の征服とまで呼ばれるほどの、４～５世紀の日本列島内における急激な遺物相の変化を合理的に説明することができない。ゆえに、５世紀以後、日本古代文化の爆発的な発展は、日本列島住民の努力、およびその文化の内的成長によるものだといっても、これを触発したものは、本質的に高句麗対百済の対決という韓半島情勢に連動して成立した加耶の支援と、加耶地域の状況変動にしたがって生じたと見なくてはならない。

235『晋書』巻 10・帝紀 10・安帝義熙 9(413)年是歳条

236 江上波夫, 1984「日本における国家の形成－倭人の国から大和朝廷へ」『東洋研究』72；1992『江上波夫の日本古代史－騎馬民族説四十五年』大巧社, 東京, 256～257 頁

崔秉鉉, 1992「考古学的으로 본 加耶와 日本의 관계（考古学的にみた加耶と日本の関係）」『韓国史市民講座』11, 一潮閣, ソウル, 111～117 頁

中村潤子, 1991「騎馬民族説の考古学」『考古学 その見方と解釈』筑摩書房；森浩一編, 1993『馬の文化叢書第１巻 古代―埋もれた馬文化』馬事文化財団, 横浜, 483 頁

崔鍾圭, 1990「美術上으로 본 韓日関係 －陶質土器와 須恵器－（美術上からみた韓日関係－陶質土器と須恵器）」『古代韓日文化交流研究』韓国精神文化研究院, 城南, 164～171 頁

酒井清治, 2001「倭における初期須恵器の系譜と渡来人」『4～5世紀 東亜細亜 社会와 加耶（４～５世紀東亜細亜社会と加耶）』第７回加耶史国際学術会議発表要旨, 金海, 99～101 頁

申敬澈, 2000 前掲論文, 78頁

【文献目録】

4 世紀 韓日関係史 関連文献目録

金 泰 植

史料

『広開土王陵碑文』
『三国史記』
『三国志』
『日本書紀』
『資治通鑑』
『晉書』
『後漢書』

単行本（韓国語）

慶星大学校博物館, 2000『金海大成洞古墳群Ⅰ』(釜山)
孔錫亀, 1988　『高句麗 領域拡張史 研究』(書景文化社, ソウル)
国史編纂委員会･国定図書編纂委員会, 2003『고등학교 국사』(教育人的資源部, ソウル)
権五栄, 1999　『복암리고분군』(全南大博物館, 光州)
金錫亨, 1966　『초기조일관계연구』(平壌)
金錫亨, 1988　『고대한일관계사』(한마당, ソウル)
金世基, 2003　『고분 자료로 본 대가야 연구』(学研文化社, ソウル)
金廷鶴, 1990　『韓国上古史研究』(凡友社, ソウル)
金哲埈･崔柄憲 編, 1986『史料로 본 韓国文化史 古代篇』(一志社, ソウル)
金泰植, 1993　『加耶聯盟史』(一潮閣, ソウル)
金泰植, 2002　『미완의 문명 7백년 가야사』(푸른역사, ソウル)
金泰植, 2004　『CD-ROM 가야사』(미디어채널, ソウル)
金泰植･宋桂鉉, 2003『韓国의 騎馬民族論』(韓国馬事会馬事博物館, 果川)
金鉉球, 1993　『任那日本府研究－韓半島南部経営論批判－』(一潮閣, ソウル)
盧重国ほか5名, 1998『가야문화도록』(慶尚北道, 大邱)
盧重国, 1988　『百済政治史研究』(一潮閣, ソウル)
盧泰敦, 1999　『고구려사 연구』(사계절, ソウル)
李丙燾, 1959　『韓国史・古代篇』(震檀学会)
文安植･이대석, 2004『한국고대의 지방사회 －영산강유역의 역사와 문화를 중심으로－』(혜안, ソウル)
文化財管理局, 1973『武寧王陵発掘調査報告書』
朴淳発, 2001　『漢城百済의 誕生』(서경문화사, ソウル)
朴時亨, 1966　『広開土王陵碑』(社会科学院出版社, 平壌)

朴真奭, 1993　『호태왕비와 고대조일관계연구』(延辺大出版社)
朴天秀ほか3名, 2003『加耶의 遺蹟과 遺物』(학연문화사, ソウル)
白承玉, 2003　『가야 각국사 연구』(혜안, ソウル)
白承忠, 1995　『加耶의 地域聯盟史 研究』(釜山大学校大学院史学科文学博士学位論文)
邊太燮, 2002　『韓国史通論: 四訂版』(三英社, ソウル)
釜山大学校民族文化研究所編, 2001『한국 고대사 속의 가야』(혜안, ソウル)
釜山大学校民族文化研究所編, 2003『가야 고고학의 새로운 조명』(혜안, ソウル)
延敏洙, 1998　『고대한일관계사』(혜안, ソウル)
王健群 著, 林東錫 訳, 1985『広開土王碑研究』(역민사, ソウル)
李根雨, 1994　『日本書紀에 引用된 百済三書에 관한 研究』(韓国精神文化研究院 韓国学大学院博士学位論文, 城南)
李蘭暎・金斗哲, 1999『韓国의 馬具』(韓国馬事会馬事博物館, 果川)
李丙燾, 1959　『韓国史 古代篇』(震檀学会, ソウル)
李丙燾, 1976　『韓国古代史研究』(博英社, ソウル)
李成市 著, 朴慶嬉 訳, 2001『만들어진 고대 ―근대 국민국가의 동아시아 이야기―』(도서출판 삼인, ソウル)
李仁哲, 2000　『고구려의 대외정복 연구』(白山資料院, ソウル)
李亨求・朴魯姫, 1986『広開土大王陵碑新研究』(同和出版公社, ソウル)
林基中, 1995　『広開土王碑原石初期拓本集成』(東国大学校出版部, ソウル)
林起煥, 2004　『고구려 정치사 연구』(한나래, ソウル)
任世権・李宇泰, 2002『韓国金石文集成(1)』(韓国国学振興院, 安東)
林永珍, 1995　『百済漢城時代古墳研究』(ソウル大学校大学院博士学位論文)
丁仲煥, 1962　『加羅史草』
千寛宇, 1991　『加耶史研究』(一潮閣, ソウル)
崔秉鉉, 1992　『新羅古墳研究』(一志社, ソウル)
韓国考古学会編, 2000『考古学을 통해 본 加耶』(韓国考古学会, 釜山)

単行本（日本語）

江上波夫, 1992　『江上波夫の日本古代史―騎馬民族説四十五年―』(大巧社, 東京)
綱野善彦著, 李根雨訳, 1999『日本社会의 歴史(上)』(한림신서 일본학총서 42, 도서출판 소화)
宮崎市定, 1992　『謎の七支刀―五世紀の東アジアと日本―』(中央公論社)
金廷鶴, 1977　『任那と日本』(小学館)
今西竜, 1970　『朝鮮古史の研究』(国書刊行会)
金鉉球, 1985　『大和政権の対外関係研究』(吉川弘文館, 東京)
埼玉県教育委員会, 1980『埼玉稲荷山古墳』
吉田孝, 1997　『日本の誕生』(岩波新書, 東京)
那珂通世, 1958　『外交繹史』第1巻 (那珂通世遺書, 岩波書店, 東京)
大浜徹也ほか11名, 2001『中学生の社会科 歴史－日本の歩みと世界』(日本文教出版, 大阪)

大山誠一, 1999 『日本古代の外交と地方行政』(吉川弘文館, 東京)
東京国立博物館編, 1993『江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌銘大刀』(吉川弘文館, 東京)
鈴木英夫, 1996 『古代倭国と朝鮮諸国』(青木書店, 東京)
末松保和, 1949 『任那興亡史』(大八洲出版); 1956, 再版 (吉川弘文館, 東京)
武田幸男, 1988 『広開土王碑原石拓本集成』(東京大学出版会, 東京)
武田幸男, 1989 『高句麗史と東アジアー‘広開土王碑’研究序説ー』(岩波書店, 東京)
白崎昭一郎, 1993『広開土王碑文の研究』(吉川弘文館, 東京)
白石太一郎, 1999『古墳とヤマト政権』(文春新書 036)
白石太一郎・上野祥史 編, 2004『国立歴史民俗博物館研究報告』110 (第 5 回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流, 国立歴史民俗博物館, 佐倉)
福山敏男, 1969 『日本建築史研究』
福山敏男, 1971 『論集日本文化の起源』第二巻 (平凡社, 東京)
山尾幸久, 1983 『日本古代王権形成史論』(岩波書店, 東京)
山尾幸久, 1989 『古代の日朝関係』(塙書房, 東京)
山川出版社 編, 2002『高校 要説世界史 A 改訂版』(東京)
三品彰英, 1962 『日本書紀朝鮮関係記事考証』上巻 (東京)
森浩一 編, 1993『馬の文化叢書 第一巻 古代ー埋もれた馬文化』(馬事文化財団, 横浜)
西尾幹二ほか13名, 2001『中学社会 新しい歴史教科書』(扶桑社, 東京)
水谷悌二郎, 1977『好太王碑考』(開明書院, 東京)
鈴木英夫, 1996 『古代の倭国と朝鮮諸国』(青木書店, 東京)
鈴木靖民 編, 2002『倭国と東アジア』(日本の時代史 2, 吉川弘文館)
王健群, 1984 『好太王碑の研究』(雄渾社, 東京)
李永植, 1993 『加耶諸国と任那日本府』(吉川弘文館, 東京)
李進熙, 1972 『広開土王碑の研究』(吉川弘文館, 東京)
田中俊明, 1992 『大加耶連盟の興亡と‘任那’ー加耶琴だけが残ったー』(吉川弘文館, 東京)
井上秀雄, 1973 『任那日本府と倭』(東出版, 東京)
佐伯有清, 1974 『研究史 広開土王碑』(吉川弘文館, 東京)
佐伯有清, 1976 『広開土王碑と参謀本部』(吉川弘文館, 東京)
佐伯有清, 1977 『七支刀と広開土王碑』(吉川弘文館, 東京)
増田精一, 2001 『日本国の成立』(学生社, 東京)
池内宏, 1947 『日本上代史の一研究』(近藤書店); 1970, 再版 (中央公論美術出版)
津田左右吉, 1924『古事記及日本書紀の研究』(岩波書店, 東京)
村尾次郎ほか25名, 2002『高校 最新日本史』(明成社, 東京)
坂本太郎, 1964 『日本古代史の基礎的研究 上』(東京大学出版会)

単行本（中国語）

耿鉄華, 1994 『好太王碑新考』(吉林人民出版社, 吉林)
楊守敬, 1909 『高麗好大王碑』

王健群, 1984　『好太王碑研究』(吉林出版社, 吉林)
魏存成, 1994　『高句麗考古』(吉林大学, 吉林)

論文（韓国語）

権五栄, 1988　「4 세기 百済의 地方支配方式 一例」『韓国史論』18 (ソウル大学校国史学科, ソウル)
金大煥, 2001　「嶺南地方 積石木槨墓의 時空的 変遷」『嶺南考古学』29 (嶺南考古学会, 大邱)
金斗哲, 2002　「馬具와 地域間交流」『第 5 回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』(日本国立歴史民俗博物館, 佐倉)
金斗哲, 2003　「무기・무구 및 마구를 통해 본 가야의 전쟁」『가야고고학의 새로운 조명』(韓国民族文化研究所編, 혜안, ソウル)
金錫亨, 1963　「삼한 삼국의 일본열도 내 분국에 대하여」『력사과학』1963-1
金泰植, 1994　「広開土王陵碑文의 任那加羅와 '安羅人戍兵'」『韓国古代史論叢』6 (駕洛国史蹟開発研究院, ソウル)
金泰植, 1994　「咸安 安羅国의 成長과 変遷」『韓国史研究』86 (韓国史研究会)
金泰植, 1997　「百済의 加耶地域 関係史 : 交渉과 征服」『百済의 中央과 地方』(百済研究論叢第 5 輯, 忠南大学校 百済研究所, 儒城)
金泰植, 2003　「初期 古代国家論」『강좌 한국고대사』제 2 권 (駕洛国史蹟開発研究院, ソウル)
金鉉球, 1991　「神功紀 加羅七国 平定記事에 관한 一考察」『史叢』39
김석형, 1988　「삼국사기를 통하여 본 4 세기 말 5 세기 초의 조일관계에 대하여」『력사과학』88-2 (平壌)
盧重国, 1995　「大加耶의 政治 ・ 社会構造」『加耶史研究－대가야의 政治와 文化－』(慶尚北道, 大邱)
盧泰敦, 1975　「三国時代의「部」에 関한 研究－成立과 構造를 中心으로－」『韓国史論』2 (ソウル大学校国史学科, ソウル)
盧泰敦, 1992　「広開土王陵碑」『訳註韓国古代金石文』1 (駕洛国史蹟開発研究院, ソウル)
盧泰敦, 2000　「초기 고대국가의 국가구조와 정치운영」『韓国古代史研究』17 (韓国古代史学会編, 書景文化社, ソウル)
朴淳発, 1997　「漢城百済의 中央과 地方」『백제의 중앙과 지방』(忠南大学校 百済研究所, 儒城)
朴升圭, 1993　「慶南 西南部地域 陶質土器에 대한 研究」『慶尚史学』9 (慶尚大学校, 晋州)
朴天秀, 2002　「考古資料를 통해 본 古代 韓半島와 日本列島의 相互作用」『韓国古代史研究』27 (韓国古代史学会)
徐栄洙, 1996　「'辛卯年記事' 의 변상과 원상」『広開土好太王碑 研究 100 年』(高句麗研究会 編, 学研文化社, ソウル)
成洛俊, 1983　「영산강유역의 옹관묘 연구」『百済文化』15 (公州師大 百済文化研究所, 公州)
成正鏞, 2000　「中西部地域 3～5 世紀 鉄製武器의 変遷」『韓国考古学報』42 (韓国考古学会)
손영종, 2001　「비문의 해석」『광개토왕릉비문 연구』(社会科学院編, 도서출판 중심, ソウル)
宋桂鉉, 2000　「토론 요지: 금관가야의 성립과 연맹의 형성」『가야 각국사의 재구성』(釜山大学校民族文化研究所編, 혜안, ソウル)

宋桂鉉, 2001　「4～5 세기 동아시아의 갑주」『4～5 世紀 東亜細亜 社会와 加耶』(金海市発表要旨)
宋桂鉉, 2001　「전쟁의 양상과 사회의 변화」『고대의 전쟁과 무기』(第 5 回釜山福泉博物館学術発表大会, 釜山)
申敬澈, 1992　「金官加耶의 成立과 対外関係」『伽耶와 東아시아』(金海市 加耶史国際学術会議発表要旨, 金海)
申敬澈, 1993　「加耶成立前後の諸問題」『伽耶と古代東アジア』(新人物往来社, 東京)
申敬澈, 1994　「加耶 初期馬具에 대하여」『釜大史学』18 (釜山大学校, 釜山)
申敬澈, 1995　「金海大成洞・東莱福泉洞古墳群 点描」『釜大史学』19 (釜山大学校, 釜山)
申敬澈, 2000　「금관가야의 성립과 연맹의 형성」『가야 각국사의 재구성』(釜山大学校民族文化研究所編, 혜안, ソウル)
申敬澈, 2004　「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退官記念－』(小田富士雄先生退職記念事業会. 福岡)
安在晧･宋桂鉉, 1986「古式陶質土器에 관한 약간의 고찰 －義昌 大坪里出土品을 通하여－」『嶺南考古学』1 (嶺南考古学会, 大邱)
安春培, 1992　「広開土大王陵碑文 研究(I) －碑文의 文段과 解釈을 中心으로－」『考古歴史学誌』8 (東亜大学校博物館, 釜山)
余昊奎, 1999　「高句麗 中期의 武器体系와 兵種構成」『韓国軍事史研究』2 호 (国防軍史研究所, ソウル)
余昊奎, 2000　「4 세기 동아시아 국제질서와 고구려 대외정책의 변화 －対前燕関係를 중심으로－」『역사와 현실』36 (歴史批評社, ソウル)
余昊奎, 2000　「고구려 초기 정치체제의 성격과 성립기반」『韓国古代史研究』17 (韓国古代史学会)
延敏洙, 1987　「広開土王碑文에 보이는 倭関係 記事의 検討」『東国史学』21 (東国大学校, ソウル)
尹龍九, 1989　「樂浪前期 郡県支配勢力의 種族系統과 性格」『歴史学報』126 (歴史学会, ソウル)
李道学, 1990　「百済 七支刀 銘文의 再解釈」『韓国学報』60 (ソウル)
李丙燾, 1970　「近肖古王拓境考」『百済研究』1 (忠南大学校 百済研究所)
李丙燾, 1974　「百済七支刀考」『震檀学報』38 (震檀学会, ソウル)
李成市, 1994　「表象としての広開土王碑文」『思想』842
李永植, 1985　「加耶諸国의 国家形成問題」『白山学報』32
李永植, 1995　「百済의 加耶進出過程」『韓国古代史論叢』7 (駕洛国史蹟開発研究院, ソウル)
이정호, 1999　「영산강유역의 고분 변천과정과 그 배경」『栄山江流域의 古代社会』(崔盛洛 編著, 学研文化社, ソウル)
李鍾旭, 1992　「広開土王陵碑 및 “三国史記”에 보이는 ‘倭兵’의 正体」『韓国史市民講座』11 (一潮閣, ソウル)
李賢珠, 2002　「福泉洞古墳群의 武器副葬様相을 통해 본 軍事組織의 形態」『博物館研究論集』9 (부산박물관, 부산)

李賢恵, 1988　「4 세기 加耶社会의 交易体系의 変遷」『韓国古代史研究』1 (韓国古代史研究会)
李賢恵, 1996　「金海地域의 古代 聚落과 城」,『韓国古代史論叢』8 (駕洛国史蹟開発研究院, ソウル)
李賢恵, 2000　「4～5 세기 영산강 유역 토착세력의 성격」『歴史学報』166 (歴史学会, ソウル)
林起煥, 1995　「4 세기 고구려의 樂浪・帯方地域 경영」『歴史学報』147 (歴史学会, ソウル)
井上主税, 2003　「김해 및 부산지역 古墳 출토 倭系遺物에 대하여」『韓国考古学報』51(韓国考古学会, 大邱)
鄭寅普, 1955　「広開土境平安好太王陵碑文釈略」『庸斎白樂濬博士還甲紀念国学論叢』(思想界社)
丁仲煥, 1972　「日本書紀에 인용된 百済三書에 대하여」『亜細亜学報』10 (ソウル)
鄭澄元・洪潽植, 2000「筒形銅器研究」『福岡大学綜合研究所報』第 240 号 (綜合科学編 第3 号, 福岡)
趙栄済, 1986　「西部慶南 爐形土器에 대한 一考察」『慶尚史学』2 (慶尚大学校, 晋州)
佐々木憲一,2000「日本考古学에 있어서 古代国家論－理論研究의 現状－」『東亜細亜의 国家形成』제10 회 百済研究国際学術会議 발표요지 (忠南大学校 百済研究所, 儒城)
朱甫暾, 1995　「序説－加耶史의 새로운 定立을 위하여－」『加耶史研究 －대가야의 政治와 文化－』(慶尚北道, 大邱)
千寛宇, 1977・1978「復元加耶史」 上・中・下『文学과 知性』28・29・31 (문학과 지성사, ソウル)
千寛宇, 1979　「広開土王陵碑文 再論」『全海宗博士華甲紀念史学論叢』
崔秉鉉, 1992　「考古学的으로 본 加耶와 日本의 관계」『韓国史市民講座』11 (一潮閣, ソウル)
崔鍾圭, 1990　「美術上으로 본 韓日関係 －陶質土器와 須恵器－」『古代韓日文化交流研究』(韓国精神文化研究院, 城南)
韓永熙・李相洙, 1990「昌寧 校洞 11 号墳 出土 有銘圓頭大刀」『考古学誌』2 (韓国考古美術研究所, ソウル)

論文（日本語）

江上波夫, 1984　「日本における国家の形成－倭人の国から大和朝廷へ－」『東洋研究』72
高寛敏, 1990　「永樂十年 高句麗広開土王の新羅救援戦について」『朝鮮史研究会論文集』27
高寛敏, 1993　「『日本書紀』所引「百済本記」に関する研究」『高句麗・渤海と古代日本』(雄山閣, 東京)
高寛敏, 1994　「『日本書紀』所引「百済記」と「百済新撰」に関する研究」『朝大学報』1
菅政友, 1891　「高麗好太王碑銘考」『史学雑誌』24(2-11)
菅政友, 1893　「任那考」; 1907『菅政友全集』
橋本達也, 2002　「古墳時代甲冑の系譜－朝鮮半島との関係－」『第 5 回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』(国立歴史民俗博物館発表要旨, 佐倉)
今西龍, 1915　「広開土境好太王陵碑に就て」『訂正増補 大日本時代史』古代下巻 附録
旗田巍, 1975　「三国史記新羅本紀にあらわれた倭」『日本文化と朝鮮』2
那珂通世, 1888　「日本上古代考」『文』1-8・9
那珂通世, 1893　「高麗古碑考」『史学雑誌』49(4-12)
那珂通世, 1896　「朝鮮古史考(加羅考)」『史学雑誌』7-3
大山誠一, 1980　「所謂‘任那日本府’の成立について」 上・中・下『古代文化』32-9・11・12 (古代

学協会, 京都)
大原利武, 1934 「任那加耶考」『小田先生頌寿記念朝鮮論集』
大沢正己, 2002 「金属学的分析からみた倭と加耶の鉄－日韓の製鉄 鍛冶技術－」『第 5 回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』(国立歴史民俗博物館, 佐倉)
都出比呂志, 1991「日本古代の国家形成論序説－前方後圓墳体制の提唱－」『日本史研究』343
都出比呂志, 1996「国家形成の諸段階」『歴史評論』551
都出比呂志, 1998「総論－弥生から古墳へ」『古代国家はこうして生まれた』(角川書店, 東京)
東潮, 2002 「弁辰と加耶の鉄」『第 5 回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』(国立歴史民俗博物館, 佐倉)
藤間生大, 1968 「七支刀」『倭の五王』(岩波新書, 東京)
藤尾慎一郎, 2002「弥生時代の鉄」『第 5 回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』(国立歴史民俗博物館, 佐倉)
柳本照男, 2001 「金海大成洞古墳群出土の倭系遺物について」『久保和士君追悼考古論集』
末松保和, 1959 「高句麗好太王碑文」『歴史教育』74
木村誠, 2000 「百済史料としての七支刀銘文」『人文学報』第306 号 (東京都立大学 人文学部)
木下礼仁, 1961 「“日本書紀”にみえる‘百済史料’の史料的価値について」『朝鮮学報』21・22 合 (天理)
武末純一, 2002 「日本の九州および近畿地域における韓国系遺物－土器･鉄器生産関係を中心に－」『古代 東亜細亜와 三韓・三国의 交渉』(복천박물관, 부산)
武田幸男, 1978 「高句麗好太王碑文にみる帰王について」『古代東アジア史論集』上巻 (吉川弘文館)
武田幸男, 1978 「広開土王碑辛卯年条の再吟味」『古代史論叢』(井上光貞博士還暦記念会 編)
武田幸男, 1985 「四～五世紀の朝鮮諸国」『シンポジウム好太王碑』
白石太一郎, 2002「倭と加耶の交流の歴史的意義」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』(第五回国立歴史民俗博物館国際シンポジウム, 佐倉)
福山敏男, 1951 「石上神宮の七支刀 補考」『美術研究』162
福山敏男, 1951 「石上神宮の七支刀」『美術研究』158
福山敏男, 1952 「石上神宮の七支刀 再補」『美術研究』165
福永伸哉, 1998 「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格－4～5 世紀における日韓交渉の考古学的再検討－」『青丘学術論集』12 (財 韓国文化研究振興財団)
榧本杜人, 1952 「石上神宮の七支刀と其銘文」『朝鮮学報』3 (朝鮮学会, 天理)
濱田耕策, 1974 「高句麗広開土王碑文の研究－碑文の構造と史臣の筆法を中心として－」『朝鮮史研究会論文集』11 (竜渓書舎, 東京)
山尾幸久, 1978 「任那に関する一試論－史料の検討を中心に－」『古代東アジア史論集』下巻 末松保和博士古稀記念会編(吉川弘文館, 東京)
山尾幸久, 1989 「百済三書と日本書紀」『古代の日朝関係』(塙書房, 東京)
山田良三, 2000 「筒形銅器の再考察」『橿原考古学研究所紀要 考古学論集』第23 冊 (奈良)
三宅米吉, 1898 「高麗古碑考」『考古学雑誌』第 2 編 第1～3 号 (日本考古学会)

三宅米吉, 1898 「高麗古碑考追加」『考古学雑誌』第2編 第5号（日本考古学会）
三品彰英, 1962 「百済記・百済新撰・百済本記」『日本書紀朝鮮関係記事考証(上)』(吉川弘文館, 東京)
三品彰英, 1962 「石上神宮の七支刀」『日本書紀朝鮮関係記事考証』上（吉川弘文館, 東京）
上田正昭, 1971 「石上神宮と七支刀」『日本なかの朝鮮文化』9
西田長男, 1956 「石上神宮の七支刀の銘文」『日本古典の史的研究』(理想社)
星野恒, 1892 「七枝刀考」『史学雑誌』37 (東京)
成正鏞, 2003 「百済漢城期 騎乗馬具の様相と起源」『古代武器研究』4（古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室, 彦根）
小野山節, 1959 「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系三 日本3 古墳時代』(平凡社, 東京)
小野山節, 1966 「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』52-2 (日本考古学会)
松木武彦, 1999 「古墳時代の武装と戦闘」『戦いのシステムと対外戦略』(東洋書林, 東京)
水谷悌二郎, 1959「好太王碑考」『書品』100号
神保公子, 1981 「七支刀銘文の解釈をめぐって」『東アジア世界における日本古代史講座』3
延敏洙, 1994 「七支刀銘文の再検討－年号の問題と製作年代を中心に－」『年報 朝鮮学』第4号
鈴木英夫, 1987 「加耶・百済と倭－‘任那日本府’論－」『朝鮮史研究会論文集』24
鈴木靖民, 1983 「石上神宮七支刀銘についての一試論」『坂本太郎頌寿記念日本史学論集』上
鈴木靖民, 1984 「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」『岩波講座 日本歴史』1 (原始・古代1, 岩波書店, 東京)
鈴木靖民, 1988 「武(雄略)の王権と東アジア」『雄略天皇とその時代』(吉川弘文館, 東京)
鈴木靖民, 1988 「好太王碑の倭の記事と倭の実体」『好太王碑と集安の壁画古墳』(読売テレビ放送編, 木耳社, 東京)
鈴木靖民, 1990 「歴史学と民族学(文化人類学)－日本古代史における首長制社会論の試み－」『日本民俗研究大系』10 (国学院大学, 東京)
鈴木靖民, 2002 「倭国と東アジア」『倭国と東アジア』(鈴木靖民編, 日本の時代史 2, 吉川弘文館)
栗原朋信, 1970 「七支刀の銘文よりみた日本と百済 東晋の関係」『歴史教育』18-4
前間恭作, 1919 「輯安高句麗広開土王陵碑」『朝鮮金石総覧』上
田中晋作, 1990 「百舌鳥・古市古墳群の被葬者の性格について」『古代学研究』122 (古代学協会)
田中晋作, 1998 「筒形銅器について」『古代学研究』151
田中晋作, 2000 「巴形銅器について」『古代学研究』151
田中琢, 1991 「倭人争乱」『日本の歴史』2 (集英社, 東京)
鮎貝房之進, 1937「日本書紀朝鮮関係地名攷」『雑攷』7 上・下巻
井上光貞, 1980 「雄略期における王権と東アジア」『日本古代史講座』4 (学生社, 東京)
早乙女雅博・東野治之, 1990「朝鮮半島出土の有銘環頭大刀」『MUSEUM』467
酒井清治, 2001 「倭における初期須恵器の系譜と渡来人」『4～5世紀 東亜細亜 社会와 加耶』(第7回加耶史国際学術会議発表要旨, 金海)
中村潤子, 1991 「騎馬民族説の考古学」『考古学 その見方と解釈』(筑摩書房)
津田左右吉, 1913「任那疆域考」『朝鮮歴史地理研究』1
請田正幸, 1974 「六世紀前期の日朝関係－任那‘日本府’を中心として－」『朝鮮史研究会論文集』11;

1974『古代朝鮮と日本』(朝鮮史研究会編, 竜渓書舎, 東京)
村上英之助, 1978「考古学から見た七支刀の製作年代」『考古学研究』25-3
樋口隆康, 1972 「武寧王陵出土鏡と七子鏡」『史林』55-4
坂本太郎, 1961 「継体紀の史料批判」『国学院雑誌』62-9
穴沢義功, 2002 「日本古代の鉄生産」『第5回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』(国立歴史民俗博物館, 佐倉)
和田晴吾, 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版日本の古代』5, (角川書店, 東京)
横井忠直, 1889 「高句麗古碑考」『会余録』第5集(亜細亜協会)

論文(中国語)

金毓黻, 1934 「晉高麗好太王碑」『奉天通志』
羅振玉, 1909 「高麗好太王碑釈文」『神州国光集』第9集
栄禧, 1903 「高句麗永樂太王墓碑文」『古高句麗永樂太王墓碑文攷』

【史 料】

4世紀 韓日関係史 関連史料

《広開土王陵碑文 原文》

9	8	7	6	5	4	3	2	1		
又	不	其	若	家	城	城	殘		1	第
制	安	不	吾	爲	一	國	南		2	四
守	石	知	萬	看	家	烟	居		3	面
墓	碑	法	年	烟	爲	二	韓		4	
人	致	則	之	國	國	看	國	七	5	
自	使	復	後	岡	烟	烟	烟	也	6	
今	守	取	安	上	那	八	一	利	7	
以	墓	舊	守	廣	旦	瑑	看	城	8	
後	人	民	墓	開	城	城	烟	三	9	
不	烟	一	者	土	一	國	五	家	10	
得	戶	百	但	境	家	烟	大	爲	11	
更	差	十	取	好	爲	一	山	看	12	
相	錯	家	吾	太	看	看	韓	烟	13	
轉	唯	合	躬	王	烟	烟	城	豆	14	
賣	國	新	巡	存	勾	八	六	奴	15	
雖	岡	舊	所	時	牟	味	家	城	16	
有	上	守	略	教	城	城	爲	國	17	
富	廣	墓	來	言	一	六	看	烟	18	
足	開	戶	韓	祖	家	家	烟	一	19	
之	土	國	穢	王	爲	爲	農	看	20	
者	境	烟	令	先	看	看	賣	烟	21	
亦	好	卅	備	王	烟	烟	城	二	22	
不	太	看	洒	但	於	就	國	奧	23	
得	王	烟	掃	教	利	咨	烟	利	24	
擅	盡	三	言	取	城	城	一	城	25	
買	爲	百	教	遠	八	五	看	國	26	
其	祖	都	如	近	家	家	烟	烟	27	
有	先	合	此	舊	爲	爲	七	二	28	
違	王	三	是	民	看	看	閏	看	29	
令	墓	百	以	守	烟	烟	奴	烟	30	
賣	上	卅	如	墓	比	彡	城	八	31	
者	立	家	教	洒	利	穰	國	須	32	
刑	碑	自	令	掃	城	城	烟	鄒	33	
之	銘	上	取	吾	三	廿	二	城	34	
買	其	祖	韓	慮	家	四	看	國	35	
人	烟	先	穢	舊	爲	家	烟	烟	36	
制	戶	王	二	民	看	爲	廿	二	37	
令	不	以	百	轉	烟	看	二	看	38	
守	令	來	廿	當	細	烟	古	烟	39	
墓	差	墓	家	羸	城	散	牟	五	40	
之	錯	上	慮	劣	三	那	婁	百	41	

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
城	炅	看	家	人	民	鴨	□	□	□	□	□	□	□	1	第
四	古	烟	爲	國	四	盧	□	城	□	□	□	□	□	2	三
家	城	勾	看	烟	家	凡	王	廿	合	□	□	□	□	3	面
爲	國	牟	烟	一	盡	所	恩	年	戰	鋒	□	城	□	4	
看	烟	客	南	看	爲	攻	普	庚	斬	相	朝	安	□	5	
烟	一	頭	蘇	烟	看	破	覆	戍	煞	遇	貢	羅	□	6	
各	看	二	城	冊	烟	城	於	東	蕩	王	十	人	□	7	
模	烟	家	一	三	于	六	是	夫	盡	幢	四	戍	□	8	
盧	三	爲	家	梁	城	十	旋	餘	所	要	年	兵	□	9	
城	客	看	爲	谷	一	四	還	舊	穫	截	甲	昔	□	10	
二	賢	烟	國	二	家	村	又	是	鎧	盪	辰	新	□	11	
家	韓	求	烟	家	爲	一	其	鄒	鉀	刺	而	羅	□	12	
爲	一	底	新	爲	看	千	慕	牟	一	倭	倭	寐	□	13	
看	家	韓	來	看	烟	四	化	王	萬	寇	不	錦	□	14	
烟	爲	一	韓	烟	碑	百	隨	屬	餘	潰	軌	未	□	15	
牟	看	家	穢	梁	利	守	官	民	領	敗	侵	有	□	16	
水	烟	爲	沙	城	城	墓	來	中	軍	斬	入	身	□	17	
城	阿	看	水	二	二	人	者	叛	資	煞	帶	來	□	18	
三	旦	烟	城	家	家	烟	味	不	器	無	方	服	□	19	
家	城	舍	國	爲	爲	戶	仇	貢	械	數	界	事	□	20	
爲	雜	蔦	烟	看	國	賣	婁	王	不	十	□	□	□	21	
看	珍	城	一	烟	烟	勾	鴨	躬	可	七	□	□	□	22	
烟	城	韓	看	安	平	余	盧	率	稱	年	□	□	□	23	
幹	合	穢	烟	夫	穰	民	卑	往	數	丁	□	□	□	24	
氐	十	國	一	連	城	國	斯	討	還	未	□	廣	□	25	
利	家	烟	牟	廿	民	烟	麻	軍	破	教	石	開	□	26	
城	爲	三	婁	二	國	二	鴨	到	沙	遣	城	土	辭	27	
國	看	看	城	家	烟	看	盧	餘	溝	步	□	境	□	28	
烟	烟	烟	二	爲	一	烟	橢	城	城	騎	連	好	□	29	
一	巴	廿	家	看	看	三	社	而	婁	五	船	太	□	30	
看	奴	一	爲	烟	烟	東	婁	餘	城	萬	□	王	□	31	
烟	城	古	看	□	十	海	鴨	□	□	□	□	□	□	32	
三	韓	模	烟	谷	訾	賈	盧	國	住	□	□	□	□	33	
弥	九	耶	豆	三	連	國	肅	駭	城	□	王	□	□	34	
鄒	家	羅	比	家	二	烟	斯	□	□	□	躬	□	□	35	
城	爲	城	鴨	爲	家	三	舍	□	□	□	率	寐	□	36	
國	看	一	岑	看	爲	看	鴨	□	□	□	□	錦	□	37	
烟	烟	家	韓	烟	看	烟	盧	□	□	□	□	□	□	38	
一	臼	爲	五	新	烟	五	□	□	□	□	從	□	殘	39	
看	模	看	家	城	俳	敦	□	□	□	□	平	僕	□	40	
烟	盧	烟	爲	三	婁	城	□	□	那	師	穰	勾	潰	41	

第二面

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
		特	通	息	迷	歸	城	城	利	1
		遣	王	愼	之	穴	曾	燕	城	2
		使	巡	土	愆	□	□	婁	弥	3
		還	下	谷	錄	便	城	城	鄒	4
		告	平	因	其	圍	□	析	城	5
		以	穰	便	後	城	□	支	也	6
		密	而	抄	順	而	盧	利	利	7
	卻	計	新	得	之	殘	城	城	城	8
	乘	十	羅	莫	誠	主	仇	巖	大	9
	背	年	遣	□	於	困	天	門	山	10
	急	庚	使	羅	是	逼	城	□	韓	11
	追	子	白	城	得	獻	□	城	城	12
	至	敎	王	加	五	□	□	□	掃	13
	任	遣	云	太	十	男	□	城	加	14
	那	步	倭	羅	八	女	□	□	城	15
	加	騎	人	谷	城	生	□	□	敦	16
十	羅	五	滿	男	村	口	其	□	拔	17
九	從	萬	其	女	七	一	國	□	城	18
盡	拔	往	國	三	百	千	城	□	□	19
煞	城	救	境	百	將	人	殘	□	□	20
抑	城	新	潰	餘	殘	細	不	□	□	21
徙	卽	羅	破	人	主	布	服	利	城	22
安	歸	從	城	自	弟	千	義	城	婁	23
羅	服	男	池	此	并	匹	敢	就	賣	24
人	安	居	以	以	大	跪	出	鄒	城	25
戍	羅	城	奴	來	臣	王	迎	城	散	26
兵	人	至	客	朝	十	自	戰	□	那	27
師	戍	新	爲	貢	人	誓	王	拔	城	28
□	兵	羅	民	服	旋	從	威	城	那	29
□	拔	城	歸	事	師	今	赫	古	旦	30
□	新	倭	王	九	還	以	怒	牟	城	31
□	羅	滿	請	年	都	後	渡	婁	細	32
其	□	其	命	己	八	永	阿	城	城	33
□	農	中	太	亥	年	爲	利	閏	牟	34
□	城	官	王	百	戊	奴	水	奴	婁	35
□	倭	軍	恩	殘	戊	客	遣	城	城	36
□	寇	方	慈	違	敎	太	刺	貫	于	37
□	萎	至	矜	誓	遣	王	迫	奴	婁	38
□	潰	倭	其	与	偏	恩	城	城	城	39
□	城	賊	忠	倭	師	赦	□	彡	蘇	40
言	夫	退	誠	和	觀	先	□	穰	灰	41

第一面

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
利	首	由	羊	永	弔	二	龍	連	巡	惟	1
城	攻	來	不	樂	卅	九	首	葭	幸	昔	2
雜	取	朝	可	五	有	登	昇	浮	南	始	3
珍	壹	貢	稱	年	九	祚	天	龜	下	祖	4
城	八	而	數	歲	寔	号	顧	然	路	鄒	5
奧	城	倭	於	在	駕	爲	命	後	由	牟	6
利	臼	以	是	乙	棄	永	世	造	夫	王	7
城	模	辛	旋	未	國	樂	子	渡	餘	之	8
勾	盧	卯	駕	王	以	太	儒	於	奄	創	9
牟	城	年	因	以	甲	王	留	沸	利	基	10
城	各	來	過	稗	寅	恩	王	流	大	也	11
古	模	渡	襄	麗	年	澤	以	谷	水	出	12
模	盧	□	平	不	九	洽	道	忽	王	自	13
耶	城	破	道	□	月	于	興	本	臨	北	14
羅	幹	百	東	□	廿	皇	治	西	津	夫	15
城	氐	殘	來	人	九	天	大	城	言	餘	16
莫	利	□	□	躬	日	威	朱	山	臼	天	17
□	城	□	城	率	乙	武	留	上	我	帝	18
□	□	新	力	往	酉	振	王	而	是	之	19
□	□	羅	城	討	遷	被	紹	建	皇	子	20
□	城	以	北	過	就	四	承	都	天	母	21
城	閣	爲	豊	富	山	海	基	焉	之	河	22
□	弥	臣	五	山	陵	掃	業	不	子	伯	23
而	城	民	備	負	於	除	遝	樂	母	女	24
耶	牟	以	貊	山	是	□	至	世	河	郎	25
羅	盧	六	遊	至	立	□	十	位	伯	剖	26
城	城	年	觀	鹽	碑	庶	七	天	女	卵	27
瑑	弥	丙	土	水	銘	寧	世	遣	郎	降	28
城	沙	申	境	上	其	其	孫	黃	鄒	世	29
於	城	王	田	破	勳	業	國	龍	牟	生	30
利	□	躬	獵	其	績	國	岡	來	王	而	31
城	舍	率	而	三	以	富	上	下	爲	有	32
農	蔦	□	還	部	示	民	廣	迎	我	聖	33
□	城	軍	百	落	後	殷	開	王	連	□	34
城	阿	討	殘	六	世	五	土	王	葭	□	35
豆	旦	伐	新	七	焉	穀	境	於	浮	□	36
奴	城	殘	羅	百	其	豊	平	忽	龜	□	37
城	古	國	舊	營	詞	熟	安	本	應	□	38
沸	利	軍	是	牛	日	昊	好	東	聲	□	39
□	城	□	屬	馬		天	太	岡	卽	命	40
□	□	□	民	羣		不	王	履	爲	駕	41